

グリモア～私立グリモワール魔法学園～ つなげる想い 届けたい
言葉

春夏 冬

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界に6つ存在する魔法使いを養成する機関、魔法学園。

その中の一つ、日本に存在する【私立グリモワール魔法学園】に、ある日一人の少年が転校してくることとなる。

無尽蔵の魔力を持ちながら、それを他人に譲渡できる有史以来の異例の存在、【人類の希望】とまで呼ばれる少年、“転校生”。

これは、そんな“転校生”と、学園で共に過ごす少女たちとの、ほんの一時を綴った物語。

最新話 「リーズン・フォー・ビーイング」 2019年01月03日公開

目次

幾度迎える季節	1
雪解けのオルゴール	
雪解けのオルゴール 前編	16
雪解けのオルゴール 中編	25
雪解けのオルゴール 後編	31
雪解けのオルゴール エクストラ	38
梓ちゃん、転校生に困惑する。	
梓ちゃん、転校生に困惑する。	51
梓ちゃん、後悔する。	58
つなげる想い 届けたい言葉 ～アフターストーリー～	
プロローグ	71
冬樹 イヴ 《前編》	77
冬樹 イヴ 《後編》	86
服部 梓 《服部という忍者》 予告	97
ぐりもあ しよくとすとくりく	
ぐりもあ しよくとすとくりく ①	99
グリモア アナザーエピソード	
願いをあなたに	108
野薔薇たるあなたへ	121
続・冬樹物語	127
これは私の物語	139
リーズン・フォー・ビーイング	151

幾度迎える季節 幾度迎える季節

「うう……なんでここのも昼と夜の気温は違うんだろう」

時刻は午後11時。

昼間は暑い夏らしい日差しを受けながらも夜はぐっと冷え込む、この気温の落差に愚痴を零しつつ、僕は町中を歩いていく。

いつもであれば眠りに就こうとする時間帯だし、なによりこんな時間に出歩いていれば風紀委員に見つかって反省文を書かされることは請け合いだ。下手をすれば懲罰房に連れて行かれるなんてことも……そういえば懲罰房ってどこにあるんだろう？

なんてことを考えている内に目的地に到着した。宿から一番近いコンビニだ。

ズボンのポケットに突っ込んだメモを片手に店に入り、夏海たちから頼まれたものを探し始める。

智花は飲み物で……怜はデザート。夏海は、パンツ!? 嘘でしょ!?
夏海っ!!

今頃腹を抱えて笑っているであろう夏海を想像しつつ、いつか仕返しをしてやろうと固く決意をする。

差し当たっては夏海の飲み物を炭酸飲料にしてシェイクしてやることから始めるとして、「目的の物」がないことを祈り……まあ、あるよね。

はあ……と深いため息を吐きつつ残りの買い物を済ませようとする僕は、……ふと自分が財布を持っていないことに気が付く。

とことんついてないな……と落胆しながらもデバイスを手に取り連絡を取ることにする。

と、その時、

「あつ、転校生さん。やっぱりここだったんですね」

背中越しに掛けられた声に振り向くと、そこには宿に居るはずの智花が立っていた。

「…もしかして、財布かな？」

「はい。お財布、忘れてますよ？」

そんななんとも言えない軽いやり取りをしつつ、僕たちはどちらともなく笑い始める。

なんだか情けないような、でもなんだかちよつと温かい不思議な感じ。

「ごめんね智花。罰ゲームでもないのにわざわざ届けてもらって」

「いえいえ、それよりも早くお買い物を済ませちゃいましょう！じやないと……」

「夏海が怒り出すから、でしょ？」

「もうっ、そんなこと言っていると本当に夏海ちゃんが怒っちゃいますよ？…ふふっ」

「いや、智花も笑ってるよね？」

つと、そうこうしている間に時間も過ぎてしまうことだし、さっさと帰らないと夏海はともかく怜にまで迷惑が掛かってしまう。そんなことを考えながらレジに向かう僕は、ふとある商品に目を奪われた。

「どうしたんですか転校生さん？」

「うん、ちよつと懐かしいものを見つけてさ……」

そう言いつつ、僕は「それ」を手を取った。

幾度迎える季節

「海に行きたい……」

事の始まりは夏海の一言だった。

季節は夏を迎え例年の如く猛暑日が続く中、テーブルに突っ伏した夏海は消えそうな声で願望を口にする。

「悪いがそうだった目的の外出は許可が下りないんだ」

「でも、夏海ちゃんの気持ちは分かるかな。確かに今年の夏はいつも

より暑く感じるかも」

そんな願いを冷静に切り返したのは、しかし同じ気持ちでいるのであろう汗をかく怜。

表情こそ落ち着きを見せているものの、やはり暑いものは暑いと言うことだろう。

一方の同じ気持ちだと話すのは二人に比べると幾分涼しげな表情の智花。

いわく料理をしていると自然と熱さに慣れるとのことだが、はたして彼女のいう「料理」とは何かなものなのか？

と、そんな智花の言葉にバツと顔を上げた夏海は、ここぞと言わんばかりに声を挙げる。

「でしょ!?! やっぱり今年の夏はおかしいのよ!! これじゃああたしのカメラも駄目になっちゃやし……これはもう海に行くしかないわね!!」

「いや、気温は例年通りだし、カメラはべつに暑さでどうこうなるものじゃないんじや……」

「はあ……。転校生はそんなだから優柔不断だとか不純異性交遊常習犯とか言われんのよ」

「ええ……、というか僕ってそんな風に言われてるの!?!」

夏海の言葉にさらっと傷付いた僕こと〃転校生〃だが、まあいつもの事なので表情に出すこともない。そんなことで動揺しては個性豊かなこの学園ではやっていけないのだ。

「こら夏海。転校生が傷ついているじゃないか!!」

「そうだよ、こんなに落ち込んじゃって……」

「いや……その、悪かったって!」

「ハハハ、ゼンゼンキニシテナイカラダイジヨウブダヨ」

駄目だったかあ……うん、話を変えよう。

……ん?」

「ふうん、海か。今度みんなでクエストに行くことになってるけど、それじゃあ駄目なのかい?」

「それはそれ、これはこれよ! なんていうか……あたしたちだけで

行く、ってところが重要なのよ!」

「で、浜辺で水着になった彼女たちを前に、夏海はどうするんだい?」
「そうね、こう開放的になった智花と怜が転校生に迫ったりすればスクープになるし、意外と転校生の水着姿って需要が……って部長!!」
「おやおや、今頃気が付くなんて……ジャーナリストたるもの常に注意深くあたりを観察しなくちゃ駄目だろう?」

そう言いながら夏海の背後に立つのは報道部部長の遊佐先輩だ。
いつもながらに不敵に笑いつつ誰に気付かれることもなく場に現れるのは、まあいつもの事なのでさすがに慣れてくる。

というか、それよりも……。

「まさか夏海……ネタに困って……」

「ちつがうわよー! いまのは部長にのせられただけで……えっ、なんでみんなそんな目で見るの!?!」

「日ごろの行い、というやつだよ夏海」

「すみません、それは部長にだけは言われたくないです」

「ふふふっ。ひどいなあ夏海は。せっかくな情報を持ってきてあげたのに……例えばそうだね。浜辺周辺で受けられるクエスト、とか……」

「もう、ずっと尊敬してましたよ部長!!」

「夏海……お前なんて現金なやつなんだ……」

呆れるように呟く怜に、僕と智花は思わず苦笑いを浮かべる。

でも、たしかに合法的に海に行けるなんともありがたいクエストだけれど……。

「あれ、遊佐先輩。そんなクエストって発令されていましたっけ?」

「ああ、これはきつと人気が出ると思ったから早いうちに夏海たちに伝えようと思っただけ。ほら、そろそろ来るよ?」

と、言い終わるが早いかな唐突にデバイスが鳴り始め、そこには遊佐先輩が話していたクエストの受注画面が表示されていた。

……相変わらずですね、遊佐先輩。

それから次の日、僕たちは【海の家のお手伝い】のクエストを遂行

するため海へとやって来た。

潮風が涼しく、学園にいる時とは大違いだと思えるほどに快適な環境に、夏海の言い分にも一理あると不本意ながらに同意する。

ただし、それは海の家に着くまでの事だった……なぜならば、

「怜ちゃん！ 2番テーブルに焼きそばを二人前！」

「分かった！ ほら夏海、ぼさつとしてないで手を動かせ！ 転校生、悪いがこちらのフォローを頼む！」

「了解！ あつ、はい。ただいま伺いますのでお待ちください！」

「智花！ 焼きそば出来たわよ！ ……ああ、もおお!! 何でこんなことになるのよ!!」

僕たちはあくまでクエストを遂行するためにやって来たからだ。

良く考えてみればクエストが発令された時点で気が付くべきだったのだ。

【魔物討伐】でもないのに急遽としてクエストが発令されたということは、要するに「大変」であるはず。

また、『海に行ける』という理由から簡単に受注してしまったが、よく内容を確認してみれば忙しそうなお客さんは目に見えていた。

つまり、今のこの現状は、目先の欲に捕らわれた僕たちの“結果”というわけである。

「うわーん！ あたしのバカンスが!! スcoopが!!」

「こら夏海。お客さんに聞こえるだろ！ もう少して落ち着くのとだから頑張るぞ!!」

「もう一息だよ夏海ちゃん！ はい、かき氷をお待たせしました！」

「智花、それはこつちのお客さんだよ！ はい、こちらカレーライスです」

目まぐるしいお客さんの波に負けないように身体を動かす僕たち四人。

初めは智花が厨房に入ると言って聞かなかつたのだが、僕たち三人

は何かそれを踏み留めて厨房の手伝いは夏海と怜が、注文の受け付けやレジは僕と智花が担当しながら仕事をこなしていく。

後で分かったことだが、元々利用客が多かったことに加え、智花たち三人の可愛い女の子がいたことも大きかったのか、店主の予想を上回る売り上げを記録することとなった。

そりゃあ忙しいわけだよ、なんて笑っていた店主に夏海が苛立った表情を向けそうになるが、その店主からとある依頼を受けると同時に満面の笑みに変わる。

そして、その依頼とは僕たちがもう一日手伝いをする、という内容であった。

「しかし、よく学園側も外泊許可など出したものだな」

「んー、たまにあるみたいよ。ねえ、それよりどんな水着を持ってきたのか見せなさいよ！」

「もうっ夏海ちゃん！ 転校生さんのいる前でそういうことしないの！」

「だいじょーぶ！ 転校生もこんなに可愛い美少女たちの水着姿には感激するしかないでしょ？」

「えっと……」

「そこは即答しなさいよ！ ……もうっ」

本来であれば、夕方ころまで仕事をした後、日帰りする予定だったのだが、明日もクエストを継続するという理由から店主の知り合いが経営しているという民宿で一晩過ごす事となった。

学園から外泊許可が下りたことを意外に感じながらも、僕たちはちよつとした旅行気分を楽しんでいる。

さて、『もう一日お手伝いする』という内容に夏海が喜んだのには大きな理由がある。

それは、正確に言えば『お昼の時間だけ手伝う』という限定的な内容であることと、それ以降は自由に過ごしていいという店主からの好意によるものだ。

元々の予定からすれば、海の家で仕事を終えたと同時に帰らなくて

はいけなかったのだが、一日増えたことによりスケジュールに若干の余裕が生じ、結果として海で遊べるようになった、というカラクリだ。とはいえ、あの殺人的な忙しさをもう一日過ごさなくてはいけないわけだが、おそらく夏海の頭からは消えていることだろう。

「つと、もうこんな時間か……。それじゃあ僕はそろそろ部屋に戻るよ」

「ええつくつく！ そんなこと言わずにもうちよつと遊ぶわよ！ ほら、智花と怜も寂しいって言ってるわよっ！」

「な、夏海ちゃん！ わたしはそんなこと言っていないよー！」

「そ、そうだぞ！ 転校生も誤解しないでくれ！」

「……っ、あははっ。ほ、ほら転校生、と、智花たちもこう言ってるじゃない。……くくくっ」

「ああ、うん……。ええつと」

「夏海（ちゃん）!!」

そんなやり取りをしつつ、結局帰るタイミングを逃した僕は彼女たちの部屋でゆつたりとした時間を過ごしていく。

風紀委員である怜から注意されるかと思っただが、彼女も束の間の良好気分を味わっているのか水を差すようなことは言わずに雰囲気を楽しんでいるようだった。

その点、智花の方は遅い時間まで僕いることが落ち着かなかつたようだが、夏海のペースにはまり普段通りの様子に戻ったようである。さすがは夏海。

そしてその後、夏海が持ってきたトランプでゲームを行い、負けた僕が罰ゲームで買い出しに出かけたことから今に至る。なんとも慌ただしい一日だったことで。

「……まあ、まだ終わってないんだけどね」

「えっ、何か言いましたか？」

「ううん、何でもなし。さて、早く帰ろうか」

あの後、会計を済ませた僕たちはそれぞれの手にビニール袋を引っさげて宿への帰路につく。

こんな時間まで起きていることが珍しいのか、ちよつぱり眠そうな顔をしている智花を微笑ましく思いつつ、僕は今日あったことを振り返っていた。

本当にグリモアに転校してからというものの飽きることの無い日常ばかりだと、そんな風に感傷に浸っていた僕だが、ふと隣を歩く智花の物憂げな表情が目映る。

「どうかしたの智花？」

「えっ。い、いや、なんでもないんです！」

そういつつもやはり表情が暗い智花は、心配そうな僕の顔を見るとやがて観念したかのようにポツリポツリと話し始めた。

「……わたし、時々怖くなるんです。楽しい時間が過ぎれば過ぎるほど、この幸せな時間が終わりを迎えてしまうんだって……」

そう呟く智花の足はその場で止まってしまふ。

そして、少しずつ潤み始めた目を僕に向け、言葉を繋ぐ。

「もちろんわたしだって辛い毎日よりも楽しい時間を過ごす方がいいです！ でも、やっぱり怖い……」

「……智花……」

「……ねえ、転校生さん。わたしは何で時間停止の魔法なんて使っているんでしょうね？」

それは、未だ誰にも分かっている謎。

「希望、なんて呼んでいる人もいますけど、本当にそうなんでしょうか？」

それは、本人すらも知り得ていない未知。

「もしかしたら、これはわたしが『ずっとこのままでもいい』と願っただけで」

だからこそ、誰よりも本人が一番不安に感じるのは当たり前で、

「だから、これはやっぱりわたしの自分勝手な願いが引き起こした現象で……それでみんなを巻き込んで……!!」

「智花」

「だから……だから……!!」

「……智花……!!」

「……っ!!」

「ごめんね、智花」

だからこそ、誰かが守ってあげなきゃいけなかったんだ。

僕は震える彼女の身体を抱きしめる。

大丈夫、ここにいろよ。そんな風に、彼女に熱を伝えるように……。

「あ、あの転校生さん……もう大丈夫なので……その……」

「えっ、あつ、ごめん!」

どれくらいの間が経ったのだろうか。

今になって気恥ずかしさが込み上げてきてパッと智花から離れる

……一瞬智花が名残惜しそうに見えたのは僕の気のせいだろう。

というか、慣れないことなんかするから顔が熱くて……いや、というよりも。

「ご、ごめん!!」

「ご、ごめんなさい!!」

突然の勝手な行動に謝ろう……と思いきや、ふと声が重なったことに驚きつつ智花の顔を見ると、彼女の顔も真っ赤で……。

「……ふふふつ。あははは。て、転校生さん。か、顔が真っ赤で……!」

「……いやいや、と、智花だって……あはははっ……!!」

もう日付も変わろうという時間なのに僕たちは笑い続ける。

町中で迷惑かもしれないけど、今だけは多めに見て欲しい。

「も、もうっ！ て、転校生さん！」

「ご、ごめんってば！」

そしてようやく落ち着きを取り戻した僕たちは、一息ついた後どちらともなく歩き出す。

ただ、そこにはもうさつきまでの暗い空気は流れていなかった。

「僕もさ……最初の頃ってやっぱり怖かったんだ」

「転校生さんも……ですか？」

「そりやあね。だって急に『人類の希望』、だよ？」

そう苦笑いしつつ話しをする僕に、智花は意外そうな顔をする。

「そんな風に見えたことはなかったですけど……」

「そうかもしれないね。転校早々に智花とクエストに出勤したり、他にも色々あつて気が付くと気にならなくなっていたのかも」

でも、

「でも、やっぱり何よりも勇気づけられたのは智花の言葉だよ」

「わたしの言葉、ですか？」

「うん。智花は僕に言ってくれたよね。『ようこそ魔法学園へ』って。あの言葉を聞いた時、僕は僕自身が“特別な何か”なんかじゃなくて、みんなと同じ魔法使いなんだって思ったんだ。……うん、智花にとってはその一言だったのかもしれないけれど、僕にとっては本当に嬉しい言葉だったんだ」

「……転校生さん……」

そう話した後、今度は僕が足を止めて彼女に向き合い、そして言葉を紡ぐ。

「だから、そんな言葉で救われた僕だからこそ、今度は君を支えたいと思う」

「えっ？ それはどういう……」

「智花。僕は……」

ドシャーン!!

その時物陰から派手な音が鳴り響く。

「ああー!! ちよつと怜、押さないでよ!」

「い、いや、私は何も!! ち、違うぞ智花、転校生。こ、これは……」

「夏海ちゃん!! 怜ちゃん!! どうしてここに?」

「い、いやあ……だつて二人ともなかなか帰つてこないから、これはもしかしてと思つて」

「す、すまん。 智花。 せつかくの雰囲気を台無しにしてしまつて……」

「な、夏海ちゃん、怜ちゃん!! ……もうっ。」

「はあ……。まあなんとも「らしい」かな、なんて思いつつふとあれ〃を買つた事を思い出す。

ふと隣を見ると、智花も同じことを思ったのかこちらを見て頷く。

「夏海、怜。 花火、やらない?」

「いやー、転校生も分かつてるじゃないの! やつぱり夏と言えば花火よね!」

「そうだな。あまり馴染みのないものだが、こうして見ると面白いものだな」

「学園じゃ花火なんて出来ないからね。こういう時でないと楽しめないかなつてさ」

そう、コンビニで見つけたのは花火だ。

子供のころには、よく夏休みに家族なんかで楽しんだりするのだが、年を重ねるごとにこういった小さい花火からは卒業してしまうのが一般的だといえるのかもしれない。

学園に来てからは何度か機会があったのだが、それでもやつぱり感傷に浸つてしまうあたりが「そういったもの」なのだろう。

そんなことを考えつつ、近くの浜辺にやつて来た僕たちは次々と花火を楽しんでいく。

ねずみ花火に間違えて火をつけて〃踊る〃羽目になった智花に、打ち上げ花火を手にもつたまま暴発させる夏海、その打ち上げ花火の中

から「おまけ」が出てきたことに驚きつつ少し嬉しそうな怜。

誰もかれもが楽しそうに笑いつつ、最後は線香花火で締めることになる。

そして、そんな最後の“名残”を感じながら、夏海はポツリと言葉を口にした。

「……智花さあ。誰も気にしてないから」

「えっ？ どうしたの夏海ちゃん？」

視線を線香花火からそらさずに話す夏海に対し、智花はその言葉の意味を考える。

「……すまない智花。さっきの転校生との話を聞いてしまったんだ。全部というわけではないんだが……」

言葉を繋げたのは、こちらは智花の顔を見て話す怜。

「智花はさ、自分のせいかもしれないけど、もしかしたら別の別にならそれでいいんじゃない？」

「……夏海ちゃん」

「ごめんね転校生。本当はさ、さっきそれを言いたかったんでしょ？」

あっ、落ちちゃった。見つめていた線香花火が消えた後、そう呟きつつ今度は僕の顔を見る夏海。

少ししてから、今度は僕の線香花火も地面に消えた。

「夏海が謝ることじゃないよ。むしろ、代わりに気持ちを伝えてくれたことに驚いてるくらい」

「何よそれ？ あたしだって繊細な乙女なんだからね」

はいはい。なんて、そんな風に笑う僕たちは、いつの間にか消えた線香花火を見つめ続けている智花に目を移す。

「智花。花火、楽しかっただろ？ 僕はさ、こんな楽しい時間なら何度でも過ごしたいと思うし、もし辛い時間が繰り返されるのだとしても、何度だって乗り越えてみせるよ。だって、その度に僕たちは前を向くことが出来るのだから」

「……私は、転校生や智花のように特別な力は持っていないし、生徒会長のような強さも持ち合わせていない。しかし智花、お前のお陰で少

しずつでも強くなつていけるんだ。そしてそれはきつと、大勢の学園生が同じ気持ちだと思う」

「そうよ。だいたい智花の魔法があるからこそ私たちは生き残っているわけでしょ？ だったら文句を言うやつなんているわけないし、いたらあたしがネタにしてやるわよ!! だから胸を張りなさい智花! アンタが一番アンタ自信を認めてあげなくちゃ!!」

そんな風に気持ちを伝える僕たちに、顔を上げた智花は胸から言葉を押し出すように問いかける。

「転校生さん、怜ちゃん、夏海ちゃん……わたし、いいのかな。大丈夫だよって、自分を許しちゃってもいいのかな……?」

だから、僕はこう答えよう。

「胸を張ろうよ智花。僕たちは、君のお陰で『今』を歩いていけるんだから!」

「……はい……はい!!」

そして今夜二度目の抱擁を、今度は泣きじやくる智花を胸に抱く。そんな僕たちを冷やかすこともなく、夏海と怜は温かく見守つてくれていた……。

「しっかし『胸を張れ』か。『話題の転校生。女子生徒にセクハラを強要する』……ってどうよ?」

「なんで夏海はそうやっていい話を台無しにするのかな!」

あれから智花が落ち着きを取り戻した後、僕たちは花火の後片付けを済ませる。

日付なんてとうに過ぎてしまい明日に備えての睡眠時間もあまり取れないわけだが、そんなことよりも大切な時間を共有した。と思つてた矢先にこの一言……本当、夏海はブレないな。

「あつ。そういうえば転校生。ちゃんと罰ゲームは済ませたんでしようね?」

「当たり前だよ。智花は飲み物で、怜はデザート。それで夏海は……はいパンツ」

「パ、パンツ!? 夏海、お前そんなものを頼んでいたのか!!」

「くくっ……偉いじゃないの転校生。ち、ちゃんとあたしに合うサイズを……って何よこれ!! 男物の下着じゃない!？」

「だ、だよね!? わたしも転校生さんが買うところを見てたから夏海ちゃんの下着なんて買ってなかったよなって……い、いや違いますよ! 別にその下着を見ていたとかではなくて!!」

「い、いや、夏海がメモにパンツって書いてたからそれでもいいのになって……あはははっ!!」

「んもうっ!! なんなのよ……ちよつと転校生!! 飲み物貰うわよぶふおおおお!!」

僕が買った飲み物を勝手に開けようとして……その可愛い顔面に炭酸飲料の洗礼を浴びる夏海。

や、やばいあまりに出来過ぎていて……は、腹が……。

「あははははっ、な、夏海……タ、タオル……あははははっ!!」

「だ、駄目ですよ転校生さん……そんなに笑っちゃ……ふふっ」

「こ、こら転校生。……くくくっ……な、夏海、とりあえず顔を……や、やめろ!! こつちを見るな!!」

「て〜ん〜こ〜く〜せ〜く〜!! あんた!! こらっ待ちなさいよこのっ!! このっ!!」

これは、僕たちの人生におけるほんの一コマでしかない。

でも、だからこそ全力で楽しみたいと思うし、精一杯生きたいと思う。

「転校生さん!!」

声を掛けられた方を向くと満面の笑みを浮かべた智花がいる。

「わたし、とっても楽しいです!!」

「そっか。僕もだよ」

これからまた魔物との戦いに身を置き、たくさんの危険が襲ってくることになるけれども、きつとここでまた花火を楽しもう。

「おらっ!! なーにを雰囲気作ってんじやあ!!!」
「そうだぞ。私も混ぜないか!!」

大丈夫、この四人ならきつとまた……。

《幾度迎える季節 了》

雪解けのオルゴール

前編

ここ最近……ずっと、同じ夢を見ていました。

気が付いた時には、私は学園の校庭に立っていて、どこからか鐘の音が聞こえてくる。

私以外の学園生は、きっと誰もいない。

……いえ、正確には「探したところにはいなかった」というべきかしら。気配はおろか、人が生活していた形跡すら感じられないのだから、やはり誰もいないのでしょね。

【学園】にいる間であれば、私はここで過ごした時間のすべてを思い出すことができるけれども、目が覚めたときには霧がかかった程度にしか覚えていない。それはつまり、ただの夢ではないことを意味していると思うのだけれど……だからこそ私にとっては辛い状況ではないのです。

だってそうでしょう？ なぜ、私は“学園”に来るたびあのようなものを見なければならぬのかしら？

……この学園で、その刻まれた名前。それは、私以外の誰もいません。

それで……なぜ、あなたはここにいますか？

……。

「……また、同じ夢……」

ここ最近、私はどうにも同じ夢を見ているらしい。

はつきりと覚えているわけではないのだけれど……なんとなく、そう……なんとなくそんな気がするのだ。

それが大切なことなのか、それともどうでもいいことなのか、それすら思い出せないことをもどかしく思うのだが、ひとまず今はそんなことは後回しである。

私はデバイスを手に取り、起床時間にズレが無いことを確認するといつものように学園へ向かう準備を始める。

今日のスケジュールを確認して授業前には復習と予習の時間を確保……ああ、そういえば放課後は風紀委員の打ち合わせがあったわね。その後は図書館で昨日途中になってしまった新たな文献を読み進めて、それで……。

と、そこまで頭を働かせながらも、しかし私はもう一度デバイスを見ってしまう。

そこに表示されていることから、否応にも意識させられてしまう日。

なぜこんなことで心が乱されるのかと自問を繰り返すが、それで答えが出ないのはもはや実証済みだ。

「……はあ……」

思わずため息を吐いてしまったことを心の中で反省しつつ、ふと窓から外を見ると辺り一面の雪景色が目映る。

たしか、去年のこの時期も同じような天気だったかしら――。

そう。

もうすぐ、クリスマスがやってくる。

雪解けのオルゴール

「……そう。それは困ったわね」

「すみません冬樹さん。わざわざ来て頂いたのに」

風紀委員の活動を終え、図書館で勉強をしていた私は、ノートを使い切ってしまった事から購買に足を運んできたのだが、まさか在庫が切れてしまっているとは。

「……風飛、ね……」

時刻は夕刻過ぎ。風飛の街に出掛けても門限にはギリギリ間に合

うかしら？

この時間から出掛けることを多少面倒に思いながらも、勉強を遅らせるわけにはいかないと外出を決める。

ともすれば時間が惜しい。エリートで在るためにはどんな事情であれ門限を破ることなど決してあつてはならない。

「仕方がないわね。では、私は失礼するわ。こんな時間までお疲れさま」

「どうもすみません!! またどうぞMOMOYAをよろしくお願いします!!……あつ」

そうしてその場から去ろうとする私に、そういえば、と桃世さんが一言呟いた。

「あつ、いえ。そのお…先輩もたしか風飛に出掛けるって言ってたかなあ？　なんて……あはは」

誕生日。一般的に祝い日とされるそれは、私からしてみればそれほど価値のあるものではない。

強いて言えば年を一つ重ねたということ、かつ学園生からの卒業に近づいたという分かりやすい指標ではあるけれども、それ自体は特別に重要でも必要なものでもない。

つまるところ、私にとって誕生日とは特に意味のあるものではなかった。……そう、「なかった」はずなのだ。

——きっかけは「あの子」なのは言うまでもない。ただ、それ以上に深く関わっているのは、きつと「彼」なのだろうと今にして思う。

「……本当、あなたはいつも私の前に現れますね。大丈夫です。もう驚きもしないので」

「えつと、何で僕は出会いがしらに呆れられているんだろう……なんて」

「いえ、呆れているわけではありません。ただ、気持ち悪いと思っただけですよ」

「うん、ごめん。僕が何か悪い事をしたかな？」

街に出て買い物を買った私は、帰り道で偶然“彼”と出会ってしまふ。……本当にタイミングの悪い人だ。

先ほどの私の言葉には嘘偽りなどない。例え“彼”が唐突に現れても、本当に驚くことなどないのだ。

なぜならそれはいつも通りのことで、それは“彼”……転校生さんにとっても「普通」に過ぎないのだから。

しかし……それでも、今こうして――。

「……冬樹さん？ 大丈夫？」

「……っ！ ええ、なんでもありません。それでは、私はもう帰りますので。お先に失礼します」

「え？ あつ、ちよつと待ってよ冬樹さん！」

まだ何か言いたげな転校生さんに一礼し、私は再び学園へと歩き出す。

まったく、貴重な時間を無駄にしまいました。門限には間に合つかしら？

スタスタ……スタスタ……。

帰ったらまずは今日の授業の復習から始めましょう。あとは明日に備えて予習は――。

スタスタ……スタスタ……。

……ピタッ。

スタスタ……スタスタ……ピタッ。

「……なんですか、まだ何か用事があるのでしょうか？」

「いや、僕も学園に戻るところだったし……うん。ほら、道は同じだからさ」

後ろからついてくるように歩く彼のことが気にかかり、思わず立ち止まり声を掛けてしまふ。

まったく……無視すれば済むだけの話なのに、どうしてこう意識してしまうのだろうか。

「そうですね。では、お先にどうぞ。私は後から歩いていきますので」

「ええつと……そうじゃなくってさ」

あはは……と力無く笑う転校生さんを見て、なぜ自分はこんな情けない姿をさらす人に心を乱されているのかと呆れ交じりに自分を問い詰めたい気持ちに駆られる。

いけない。また彼のペースにのせられてしまう。こんなことをしている時間などないのに。

そんな考えが頭をよぎり、この状況に対し次第に内心苛立ち始める私は、しかし彼の目にいつもと違う色が宿っていることに気が付いた。

まただ。時折、彼は別人になったかのように雰囲気を変えることがある。

それは比喻に過ぎない。分かっている。魔力や何かで本当に変化をもたらしているわけではない。

そう、分かっているのだけれど、やはりどうしても私はこの目に惹きつけられてしまう。

そしてそこにはもう、先ほどまでの情けないと思わせるような彼の姿は面影も見えなかった――。

「冬樹さん。君と話がしたかったんだ」

去年のクリスマス、私は「あの子」と言葉を交わした。

不本意ではあるが、それはおそらく周囲の学園生誰もが驚くことであつただろうし、またそれを当然の結果ともいえる距離を私は作ってきたつもりでいる。ある意味で私の意図した図式が現れていたと言つてもいいだろう。

しかし、結果として起きたのは、「私が」あの子から誕生日プレゼントを受け取る」という望まざる光景。

なぜ、どうして？ そんな風に、私は今でもあの日の事を思い返すことがある。

私の隣に「あの子」はいてはいけない。それは、決してあつてはならない。

だからこそ私は“あの子”を無視し続け、辛そうな顔にも知らぬふりをし……ようやくそれを何とも感じなくなっていた。…それこそ、本当に煩わしいときえ思うほどに。

しかし、去年のクリスマス、それらを跳び越えて“あの子”は私の元までやって来た。その隣にもう一人、転校生さんという紛れもない「部外者」を伴って――。

陽が下がる街の中に、しんしんと雪が降り始める。

せっかく買ったノートが濡れてしまわないように気を付けながら、隣を歩く転校生さんに目を向ける。話したいことがあるというから一緒に歩いているというのに、結局それから何の会話もない。

この人は何がしたいのだろう。そんな疑いの目線を送ると、その意味を勘違いしたのかまったく関係の無いことを口にする。

「ごめんね。今日雪が降るなんて知らなくて。…傘を持っていたらよかったね」

「そう意味ではなくて……いえ、何でもありません」

そんな見当違いな言葉に少し苛立ちを覚えた私は、はあ……と、これ見よがしにため息を吐いてみる。

そうした後、こっそり反応を伺うと、予想通り少し困った顔を浮かべていた彼の姿があった。

これくらいしてもバチは当たらないだろうと内心でほくそ笑みつつ、やはり先ほどの彼の様子が気になってしまう。

「そういえば、冬樹さんは風飛に買い物に出掛けてたの?」

「はい。そうですが。…それがなにか?」

「いや、MOMOYAにないものって珍しいな、と思って」

「売り切れていたのだから街まで出向いただけです。どうしても今日中に欲しかったので」

先のやり取りが皮切りとなりほんの少しだけ交わされる会話。

それは決して心地の悪い時間ではないのですが、しかし私の求める内容ではなかった。

と、そんな私の気持ちを知ってか知らずか、ようやく彼は“本題”

に入り始めることにしたらしい。

「…冬樹さん、最近何か変わったことはないかな？ もしあれば教えて欲しいんだ」

「何を言っているのか分かりませんが、なぜ私があなたにそのようなことを話さなければならぬのでしょうか？」

「うん、そうだよ。でも、どうしても冬樹さんの力になりたいんだ。だから教えて欲しい。…例えば、夢の話、とか…」

「…っ！ どうしてそのことをあなたが!？」

その予期せぬ言葉に、不覚にも私は動揺を隠せなかった。

“あの子”に関わることであればまだ分かる。それは外部からの介入が可能であるからだ。

しかし、私の“夢”についてなど誰も知るはずがなく、私自身ですら大して意識していることでもなかった。

それが今、赤の他人の口から話に上がる。それはもう気持ちが悪いなどという問題では済まされない何かがあるとしか思えない。

「何を、あなたは一体何を知っているのですか!？」

いつの間にか止まっていた足を彼の方に向け、ぶつからんとばかりに声を荒げる。

自分でも珍しいとさえ思えるほどの激情に駆られた私は、最早学園に帰ることなど忘れ、買ったばかりのノートが地面に落ちる音すらも気になどならない。

驚く以上に感じる、自分の知らないところで【私】という存在に深く踏み込まれているような恐怖感と苛立ち。

今は目の前にいるこの人が何を知っているのか、ただそれだけに意識が向けられる。

「答えてください。あなたはなにか知っているのですか?」

「ごめん落ち着いて。ちゃんと事情を話すから。…えっ、あれ、冬樹さん?」

「あなたは…いつ、も…あ…あなたは、どうし、て…あ、れ」

しかし、それも長くは続かなかった。

言葉半ばにして突然に薄れ始める意識。

これまでに感じたことの無い感覚に戸惑う私だったが、それ以上に慌てた彼の様子にかえって冷静さを取り戻し、声を掛けようとするも、

『大丈夫ですから。あなたがそんなに慌てる必要はありません』

しかし、ついには口を動かす気力もなく、それだけの言葉すら伝えることが出来なかった。

今日についていない日ですね。と、他人事のようにそんなことを思いつつ、必死な彼の姿に不思議と悪い気がしなかったことに対し、内心で自虐気味に笑う。

はあ……まったく私らしくもない。目が覚めたらすべて教えてもらいますよ、転校生さん。

積もる雪の中に身体を沈め、残された意識の中でそんなことを思い……そして記憶が途切れた――。

きつとあなたならもう一度“ここ”へ来るのではないかと思っていました。

ええ。覚えています。言ったでしょ？【学園】にいる間はすべてを思い出しているのだと。そして、だからこそあなたを待っていました。

あなたには、手伝って頂きたいことがあります。…いえ、きつとあなたでなければ駄目なのでしょう。

そうですね、だからこそ、あなたは“ここ”にいるではないでしょうか。

…ずっと鳴り続いていた鐘の音が、もうほとんど聞こえなくなっています。

恐らく、私にはもう時間がありません。

はい。ある人を探して欲しいのです。

私によく似た……大切な、大切な妹を。

《
続
く
》

雪解けのオルゴール 中編

あつ、お兄さん!! どう、お姉ちゃんはいたかな?

えっ? う、うん。今、ここにはわたしとお兄さんしかいない、よね?

……そっか、ははは。わたしたちは“夢”の中でさえすれ違つてばかりだね。

……本当、なんでだろう……。

そうだね。わたしも、もう時間がないと思う。鐘の音がね、小さくなつてきてるんだ。

皮肉だよね。わたしたちに災厄をもたらそうとするあの音が、「ここ」ではいつまでも聞いていたくなる。

もちろん鐘の音が好きなわけじゃないよ?

……あの音が鳴っている間は、わたしはお姉ちゃんと同じ時間を共有してるのになつて思つたら、なんだか少し嬉しくて。へへっ……変だよねこんなの。

……ねえ、お兄さん。わたしからもう一つだけお願いがあるんだけど、聞いてくれないかな?

雪解けのオルゴール 中編

あれは、まだ冬樹の家で暮らしていた頃の話。

時期は六月の始め。日頃から常に授業の予習復習を欠かさない私だったが、来週行われるテストに備えていつも以上に勉強に励んでいた。苦手、という程ではないが今のうちから克服しておきたい箇所があったのだ。ところが――。

『ねえねえお姉ちゃん! あたしたちつてみんなより損をしてると思わないっ!』

『…突然どうしたの? 私が勉強をしている最中なのは見て分かるよ』

思うのだけれど』

そんな私の努力を知ってか知らずか、ノエルはいつも唐突に話しかけてくる。

毎度のこととはいえ、やはり勉強を邪魔されたことに苛立ちを覚える私は、手を止めてノエルの方へと振り向くと……人のベッドの上でお菓子を食べながらだらけている姿に、顔が思わず引き攣るのを感じた。

『…大体、いつものように私の部屋で時間を過ごすのはいいのだけれど、あなたは勉強をしなくてもいいのかしら？ いいノエル。前から言っていると思うのだけれど、あなたは言葉を話す前にちゃんと自分の中で何を相手に伝えたいのかを明確にしなさい。あと人のベッドの上でお菓子を食べ散らかして……いつもいつも誰が後片付けをしていると思ってる……』

『うわああ!! ごめん!! ごめんってばお姉ちゃん!!』

矢継ぎ早に言葉を発する私に本気でマズイと思ったのかノエルは姿勢を正して頭を下げる。どうせ今だけの反省に違いないと分かっているながらも、仕方がないと内心でため息を吐きつつ、そのままノエルの話を聞くことにする。本当に、自分のことながら甘い。

『えっと、勉強はあとでちゃんとやるからさっ!! それよりプレゼントだよプレゼント!! クリスマスプレゼント!!』

『一体なにを言って……ああそういうことね。要するに、誕生日とクリスマスプレゼントを一緒にされているのが不満だということかしら?』

『そう!! そうなんだよ!! えへへ。さっすがあたしのお姉ちゃん』

私たち二人は「クリスマスプレゼント」というものをもらったことがない。

私の誕生日が12月24日で、ノエルが25日生まれ。時期的にもクリスマスとかぶるものだから、冬樹の家ではいわゆる「お祝い」もまとめて行われる。

それが普通であると感じている私としては興味もなかったが、た

だ、ノエルはそうでもなかったらしい。恐らくは、似たような境遇の子がクリスマスと誕生日のそれぞれにプレゼントをもらっている話でも聞いたのだろう。

『それは分かったけど……だからどうしたの？』

そう。それは分かったのだが結局ノエルが何を言いたいのかが分からない。まさか、あの親たちにプレゼントが欲しいなどと進言するつもりではないだろうか。

そんな叶う可能性が無きに等しい考えが頭をよぎる中、しかしノエルの答えはまったく予期せぬものだった。

『うん、あのさ……せっかくの仲良し姉妹なんだし、あたしたちでプレゼントし合おうよ!!』

「せっかく」の使い方がよく分からないのだが、言いたいことは伝わってくる。

それは双子であるはずの私には思いつきもしないなんともノエルらしい自由な発想で……ほんの少しだけ、そのことが羨ましいと思っ
てしまった——。

目が覚めた私は、先刻の夢を思い出し自己嫌悪に陥る。

あんな夢であれば覚えていない方が良かった。私の気が緩んでい
る証拠だろうか？そして——。

「……まさか、これまでの夢も今みたいなの……」

「あら。目が覚めたのね」

瞬間、心臓が跳ね上がる。

不意に掛けられた声の主を確認すると、そこには穴戸さんがいた。

なぜ？ いつから？ 手遅れのようにも感じるが、小さく深呼吸を
することで徐々に落ち着きを取り戻す。

「ここは……穴戸さんの研究所？」

そう、ここは穴戸さんの研究所だ。

でもなぜ私がここに？ それに、なぜベッドで寝ているのかしら？
冷静になっても答えに辿り着くことは無いのだろうと観念し、隣で

様子を伺っている宍戸さんの方を向く。

すると、それが合図だったかのように彼女は口を開き始める。

「だいぶ落ち着いてきたようね。そう。ここは私の研究所。あなたはここで半日ほど眠り続けていたわ」

「半日……そう、宍戸さんがそう言うのなら本当なのでしょうね。でも、なぜ私はここに居るのかしら？」

それほどの長い時間を眠り続けていたという事実には驚きを隠せないのだが、状況を把握できていない現状ではまだ「それ以上」だつてあり得る。

そんな考えでなんとか平静を装う私だったが、結果として“彼”が発する次の言葉に耐え切れることは出来なかった。

「あつ、僕が冬樹さんを運んできたんだよ」

「えっ？ き、きやああああああ!!」

そこには、全く気配の無かった転校生さんが立っていた。

少し席を外すわ。そう言って宍戸さんが研究所から出ていくのを見届けた後、私は転校生さんと向きあう。

あれから気を失う直前までの出来事を思い出した私は、なぜあんなに取り乱してしまったのかと自責の念に駆られながらも、それでも彼から話を聞かせて貰う姿勢を崩さなかった。

「さて、転校生さん。あなたは一体なにを知っているのですか？」

そして、私は、言葉を飾ることもなく質問をする。

それ以上の言葉は不要だし、彼もまたその言葉を受け取る前からまっすぐにこちらをじつと見つめていた。

しかしそこにはいつもの頼りない瞳と、時折見せる真剣味を帯びた鋭い瞳……その二つを併せたような、ひどく不安定な色を見せている。

何かを迷っている。そう思わせる気配を感じさせながらも、しかし彼がその目を背ける事はない。

だから、私も彼を待つ――。

「冬樹さん。僕は出来る限りのことを話すし、精一杯君の質問にも答

えようと思う。」

少しの間が空き、覚悟を決めたのか彼は言葉を紡ぎだした。慎重に、一つ一つ言葉を選ぶような、そんな拙さを感じさせながら。

「ただ、僕にも守るべき『約束』があるんだ。だから、きつと冬樹さんの望むすべてを語ることは出来ないと思う」

出来る限り？ 約束？

質問の答えになっていない。今一つ要領を得ない前置きに内心で頭を捻りながらも、話を遮るべきではないと彼の言葉に耳を傾けることにする。

「…言っている意味があまり理解できないのですが、とりあえず私の質問に答えてくれるということでしょうか？ であれば、話を進めてください」

そんな私の姿に安堵したのか、彼はほんの小さな笑みをこぼし、

「ありがとう冬樹さん。そうだね、まずは……」

その話はきつと、誰かの為なのだろうと、そう感じさせる優しい声で話し始めた。

私は不覚にもそんな彼の雰囲気にも心を揺さぶられながら、しかし動揺を見せず紡がれる話に集中する。

一つ、一つ、ゆつくりと。伝わってくる想いまで逃さないように――

そうですか。ノエルも同じことを。…すみません、少しだけ――。

ええ、もう大丈夫です、失礼しました。

いえ、結果としてノエルに会うことは出来ませんでした、あなたがいないければこうして「言葉」を交わすことすら出来ませんでした。本当に、感謝しています。

どうしてこうなってしまったらと後悔することなど、飽きるほどにしてきました。それはきつと、死ぬ間際まで変わらないことでしょうか……。

……ええ、きっと私は……私たちはもうすぐ……。でも、それでも私たちの前にはあなたという希望が現れた。だから、届けましょう。『私たち』の未来を掴むために。そして、聞かせてください。あの日止まったままの……この鐘の音の中でさえ綺麗に紡がれる旋律を。

……それで、必ず伝えてくてね。

大切な、大切な……わたしのお姉ちゃんに。

《続く》

雪解けのオルゴール 後編

『なんで何も言ってくれないの!? お姉ちゃん!! ねえ、お姉ちゃんってばっ!!』

私が魔法使いに覚醒した以上、もうこの家にはいられない。そして……これまでの日常を送ることは出来ない。

『……あたし、何かしたかなあ……。うう……。ごめん……。ごめんさいつ』

それは、この子との関わりを断つことも例外ではない。

いや、私が「優秀」であるためには、なによりもその事が重要になる。

あの頃、そう思っていた私は、だからこそ“あの子”のを見て見ぬふりをした。

あのとき、“あの子”はどんな表情をしていたのだろう。

あのとき、“あの子”は何を思っていたのだろう。

そんなことさえあの頃の私は考えようとしていなかった。

ガシャン!!

『……あつ……。あああつ……。!!』

それは、本当に偶然だった。

学園へと移り住む身支度を整えている最中に偶然にも床に落としってしまった「それ」は、嫌な音を立てて壊れてしまった。

泣きそうな顔で……。いや、もしかしたら泣いていたのかもしれない“あの子”は、急いで「それ」を拾い上げ、蓋を開けるが今まで通りの音を奏でることはなかった。

『……悪いけど急いでいるの。用が済んだのなら出て行ってもらえるかしら?』

今考えるとなかなか酷い言い方であるが、それ以上にすごいと感じるのは、私自身がそのことをチャンスだと思っていた事だ。

それまで仲の良かった“あの子”と距離を取るためにひたすら無視をし続けた私だが、それでもめげずに“あの子”は話しかけてき

た。

そんなことをされても、もう私の心が動く事はない……。そう自制していても、長い時を共に過ごしてきた妹を振り切ることは難しかった。

そう、だからこそそのチャンス。

実際、それで心が折れたのか。あの子”は壊れた「それ」を手に、私の部屋から言葉無く出て行った。そのことに心の中でそつと安堵のため息を吐きながら、どこかで感じる痛みは勘違いだと自分を諭す。それから少しして、私は魔法学園へ向かうために家を出た。出迎えたのは両親だけで、“あの子”は部屋に閉じこもったまま。

しかし、窓からこちらを覗いている姿は視界に入っていた。

そして、「それ」を。もう音を奏でることの無い、妹からの初めての『プレゼント』を手にしていることにも、私は気が付いていた――

雪解けのオルゴール 後編

「つまりここ最近の、私が昔の夢を見ていた原因というのはあなただったということでしょうか？」

「ごめんね。僕もいつ話をしようか迷っていたんだけど」

「……そうですか。まったく、なんとも迷惑な話ですね」

裏世界の「冬樹イヴ」と「冬樹ノエル」。

別の世界の「私たち」の話を聞かされたところで、結局のところ『似た境遇の別人』でしかない。

当然だろう。なぜなら私はその人たちのことを何も知らないのだから。

名前や容姿が同じでも、結果として歩んだ人生、生きてきた世界が違うのだから、明確に別人だと言える。

つまりは、完全とまでは言わなくても赤の他人なのだ。

そう、私には関係のない第三者からの「言葉」でしかない。

……それなのに、

「……本当に、迷惑な話です……」

それなのに、なぜ私は動揺しているのだろう。

「別の世界の私たち」が関与してきたから？ 昔の夢を何度も見せられたから？

そんなことで私の心は揺り動かされるといえるのか。それほどまでに、私の決心は脆く、儂いものなのだろうか。

……私は間違つてなどいない。……私は、私は……!!

「冬樹さん」

その時、沈黙していた私の耳に彼の声が届く。

はっと顔を上げてみれば、強い意志の見える彼の瞳が私を見据えている事に気が付いた。

その目には、今の私はどのように映っているのだろう。そんなことを思ってしまった私に対し、静かで……やはりどこか優しさを感じる声で彼は語りかけてくる。

「僕には、冬樹さんが正しいとか間違っているとか、そういったことはよく分からない。だけど、いまのままじゃいけないような気がするんだ。……たしかに冬樹さんたちに関係の無い僕が関わる問題ではないと思う。……でも、でも、知ってしまったんだ。冬樹さんのこと、ノエルちゃんのこと」

そう言つて一度言葉を止めた彼は、言葉無く見つめることしかできない私の顔をじつと見つめながら、再び言葉を紡ぎ始める。

「傲慢かもしれない。身勝手かもしれない。それでも……それでも、君たちには笑顔でいて欲しいんだ」

だから……と、言葉を繋ぎながら、弱弱しく震えていた私の手をそつと握り、

「僕は、君たちの力になりたい。今は頼りないかもしれないけれど……それでも、いつかきつと強くなるから」

そう、私の心まで強く語りかけてきた。

なぜ、この人はそこまで他人のために一生懸命になれるのだろうか。

なぜ、そこまで真剣な眼差しを私に向けるのか。

……本当に、あなたはおせっかいで、不愉快な人ですね。

はたしてその言葉を彼に返すことができたのか、それは今でも私には分からないままである。

お姉ちゃん……まだ、何も言わなくていいよ。

でも、これ……受け取ってほしいの。

……私は……。

……ええ……。

……ありがとう!!

……ノエル。

え？

……いえ……なんでもないわ。

………？

これを。

え……こ、これ……。

こうしなければ、私が一方的に搾取してるみたいじゃない。それだけよ。

……お姉ちゃん……。

勘違いしないで。私たちの関係は変わらない。
変わらなかつたって、これくらいはできるといふだけの話。

……うん……でも、嬉しい……ありがとう！

……ええあなたが満足したなら、それでいいわ。

今思うと、あの時の私は彼の勢いに押されただけなのではないだろうか？

そんな風に冷静に物事が考えられるようになった私だが、いまこうして隣を歩く彼の姿を見ると、そう悪い気はしないのが不思議だ。

「まったく……今日は納得いくまで付き合ってもらうので覚悟しておいてくださいね」

「あの、うん。お手柔らかにね？」

「……そうですか。私の誕生日に何でもしてくれと言うから期待したのですが……残念ですね」

「待つて。冬樹さんは一体、僕になにをさせようとしているの？」

「いえ。ただ、私としては転校生さんが頑張つてエスコートをしてくれるものだとばかり思っていたものですから。……ふっ」

「ねえいまの笑いはなに!? いや、僕だつて一応考えてはいるんだよ？ ……ねえ、聞いている？」

相も変わらずな彼の姿に思わず笑つてしまふも、しかしそんな彼に惹かれ始めている自分も大概だと内心でため息を吐く。

……えっ……惹かれています？ この私が……こんな頼りない人に……？

「……あまり調子に乗らないで下さい。不愉快です」

「えっ、僕まだなんにもしてないよね？」

「……まだ、ということはいくらからにかするつもりなのでしょうか……？」

あの日以来、彼との関係がほんの少しだけ……大変不本意ながら変わったような気がする。けれど、その一方で私に変化があったのかと言われれば、それは私自身には分からない。

たしかに“あの子”……ノエルとの距離が少し縮まったことは認めるところである。しかし、結局のところ私の目的もエリートであるという方針も、なんら変わる事はない。それはつまり、私自身には大きな変化はない、と言える気がするのだが……要するによく分からないのである。

その後、冷静さを取り戻した私は、なんだかこのまま言われっぱなしの状態も悔しかったので彼に皮肉を浴びせることにした。

「まるでプロポーズみたいな言い方ですね？」なんて茶化すと、見るうちに彼の顔の色が変わっていくではないか。

そんな彼の様子が始めは面白かったのだが、しかし目に見えて動揺していく姿を見ている内に、なんだかこちらまで恥ずかしくなってきたしまった。もちろん、私の顔色は変わるはずもないのだが。

その後、気まずい雰囲気は漂う中に穴戸さんが戻ってきたことから、私と彼はそれぞれの部屋に戻っていった。

あのとき、彼は私たちの力になりたいと言っていたが、それを甘んじて受け入れるほど彼に心を許したつもりはない。だから、後のことは私自身が道を選ぶべきだ。そう思った私は、昨日の今日で再び風飛の街に足を運び、そしてノエルへのプレゼントを購入した。

分かっている。本来であればそんなことをする必要はない。けどこれくらいなら……そう、これくらいならいいのではないだろうか？

そういえば、ノエルちゃんからのプレゼントはなにを貰ったの？

さあ？ どうせあなたには関係の無いものですから。

……じゃあ、冬樹さんはなにをプレゼントしたのさ？

……なぜあなたに教えなくてはいけないのでしょうか？ほら。それよりも、私の貴重な時間を無駄にしないで下さい。……ふふっ。期待していますよ？

この行動がどれほどの意味を持つのか分からないし、どのような影響を与えるのかも分からない。だけど、渡さなければ後悔する……そんな気がしたことは、紛れもない事実だ。だから、私はその気持ちのままに動いてみようと思う。

ポーチの中に用意した……彼に渡すためのプレゼントに想いを馳せ、そして、私の願う以上に私たちにとって明るい未来につながることを心から願って……私は私が信じる道を歩んで行こう。

例えばそれが今とは違う生き方だったとしても、その先で私たちが幸せになれるというのなら……それこそがきつと……。

誰も人のいない、本来であれば静寂に満ちた部屋の中。

机の上の一つ、修理の施された跡のある少し壊れかけたオルゴールが……小さく、小さく音を奏でていた――。

《雪解けのオルゴール 了》

雪解けのオルゴール エクストラ

いつもとは少し雰囲気の違い学園に、暗いそこから響くような鐘の音が、延々と鳴り続けている。

不謹慎かとは思いますが、もはや聞きすぎて耳に馴染んでしまったと言ってもいいその音は、しかし初めて聞いた時よりも確実に小さくなっている。そして、故にもうすぐ“別れの時”が訪れることを予期させる。

「もう、大丈夫かな？」

部屋の窓から外を眺めつつ、そう問いかける僕に二人の女の子は対照的な反応を示す。

明るい笑顔が良く似合う妹は笑いながら頷き、知的な雰囲気を醸し出す姉は表情こそ変えないものの口元に小さく笑みを浮かべる。

僕はそんな彼女たちを見て思わず苦笑いしてしまう。なぜなら、この姉妹は互いのことが見えていないのに、まるで相手の動きが分かっているかのような仕草を見せるのだ。

そして、それはこの部屋、「冬樹さん」の部屋の中でも同様で、まるで打ち合わせをしたかのようにそれぞれの位置に着いた。「冬樹さん」は椅子に、「ノエルちゃん」はベッドの上へと、それが昔から決められていた当たり前のことかのように。

『ねえ、お兄さん。わたしたちの声は、あの子たちに届いたかな？』

『ねえ、転校生さん。私たちの想いは、彼女たちに通じたのかしら？』

まただ。彼女たちは本当に同じタイミングで話をすることがある。そんな偶然を面白く感じたことが顔に出たのか、二人はそれが気に入らないかのように抗議する。

「ご、ごめん……悪かったって。……くっ……はははっ!!」

分かっている。この世界の終わりとは、すなわち彼女たちの“終わり”と同義に違いない。

それは僕だけが知っている「事実」なのだが、もしかしたら彼女た

ちも薄らと分かっているのかもしれない。

だからこそ、僕は笑うことにする。この世界が消えるまで、彼女たちが……”冬樹さん”と”ノエルちゃん”がいなくなる、その最期の時まで。

「そうだ。ちよつとこれを見てよ」

ふと思いだしたことがあり、僕は手に持っていたものを二人の前に差し出す。

綺麗に顔を寄せる二人の姿に、また表情にでないようにと必死に堪えつつ、僕は「それ」の蓋を開ける。

冬樹さんにもらったプレゼントが、夢の世界だけに音が鳴るのか不安はあったがそんな心配も杞憂に終わり、三人の傍聴者を前に綺麗な旋律が奏でられる。

最初は驚いていた様子の彼女たちは、その音楽に聞き入るかのよう
に目を閉じる。僕はといえば、そんな二人の姿を静かに見つめながら、今一度あの日々
に想いを馳せた――。

雪解けのオルゴール エクストラ

勘違いしないで。私たちの関係は変わらない。

変わらなくなつて、これくらいはできるといっただけの話。

……うん……でも、嬉しい……ありがとう！

……ええあなたが満足したなら、それでいいわ。

……ねえ、お姉ちゃん。あたし負けないから!!

……えっ……??

……絶対に、負けないからねっ!!

「ぎやっほーいっ!! お兄ーさんっ!! おーまたせーっ!!」

見渡す限り一面に、白い雪が降り積もっている。

銀世界、なんて言葉が似合うような、そんな景色を前にして元気な笑顔がトレンドマークの女の子が姿を現した。

「いや、ノエルちゃんこそ早いね。まだ待ち合わせの30分前だよ。」
約束の時間より早く来ているのは僕も同じだが、その実、ちょうど今来たばかりである。

彼女を待たせるわけにはいかないと早めに来て正解だったようだ。

「もうっ!! さてはお兄さんってばっ、かわいいノエルちゃんとのデートを楽しみにしてたなっ!! この幸せものめーっ」

「ははは。よし、じゃあ行こうか」

「えーっ、なんで話をそらすのさーっ!!」

いつも通りのやり取りになんとなしの満足感を覚えつつ、彼女の後ろを見ると散歩部の部員たちが見送りに来ていることに気が付いた。

「いいなあ。わたしも転校生さんと一緒に街までおでかけしたかったですう……」

「だ、だめだよさらちゃん!今日はノエルちゃんにとつてたいせつな日なんだから!」

先に声を挙げたのが部長の仲月さらちゃん、次いで彼女を止めようとしたのが瑠璃川秋穂ちゃん。

この二人にノエルちゃんが加わると、学園名物の一つ、散歩部が全員集合となる。

本当に、いつも一緒に仲が良さそうだ。

「ごめんね。さらちゃん、あきほちゃん。うん、今度またみんなでお兄さんとデートしようねっ!! ふっふっふ……こんなにかわいい女の子が揃ってるんだから、きっとお兄さんも断れないはずだよっ!!」

いつの間にか勝手にデートの約束をさせられた僕は苦笑いを浮かべつつ、しかし彼女たちの楽しそうな姿を微笑ましく思っていた。

そこには当然、笑顔のノエルちゃんも含まれている。

『お姉ちゃん……これ……あたしからのプレゼントっ!!』

去年のクリスマス、ノエルちゃんは勇気を出して冬樹さんの元までたどり着いた。

怖かっただろう。辛かっただろう。近づいても離れていき、声を掛けても見向きもされない。しかし、そんな風に拒絶されながらも、彼女は諦めることなくクリスマスプレゼントを渡すことができた。

それは果たして、どれほどの努力の積み重ねが実を結んだ結果なのか、僕には知る由もない……。

けれど、彼女は僕のお陰だと感謝していた。喜んで、涙を流していた。

そして、そんな彼女の姿を見たときからだろうか。僕は、このすれ違う二人の少女たちを助けたいと思うようになった――。

「なんかね。最近よく昔の夢を見るんだ……。不思議でしょ？ ずっと同じような夢なの」

歩いて風飛の街に向かう僕たちは、道中でそんな会話を繰り返し広げていた。

その理由を知る僕としては反応に困る内容ではあったが、ただただ楽しそうに夢の話をする彼女の姿には、思わずこちらまで嬉しくなってしまうなにかを感じる。

この周囲をも楽しませる明るさこそが彼女の長所なのだろう。一方で、まったく“夢”について覚えていないであろう姉の方を頭の中で思い浮かべ、そつとため息を吐く。

「……やっぱり冬樹さんには、なにかきっかけが必要なのかな？」

「……ん？ お兄さん今何か言ったかな？」

「あつ、いや。お腹すいたなあ……って」

「あつはっはっ！ なにそれっ！ んもう……仕方ないなーっ。街に着いたらまずはノエルちゃんおススメの店に案内するよっ！ 美味

しすぎるからって食べ過ぎちゃだめだからねっ！」

聞こえてなかった事にほっと胸をなでおろし、騙したお詫びを兼ねて2人分の食事代くらいは僕が出そうと密かに決めた。

食事を済ませた僕たちは、目的地である風飛市唯一のオルゴール専門店へとやって来た。

建物自体は小さく同様に店内も決して広くないのだが、どこかレトロな雰囲気that漂うお店であり、また、並べられているオルゴールを見ていると、よく知る形の物から人形のようなもの、他にも様々な種類が揃っていることから見るだけでも楽しめそうなお店だと感じる。

「すみませーんっ！　お願いしていたものを受け取りに来ましたーっ！」

周りのオルゴールに気を取られていた僕は、その声に顔を上げるとノエルちゃんが店の奥まで進んでいたことに気が付いた。

「はいはいちよつと待ってねー。…おや、お前さんはこの前の……」
元気なノエルちゃんの声に反応したのは、少し年老いたお婆さんだった。

この店の店主を思わせるその佇まいは、同時に人柄の良さを伝えて
いる気がする。

「うんっ！　……あの、それで……そうだったかな……？」

と、突然に気を落としたかのような様子のノエルちゃんに驚きながらも、それ以上に気を惹かれたのは奥からお婆さんが持ってきたポロポロのオルゴールだった。

「そうだねえ……。一応中身は修理できたけど、これはもう新しいものを買ってしまった方がいいと思うんだけど……」

たしかに、店主の言う通りだと思う。見た目にもひび割れており、修理したところでいつまた壊れるかもわからない。タイミングからして間違いなく冬樹さんへのプレゼントだろう。

でも、それはつまり、

「ううん、それがいいの……。それじゃなきゃ、だめ、なんだ……」

そう。きつとそれは彼女に……彼女たちにとって、とても大切なものなのだろう。

「……そうかい。分かったよ。ちょっと待ってておくれ」

そう言って再び奥に戻っていく店主の姿を見届けながら、僕はノエルちゃんの元に向かう。さきほどまでは背中姿しか見えなかったが、隣に立つと彼女の真剣な眼差しがああ、の壊れかけのオルゴールに向かっていたことが分かる。

「……あのオルゴールはさっ、あたしたちにとって大切な思い出のプレゼント……なんだ。……えへへっ、もしかしたら今はあかしだけの、かもしれないけどさっ」

そんな軽い口調とは裏腹に、どこかさびしそうな表情を浮かべる彼女は、視線をそのままに昔の話を語り始める。

「昔……っっていてもお姉ちゃんが魔法使いに覚醒する少し前なんだけどさっ。あたしがお姉ちゃんにプレゼントを交換し合おうって話を持ちかけたんだよね。うん……まあ色々あったんだけどさっ、本当のところはお姉ちゃんとなにか目に見えた繋がりのようなものが欲しかった、ような気がするんだ」

「繋がりのようなもの？」

「うん。もしかしたら、その時から今みたいになっちゃうかもって感じてたのかもしれないんだけどさ。……でね、お姉ちゃんもいよって言うってくれて、二人でそれぞれプレゼントを探し始めたんだけど、これが面白いことにお互いに勘違いしちゃったんだよね」

そこで一度言葉を切った彼女は、口元に笑みを浮かべつつ、今度は店内に置かれた様々なオルゴールに目を向ける。

まるで当時の思い出が見えているかのような、そんな瞳であたりを眺めつつ、再び言葉を紡ぎ始める。

「あたしたちの家の近くにもオルゴールを売ってるお店があつてさ。初めはあたしがなんとなくそのお店を眺めていただけなんだけどね、それを見たお姉ちゃんがプレゼントをオルゴールに決めただ。それでそのお店に少しだけ通い始めたんだけど、今度はそれを見たあたしがプレゼントをオルゴールにしようって思ってたさ。……へへっ、本

当にそっくりな姉妹でしょ？」

「ノエルちゃん……」

「それでさ、気が付いたのが二人同時に店に入った時でね、選んだオルゴールも同じものだったからもしかしてと思って話をしたら案の定でさっ……いやあ、あのときのお姉ちゃんのパカンとした顔は今でも忘れられないよ」

そして、今度は僕の顔を真っ直ぐ見て、やはりどこか楽しい思い出を自慢するかのように語り続ける。

「そのあと結局二人で一つのオルゴールを買うことにして、それでお姉ちゃんの部屋で音を鳴らす時間が本当に幸せだったんだ。…うん、本当に」

…でも……。と話を続けようとした彼女は、ふと店主が奥から戻ってくることに気が付いたのか話をぴたりと止める。

「お待たせしたねお嬢ちゃん。ほら、これでどうだい？」

「えっ…おばあちゃん、これって……？」

その手には先ほどとは少しだけ異なる飾りの付けられた綺麗なオルゴールが乗せられていた。

さらに言えば、ひび割れていた部分が見事に装飾されており、どうみても壊れかけていたオルゴールには見えないことに、僕と彼女は驚きを隠せなかった。

「どうだろう、余計なことをしちまったかい？」

「そんな、すっごく嬉しいよっ！でも、どうして……？」

「なあに、ただの年寄りのおっせつかいさね。それにね、どうなっ壊れたかは分からないが、それでもとても大切にしてくれたことだけはよく分かるよ。……こうやって大切に想われて、この子は幸せものだねえ」

「……っ!! ……ありがとうっ!! ……ありがとう、おばあちゃんっ……!!」

どこか嬉しそうな表情を浮かべる店主と、涙を堪えるようにオルゴールを抱きしめる彼女の姿が、なんだか僕にはとても眩しく見えた。

この気持ちをこの場にはいない冬樹さんにも伝えられたらなあど、そんな風に心の中で言葉にする。

それがいつか、現実になることを夢見て――。

「いやーっ、恥ずかしい姿を見せちゃったよーっ！　ちゃんと忘れてくれたっ？」

「ははは。あー、雪が降りそうな天気だね」

「……お兄さんってたまに誤魔化し方が雑だよ。あーあ、もういいよーだっ！」

あれから修理したオルゴールを受け取り、店を出た頃には辺りがだいぶ暗くなっており、時間を確認すると、予定よりも少し遅れていたため僕たちは学園へと帰ることにした。

「ぶー、せつかくお兄さんと二人つきりなんだからもっと遊びたかったなーっ」

「そういえばあんまりそういう機会ってないよね。……なんでだろう？」

「……もしかしてお兄さん……本気で言ってる？」

街を歩く中、他愛もない会話をしていたつもりなのに気が付くと隣で歩く女の子が凄いい形相でこちらを見てくる。……なんでだろう？

「……はあ……。あのさー、お兄さん。そろそろお兄さんは自分がどれだけ人気なのかを自覚した方が……ん？　もしかしてこのままの方があたし的には有利だったりする……？」

いつも以上に表情がころころ変わるなあ。

そんな風に隣を歩く少女を横目で見ていた僕は、その時ふとある人物を見つけることとなった。

「あれは……」

「ん？　どうしたのさお兄さん？　……あつ……」

それは、買い物に来たのであろう少女の後ろ姿。時折僕の脳裏に浮かぶ、冬樹さんだった。

「なにか探してるのかな。どうしようかノエルちゃ……ノエルちゃん？」

服の裾が微かに引つ張られるのを感じた僕が少し驚きつつそちらを振り返れば、なぜだか顔を俯けている彼女の姿が目映った。

体調を崩したのかと心配するも、やがてしばらくの間を歩いて彼女は口を開く。

「ごめんねお兄さんっ！ あたしまだ用事があるのを思い出しちゃってさっ！ だからさ、お兄さんは退屈だろうからお姉ちゃんの所にも行ってきなよっ！」

「えっ、でも……」

「もうっ、わっかんないかなあー！ あたしは今から肌着を買いに行きたいのっ！ ふっふっふ。それともなに？ お兄さんがあたしにせくしいーっな下着を選んでくれるとでも言うのかなっ？」

「……うん、分かったよ。後で連絡するね」

「うむっ！ よろしい！」

そんなやり取りの末、僕はノエルちゃんと別れ、冬樹さんの元に向かう。

……でも、なぜノエルちゃんが“嘘”を吐いたのか、結局そのあと僕が知る事はなかった――。

あのとき、あたしはお姉ちゃんに気が付かなかった。

もう少し近づいたら見つけられた自信はあるし、ちよつと考え事をしていたからという理由だつてあるかもしれない。

でも、それでも同じ場所にいたお兄さんは、あたしよりも先にお姉ちゃんを見つけて……それがなんだか、少し悔しくて……。

「ずるいよなあ……もう……」

誰に届くこともないその言葉は、はたしてどちらに向けられたものなのか。

街に溢れる人ごみの中、なにかを言い争った様子を見せつつも、やがて二人並んで歩きだす彼らの姿が見えなくなるまで、あたしはその場を動くことは出来なかった。

ふと気が付くとオルゴールの音が聞こえなくなっていた。

いつの間にか止まっていたのかと意識を思い出の淵から呼び戻すと、しかしそこには目を閉じたまま動かない二人の姿があった。

どうしたものかと思わず苦笑いを浮かべる僕だったが、その時、鐘の音が鳴りやんでいることに気が付く。……まさか、もうそんな時間なのか……。

『お兄さん。もう時間みたいだね……。短い間だったけど、一緒にいられて楽しかったよ！』

『…私たちはきつとあなたの事を、そしてこの世界のことを忘れてしまふことでしょう……。ですが“転校生さん”。どうか、あなたにだけは覚えていて欲しい。……そうすれば、ほんの少しでも私たちは救われる気がするのです』

「冬樹さん……ノエルちゃん……！」

このままで、このままで本当に良いのだろうか。

もうすぐ、彼女たちが…何もかもが消えてしまうというのに……。

『あーあ、どうせならお兄さんと学園に通ってみたかったなあ。そしてたらきつと、もっと毎日が楽しかったかもしれないよね！』

『…あなたと早く出会えていたら……。…いえ、それは言っても始まらないこと。…しかし、それでも……』

少しずつ色を失っていく世界で、僕は自分の無力さに打ちひしがれていた。

僕が、僕だけがこの世界のことを知っていて、僕だけが彼女たちに触れられて……。触れられ、て……。？

「…ねえ。最後に、手を重ねてみない？」

思い返されるのは、以前試した時に何も起こらなかったという苦い記憶。

互いに見えないし、触れることも出来ない。それこそがルールだと言わんばかりに何も変わることがなかったのだがせめて最後に、かす

かにでもお互いを感じ取る事ができたらと思い、僕はオルゴールの蓋の上に手をかざす。そんな僕の言葉に戸惑いを見せていた二人だが、やがてその手を伸ばし……しかし互いの熱を共有することは出来なかった。

でも、それだけでは終わらせない

「冬樹イヴ。冬樹ノエル」

『……？ どうしたのお兄さん。急に名前なんか呼んで？』

「違うよ。君たちの本当の名前は違うでしょ？」

『えっ？』

いつも元気な女の子に顔を向け、

「君は冬樹イヴで」

今度は知的な雰囲気醸し出す女の子を瞳に映し、

「君は冬樹ノエルだ」

『……っ!!』

息を呑むように言葉を失う二人を前に、それでも僕は言葉を紡ぎ続ける。

「君たちの世界ではそれが正しいのかもしれない。でもこの世界でなら……この世界でくらい本当の君たちでいていいんじゃないのかな？」

世界から色が消え、やがて僕たちをも消し去ろうと言わんばかりに色を失い始めても、僕は彼女たちの名前を呼び続ける。

「僕は知ってるよ。冬樹イヴに冬樹ノエル。それが君たちの名前だつて」

『……いいのかな？ わたしたち……うそ、吐かなくていいのかな……？』

『…許されるのですか、そんなことが……。そんな、ことが……。』
思い返すように、誰かに話しかけるように、彼女たちは心の内をさらけ出す。

そしてその時、重なった手に、徐々に熱がこもっていくのを感じた。「いいんだよ。うん。きつとき、僕はそのためにここにいるんじゃない」

いのかな？ ってさ」

はつとした表情でこちらを見る双子の少女たち。

物静かで他人を寄せ付けない姉と、明るく周囲の人たちを笑顔にする妹。

どちらもお互いを思い遣っているのに、どうにも上手くいかずすれ違ってばかりの、そんな姉妹。

『……呼んで、わたしの、わたしたちの名前をもう一度呼んで……！』

『あつ……感じます、そこにあの子が……お姉ちゃんがいるのを!! ……』

“転校生さん”……!!』

残り僅かの“色”の中、重なった二人の熱を確かに感じる。

この温かさを届けるように、つなげるように、僕は彼女たちの名前を告げる。

「冬樹、イヴ」

『……はい』

「冬樹、ノエル」

『……うん……』

それはもしかしたら勘違いだったかもしれないけれど。

それでもなんとなく、すれ違いの続いた双子の姉妹は最期の刻を笑い合いながら過ごした。……僕にはそんな風に見えたんだ。

そうして、世界は色を失った――。

耳元で鳴り響くデバイスの音。

寝ぼけ眼で相手を確認しつつ、あくび交じりにデバイスを耳に当てるとなにやら相手からの不機嫌なオーラを感じてしまう。

「もしもし……冬樹さん？ ……えっ？ あ、ああ……!!」

デバイスから耳を離し時間を確認する。……これは、マズイ……!!

「い、ごめん。うん……うん！ 急ぐ！ 急ぐから怒らないで！」

この時間だと完全に待ち合わせに遅れてしまう。

どうやって謝ろうかと考えつつ、慌てて着替え始める僕は、ふと机の上に置いてある「それ」に目を向ける。

あの日、冬樹さんにもらったプレゼント。……そして、夢の中で彼女たちを引き合わせたかもしれない大切なオルゴール。

開けっ放しになっていたそれを閉じようと、手を載せた瞬間に、ふっと声が聞こえた気がする。

思いがけない出来事に驚いた僕だったが、待ち合わせ相手の怒りがこれ以上頂点に達してしまわぬよう早く向かわなければと準備を急ぐ。

さて、どうしたら許してくれるかな……。

でも、きつと怒られることになったとしても今日は楽しい一日になるに違いない。

そんなことを考えながら、僕は部屋を出る。

あっ、そうだ。

「……行つてきます。またね、『冬樹さん』、『ノエルちゃん』」

……またね、お兄さん！……

《雪解けのオルゴール エクストラ 了》

梓ちゃん、転校生に困惑する。
梓ちゃん、転校生に困惑する。

「もー、いいんちよーも人使いならぬ忍者使いが荒いツスねー」
いつもならば授業が開始される時間に、しかし閑散とした学園の廊下で小さく響く自分の声。

せつかくの休みだというのに風紀委員の集まりがあることに一度、風紀委員長である風子からMOMMYAが定休日のため風飛の街まで買い物に行つて欲しいとパシラされるはめになつたことで二度、不満の声を漏らしそうになつた梓だが、

「ま、自分そーいうの嫌いじゃないツスけど．．．．．ん？あれは．．．．．せんぱーいっ！」

廊下を抜け校門へと近づいた時、前を歩く面白い人物を発見したことで、梓は三度と表情を変化させる。

忍とは感情を露わにしない存在である、などという概念を真つ向から切り捨てるかのように表情豊かな彼女の声は、今まさに学園を出ようとする“彼”を振り向かせるには充分すぎるものだった。

「おはようございます先輩！．．．こんな時間からお出掛けツスか？」

「おはよう服部さん。うん、これから風飛に向かうところ」

「おー、自分も同じくツス！．．．いやー、いいんちよーに頼まれてひとつ走りしなきゃなんですけど．．．あつ、でもびゅーつと走つてきつと帰ってくる。これつて、こう．．．忍者らしいパシラされ方じゃないツスかね？」

「ん？いや、全然」

“彼”：．．．転校生は自分の元まで走ってきた梓の話を聞きつつ、不満顔から途端にドヤ顔で決めてくるあたりがなんと彼女らしいと苦笑いを浮かべる。

一方で梓は否定されたことに納得いかないようで、ただ言葉とは裏腹に楽しそうな様子で「忍者らしさ」を主張し続ける。ならばこれどうツスか！ええつと．．．．．んもうしょうがないツスねえ．．．

うん、まあ……。

そんな延々と続けられそうなやり取りをしていた二人だったが、ふと本来の予定を思い出した転校生がデバイスを手に取り時間を確認し、もう出発の時間だと言わんばかりに話を切り出す。

「ごめん服部さん、待ち合わせがあるからそろそろ行かなきゃ。……そうだ。良かったら一緒に行かない？」

そんな風に急いでる割にはのんびりとした話を切り出す転校生に今度は梓が「らしさ」を感じつつ、少し考えてから断りを入れることにする。

推測にすぎないが確信に近い。彼の予定とはつまり……。

「あー、先輩とデートしたいのはやまやまなんツスけど……自分もあんまりゆつくりはしてられないんで遠慮します。遅くなるといんちよーに怒られちゃうツスからね。……それに先輩、女の子との待ち合わせに違う女の子を連れていくのはやめといたほうがいいんじゃないかと」

「それもそうだね……って、なんで分かったの？」

むしろ彼の予定に女の子が関わらなかったことがあったのだろうか。そんな疑問を抱きつつ、軽い挨拶を交わした後、梓は風飛へと向かい駆け出した。

「朝から先輩に会えたり、一日のスタートとしては悪くないツスね」

現存している世界で唯一の魔法使い兼忍者は、常人では目で追うことさえ敵わない速度で走りつつ、にやけ顔でそんな言葉を呟くが……しかし、そんな彼との出会いが後の災難の始まりとなることを、今の梓にはまだ知る由もなかった……。

梓ちゃん、転校生に困惑する。

「よっし、ちょうどいいタイミングスね！それじゃ、まずは……と」

せつかくだから修行の一環とばかりに風飛までの道のりを全速力で走りきった梓は、到着すると同時に次々と店が開店していく様子を目に映すと満足げに頷きながら風子から指示された商品を探し始める。

デバイスに送られてきた商品のリストを見る限りいくつかの店を回らなくてはならないため時間は掛かりそうだが、せつかく街まで出向いてきたので自分の買い物や食事まで予定に組み込むことにする。

さきほど転校生には急いでいると言ったが、当の風子からは午後からの会議までに揃っていればいいと言われているため特にその必要もない。

「どうせなら先輩と遊びたかったけど……ま、仕方ないツスね」

そう言えば彼は誰と待ち合わせをしていたのだろうか……。

そんな名前も知らぬ女の子のことが少しだけ気になりつつも、まずは買い物を済ませようと歩き出した梓だったが、それは思わぬ形で明かされることとなる。

「ん……あれは、南先輩と……先輩……！」

結局待ち合わせ時間に遅れたのか頭をぺこぺこ下げる転校生に、気にしていないから大丈夫だと逆に困った顔を見せる智花。

少し離れた場所でそんな二人の姿を見つけた梓は声を掛けようかと迷ったが、せつかくのデートに水を差すのも悪いと遠慮することにする。

「(南先輩も最近積極的だからなあ……これは他の人もうかうかしてられないツスね)」

転校生に好意を抱く女の子たちの中で最も警戒されているであろう智花の行動に、面白くなってきたと言わんばかりの笑みを浮かべた梓は、彼らに見つかからないようにその場を後にした。

……そして、この時の梓はまだおかしな点に気付くことは出来なかった。

一つ目の買い物を終えた梓は、次に家電量販店へと向かう。

「電池って・・・これ明日にMOMMYAで買うのとかじやだめなんツ
スカね・・・?」

ふと抱いた疑問を抱いた梓は、退屈のぎに風子の考えを推理して
みることにする。

MOMMYAが電池を切らせている可能性を考慮し、ついでに買い
物リストに加えた・・・いや、そもそも備品管理に厳しそうな
氷川先輩がいるのに本当に風紀委員の在庫が切れているのか・・・
あるいは、私的なお願い・・・というか、乾電池って何に使う
んだろう・・・。

そんな答えが出る由もない“遊び”を楽しんでいた梓は、しかし目
的地である店を前にして意識を現実に戻すこととなる。

「・・・あれ・・・岸田先輩と・・・先輩・・・?」

そこで見たのは、トレードマークであるカメラを手に抱えながらお
目当ての物がなかったのか憤慨する夏海と、力無く笑いながら彼女に
手を引つ張られていく転校生の姿。

つい先ほどまで智花と一緒にいたはずの彼がなぜ夏海と一緒に行
動しているか気になるところだが、彼らの仲の良さを考えれば三人で
一緒に買い物に出掛けているだけなのかもしれない。

そんな風になんとなくな理由をつけ、梓は特に深く考えることなく
店の中へと入っていった。

「あら、服部さん。あなたも買い物ですか?」

次に向かった文房具屋では、同じ風紀委員である冬樹イヴと出会っ
た。

昔を考えれば声を掛けてくること自体があり得ないことで、この人
も随分と丸くなったもんだと内心で小さく笑いながら彼女と挨拶を
交わす。

「いいinchよーに買い物頼まれちゃったんツスよ。・・・冬樹先輩は
?こつちまで来るのって珍しいツスよね」

「そう・・・お疲れ様。私は書店に用事があつてこちらまで出向いてき

たの。．．．本当はもう帰りたいのだけれど、彼がここに寄りたいたいものだから．．．．．」

「．．．．．」彼〴〵．．．．．?」

「．．．．．いえ、なんでもないわ。それでは、私はもう行くわね。．．．また後で委員会です」

なにやらデバイスを操作しながら足早に店を出る言葉を交わせる異性が1人しか思い浮かばない大人びた少女を、梓は呆然とした表情で見送ることとなった。

喫茶店にて。

「先輩っ！．．．ここ、ここのお店がとっても美味しいんですよっ！えっ．．．も、もうっ！からかわないで下さいよー！」
．．．．．。

ブティック。

「ほら、みんなのアイドル絢香ちゃんのファッションショーなんて贅沢なことなんだからちゃんと呼き合ってよね！．．．あつ。ねえねえ、さっきのここっちの、どっちが可愛いかな？」
．．．．．。

大通り。

「ちっ！あの野郎、前より逃げ方が上手くなってな．．．．．っ！だが、このあたしから逃げられると思ったら大間違いだ．．．．．待っててね秋穂、今お姉ちゃんが見つけてあげるからねっ！．．．．．おらーっ、出てこいやあああっ！」
．．．．．。

魔法学園。

「買い物、どーもご苦労さんでした。．．．．．なんか珍しく疲れてるよーですが大丈夫ですか？．．．．．平気？．．．．．そーですか、ならいーんですが．．．．．あつ、そうそう。いえね。さつきまで一緒にいたんですが、転校生さんを見なかつ．．．．．服部？．．．．．どこに行くんですか！．．．服部！．．．．．はつと

「いやいやいやいや．．．．．!!」

え、なに？なんなんツスカ!?

一日の予定をすべて終え、自分の部屋に戻った梓は混乱する頭を落ち着かせようとして、しかし考えれば考えるほどに困惑していく。

そもそも、冷静になって思い返してみれば最初の時点でなにかがおかしかったことに気が付くべきだったのだ。

学内でも最速を誇る梓が全速力で学園から風飛に向かった。

それは紛れもない事実であり、つまりあの時点で学園にいた人間が、ましてや学園でも下から数えた方が早い転校生の身体能力じゃとうてい追いつけるはずはない．．．．．にも関わらず、梓は街に到着して間もなく転校生と智花が一緒にいる場面に遭遇している。それはつまり、転校生が梓と同等以上の速度で移動したか、それ以外のなにかがあったとしか考えられない。

「いや、問題はそれだけじゃないんツスよねー．．．．．」

そう。おかしな点は他にもある。

仮に、智花との件は置いておくとして、まあ夏海と行動していた点についてはまだ何とか分かる。だが、イブ、もも、絢香、瑠璃川姉妹まで来るともう何が何だか分からなくなり、さらには学園で風子と一緒にいたとかいう謎のアリバイまで登場する始末。

さらにはそんな梓の心境などお構いなしとばかりにけろつとした表情で風紀委員の会合に参加している転校生の顔を見たら、なんだか自分一人が困惑していることに虚しさすら覚えてしまった。

とはいえ、こうまで振り回されてたのであれば梓としても引き下がるわけにはいかない。

「こうなったら、意地でも先輩の秘密を暴いてやるツスよ！……ふっふっふ、本気になった忍者がどれだけすごいのか……今に見ててくださいいね先輩！」

ある種の大仕事に臨むかの如く、決意表明を口にした梓は早速今夜から行動を開始するべく準備し……。

『おい、今日は負けたけど来週は絶対にボクが勝つからな！……予定？そんなのボクが知るもんかっ！いいか？今日と同じく一日付き合ってもらうからな！』

……廊下から聞こえる声より膨れ上がった、先行きの見えない謎の前に、自分の頬が引きつるのを自覚する。

「……あー、なんかやめといたほうがいいかなー……」

始める前から折れそうになる膝を奮い立たせ、今日の所はゆっくり休もうと早めの就寝を決め込む梓。

……そして、後に止めてけば良かったと後悔することになる梓の挑戦が幕を開けることとなる……。

《続く》

梓ちゃん、後悔する。

晴れ渡る空に白い雲、見上げれば太陽からの視線が心地よく、熱すぎず寒すぎずな気温もまた、“過ごしやすい快適な一日”を演出している。

だが、そんな晴れ晴れとした環境の中でさえ、なによりも自分の気持ちが高揚しているのは、今日これから意中の相手と二人で街に遊びに行く・・・つまりはデート出来ることに他ならないということ少女は自覚していた。

「いやー、本来の目的から少し逸れている気はするんですけど・・・。まあ役得つてとこツスカねー」

呆れているようなぼやいているような、そんな話口調にも関わらずにやけ顔を隠せずにいる少女・・・服部梓は、珍しくいつもの制服ではない可愛らしい私服を着こなし、待ち合わせ時間より大幅に早く到着してしまった事を後悔することもなく校門の前にて“彼”を待っている。

そして、そんな時間さえも楽しく思ってしまうことに少しの気恥ずかしさを感じつつ、それゆえかトレードマークともいえる手裏剣型の髪飾りを手でいじりながら今日にいたるまでの出来事を思い返すことに決める。

“任務”のため、はたまた別の理由につき・・・そんなことすら考えることもなく、梓はこの忙しかった一週間に想いを馳せる。

梓ちゃん、後悔する。

常日頃からあちらこちらと引つ張りだこな彼のことだから、きつと再び同じような状況に出くわすに違いない・・・そう考えた梓は、まず転校生の観察を始めることにしたのだが、これがなかなか上手くいかなかった。

「うーん・・・特に何も無し・・・ツスカねー」

先日とは異なり授業のある平日だということもあつてか、これと
いって目立った動きもなくいつも通りの彼の姿しか見ることは出来
ない。

とはいえ、それでも転校生に暇がないのは明白であり・・・、
「ほらほらっ！この前独占インタビューに協力するって言ったじゃな
い・・・えっ、そうだっけ？・・・まあまあ、ほらとり
あえず部室に行きましょー！」

「あつ、転校生君。これから歓談部のみんなとお菓子を食べるところ
だったんだけど、これから一緒に行かない？」

「ちよつとアンタ！最近なんで精鋭部隊の訓練に出てこないのよっ
！・・・ふんっ。ほら、今日こそツクの方が優秀だって証明してやる
んだから。さあ行くわよっ！」

etc・・・etc・・・。

それは、日々パシられている様をして思わず呆然としてしまうよう
な光景だった。

「・・・いやー。改めて見るとすごい人気ツスね、先輩。・・・
でも・・・」

ただ、それ以上に感心させられたのは、それらの予定をすべてこな
してしまふ転校生の行動力についてだ。

無茶、とまではいかずともそれなりに過酷なスケジュールをこなし
つつ、あのいつもの頼りなさげな笑顔を絶やさないとところなどは本当
に凄いなと思う。

そういうところもポイント高いんすよねー。などと呟きながら、長
期戦になりそうな気配を感じた梓は、彼の評価を改めると共に次なる
手段へと変えることにする。

「おつ。せんぱーいっ！こんなところで奇遇ツスねー！」

「こんにちは服部さん。・・・いや、ここ教室なんだけどね」

次に梓が選んだのは転校生から直接あのときの“事実”を聞き出すという方法だった。

姿を見せずに目標を観察する隠密もさることながら、会話の中で気付かれることなく情報を入手する技術も、忍者にとつて重要なスキルであり、また常日頃から生徒会や執行部、風紀委員に遊佐鳴子など、数多の強敵たち相手に情報戦をこなしている梓としては学園に転入してから特に上達した技術であり得意とする分野でもある。

「そう言えば先輩聞いてくださいよっ！この前の休みの日なんですけど……」

さざりと偶然を装いあくまで自然に……そんな会話へとつなげようとした梓は、しかしことをうまく運ぶことは出来なかった。

『ええ、校内放送校内放送。サンフラワー組の服部梓さん、サンフラワー組の服部梓さん。先生からのお呼び出しです。この放送を聞きましたら至急職員室までお願いします。繰り返します……』

「あつ、うん……なにをしたの？」

いやいや怒られること前提ツスか？そうだねごめんね。あははは。と、そんな会話を交わしつつ職員室に向かう梓はそのタイミングの悪さに小さくため息を吐く。

……ちなみに呼び出された原因は授業中に居眠りをしていた件だったため、やっぱり梓は怒られた。

その後も、なんとか転校生に接触しようと奮闘する梓だったが、今度はなぜか彼の元までたどり着くことさえできずにいた。

「あつ、先輩っ！ちよつとさっきの話の続きなんですけど……」
プルルル……プルルルル……

「……すみませんツス。また今度……はい。じゃあまた……」

「いたいた！せんぱー……」

「おや、服部さん。ちよつどあなたに用事があるところでしたの。先日依頼した調査についての報告に不明な点がありまして……」

「えっ、このタイミンググツスか!？」

「・・・せんぱ・・・」

「あーっ! いたーっ!」

「ようやくと見つけたぞ。ほれ、今日は天文部で買い物に行くのを忘れとったのか?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・せ」

「ちよつと服部さん! なんですかこの前の放送はっ! 同じ風紀委員たるもの見過ごすことは出来ません! これから風紀委員室まで来てもらいますからね!」

「もおお! なんなんツスカーっ!」

「な、なんですか急にっ! ほら、委員長も待ってますから行きますよっ!」

「うわあ! 連れて行かれる!・・・・・・せーんぱーいつ! 聞こえてますかっ! せんぱーいつ! せーんぱーいつ!」

最早なにか特別な力が働いているのではないかと疑いすら抱き始めた梓は、転校生に聞き出すのはもう不可能だと悟るとやむを得ず再び策を変え、まずは転校生がダメなら当日一緒にいた少女たちに話を聞こうと探りを入れるも誰もかれもが違和感を覚える事はなかったと話し、ならば転校生のスケジュールを確認すればいいと内心で謝罪しながらも彼の居ぬ間に手帳を拝見すると、そのあまりにも書き込まれ過ぎて当人以外は読む事の出来ないようなページを前に膝を折る。「はあ・・・自分もまだまだツスねー。・・・いやー、どうしよっかなー・・・・・・・・」

まさかここまでで手こずるとは思っておらず自分の今後のスケジュールを思い返してももう時間はそれほどない。さらにはなんだか探ってはいけないのだと言われているような気さえしてきた梓は、もう諦めようかと心が折れかかったその時ふと思いついた案を最後

の悪あがきとばかりに実行してみることにする。

『ねえ先輩っ！今週末って暇ですか？』

.....

それまで接触も難しかった相手に、これまた珍しく“デート”の誘いが成功したことに驚きながら、梓は最後の策をもう一度脳裏の中で確認する。

手帳の内容を把握することは出来なかったが、見た感じだと今日もいくつかの予定があった様子であった。ならば、一日中自分が転校生の傍に居れば、いずれは“移動”せざるを得なくなる。そしてそのタイミングを見逃さないように注意を払い、彼の謎に迫る。

せっかくのデートなのに十全に満喫できないのは残念・・・本当に残念だがこれも任務の為だと自分を律する梓は、しかしどこか浮かれた雰囲気を感じないままに約束の時間が来るのを笑顔で待つ。そして.....

「・・・おつ。せーんぱーいつ！こつちツスよこつちつ！・・・もうっ、遅いツスよー！.....へへっ」

「ふっふっふ。さあ先輩！勝負ツスよー！」

風飛の街を訪れた二人がまず入ったのはいつものゲームセンター。てつきり買い物に向かうものだと思っていた転校生だが、梓の「荷物に邪魔になる前に遊び倒しましょう！」と大変に彼女らしい言葉に苦笑いしつつ同意の頷きを返す。

店内に入った二人はぐるりと一周・・・格闘ゲームにクレイジーゲーム、音楽系統にクイズものまで色々な種類を眺めていく中で、梓が目をつけたのは二人で協力しながらゾンビを倒していくという、いわゆるガンシューティングゲームだった。

ゲームセンターでは定番な機体であり、同時にクリアすることはとても難しいと言われているゲームだが、天文部のメンバーと訪れたときはミナが画面のゾンビを怖がるためプレイしたことはなく、言ってしまうえば転校生が相手だからこそそのチョイスだと梓は感じていた。

「へえ、これか……」

「おや？さすが先輩。もうプレイ済みツスか？」

「うん。何度かね。……よしっ、たまにはいい所を見せるとしましようか！」

「おお！珍しく頼りがいのある顔に！……んふふっ、それじゃあせつかくだし何か賭けるツスかね？」

「その言葉、後悔しないでよね。……それじゃあ昼ご飯、とかどうかな」

「じゃあそれで！……先輩こそ後悔しないで下さいよっ！」

……
……

GAME OVER

「よっわ！まさかの弱さにさすがの梓ちゃんも驚きを隠せないツス！」

「いやいや、服部さんも人のこと言えないからね！というか僕よりも先に負けてるから！」

自信満々に挑んだ二人の勝負だが、転校生は慎重になりすぎて射撃量が足りず、梓は熱が入りすぎたせいか残弾の補充を怠ったせいで隙を突かれてあえなくHP0、といったよくあるような光景で幕を閉じることとなった。

「そもそも残弾がなくなるってダメダメツスね。戦場に出るなら準備は万全に備えてこそでしょう！」

「うん。全然言い訳になってないからねそれ」

ゲームの熱が覚めぬままに興奮する二人はやいのやいのと言いつ

いながら、次なる勝負を探し始める。

あの結果ではどちらが勝ったとは決められない。そんな結論を合意した二人は周囲へと目を配らせ、そして……。

「……ああ。今日はごっちだったんだ……」

梓は転校生の小さなつぶやきを耳にした。

急に変わった声のトーンに違和感を感じたため彼の目線を追うと、そこには格闘ゲームのコナーがあり、その中で一人こちらを見ている少女を見つける。

「……あれは、もしかして……」

なぜか変装をしている様子のその少女は転校生を見つめ、そして梓の姿を見ると慌てて姿を隠すかのようにその場を去っていく。

「……ごめん服部さん。ちよつとだけ待ってもらえるかな？ちよつとだけ用事を思い出しちゃって……」

そんな彼女の姿を見送った梓は、不意に掛けられた転校生の声に戸惑いつつも「自分もはしやぎ過ぎたんでちよつと外の空気を吸いたかったところなんツスよ！」と返事を返す。そして、そんな彼女の言葉を受けた転校生は「ごめんね」と一言告げ、足早に店の外へと向かっていった。

「あれは……鳴海先輩だったツスよね……」

意図せず巡ってきた転校生尾行のチャンスだが、別に謎でも何でもないところか不満げな表情で否定しながら彼の後を追うこともなく素直に店の外で待つことにする。

「……ふうんだ。先輩のばーか……」

店の外にまで流れてくる騒がしいゲームの音楽にまぎててか、梓のつぶやきは自分自身にすら届くこともなく空へと消えた。

その後、あまり時間が経たないうちに戻ってきた転校生の謝罪を受けつつ、梓はアクセサリーショップへと向かう。

「ほら先輩。可愛い梓ちゃんにプレゼントしてくれてもいいんツスよ？そうツスね……あれなんかどうでしょう？」

「どれどれ……たっか！指輪ってこんな値段するんだね……」

せつかくの転校生とのデートなのだからつまらないことを気にするのはもつたないと思つた梓は、いつものように彼を振りまわして遊ぶことに決め、その反応を見て楽しむことで気持ちを切り替えることに決める。

「うん。こうしてみるとやっぱり服部さんも女の子なんだって実感するよね」

「おおっと、先輩。さっきの勝負の続きツスか？負けたら今度は女装でもしてもらいましょうかね」

「ええ!?いや、その……あははは」

不覚にも自分で発した「さっきの勝負」の部分で少しの寂しさを感じてしまったものの、再び転校生と騒ぎ立てる時間に楽しさを見出し、店内を回りながら会話を弾ませる。

正直に言えば忍者として生きる自分には邪魔なアクセサリーは不要な存在のだが、やっぱり女の子としてみれば着飾ってみたいのもまた本音である。特に、気になる異性の前では……。

「……なあって言つたつて、当の本人は気が付かないんでしょうが……」

そんな想いを知つてか知らずか辺りを見回しながらなにやら考える素振りを見せている転校生に、ふとちよつかいをかけたくなった梓が声を掛けようと思つたその時、カバンの中にしまっていたデバイスの震えを感じた。

相手を確認すると休日にもかかわらず執行部からの連絡であり、なんだか水を差されたような気持ちに眉をひそめつつ、その場を離れ電話に応じることにする。

「すみませんツス先輩。ちよつと電話をかけてきますね」

そんな様子を見ていた転校生の「ここで待っているから」との言葉を背に受け、店の外、静かな場所で次なる任務の内容を説明される。

内心で愚痴を言いつつもしつかりと内容を頭に叩き込み、やがて用事を済ませた後店の中に戻つた梓は、ふと転校生の姿が見えないことに気が付いた。

「あれ？先輩どこに……あつ、まさかつー」

ついに来たか。

まさか梓が離れている内に誰かとの用事に向かったのではないか。そう思った梓は周囲の気配を探り転校生を探し始めるのだが……。

「あつ、いたいた。服部さん！」

「へっ？……なんだ。自分を置いてどっかに行っちゃったのかと思っただじゃないツスカ」

「えっ、なに？」

「いーえ。なんでもないツスよ！」

なんとも簡単に見つかつたその姿に拍子抜けしつつ、なんですぐに見つからなかつたんだろうと気になった梓達は、今一度本日の“任務”を意識しながら次なる目的地へと足を運ぶことにした。

その後も梓の気苦労が絶えることはなかった。

寄つた喫茶店ではももがバイトをしており、街を歩けば学園生に会い一言二言挨拶を交わす。

一度気になるとすべてが怪しく思えてきた梓は、ついには転校生がトイレだと席を離れたことすらも疑問を抱くようになっていく自分に気が付き、そんな姿に小さくため息を吐く。

そしてそんな彼女の姿を、物陰からそつと転校生は見つめていた……。

一日かけた“デート”も日没と共に終わりを迎える。

ほんの少しの寂寥感を覚えつつ、暗くなる前に帰ろうと学園への帰路に着く梓だったが、転校生の提案により途中にある公園で、残り少しだけ休んでいくことにする。

「んー。楽しかったね。風飛には結構遊びに来てるのになかなか飽きないよ」

「はあ、ダメツスよ先輩。そこは梓ちゃんと一緒にだから、なんて言葉があればポイントがぐーんと上がるのに！」

「あはは。うん、覚えとくよ」

「ほらっ！もー、またそうやって流すんですからっ！」

周りに誰の姿もない静かな公園で、小さなブランコに腰掛ける二人は今日の出来事に想いを馳せるつつも、笑ったり文句を言ったりと、そんな気兼ねないやり取りを繰り返す。

しかし、その中で時折感じさせない程度にも暗い表情が混ざってしまふことを梓は自覚している。

なにかがあつたわけでもなく、むしろ「なにもなかった」と言つてもいいくらいだ。

転校生と二人で過ごす時間は確かに楽しかったのだが、結果として「謎」が解明されたわけでもなく、にも関わらず彼とのデートを100%満喫できたのかと言われればそうではない。

それらのような複雑な感情が絡み合い、その楽しそうに話す表情とは裏腹に内心で落ち込んでしまう。

「(結局のところ、自分は今日なにをここにここまで来たんですかね……)」

そんな自問するも答えを出すことも出来ずに悶々としていた梓は、その時突然に声を掛けられ驚くこととなる。

「……服部さん、大丈夫?」

「えっ?……なんツスか先輩。まさかこの梓ちゃんが疲れてるとも言いたいんツスか!」

「うん。そうだね」

「当然ツスよ! なんだって……え?」

いつもは押しに弱い頼りない少年の不意に見せる優しい表情に戸惑う梓に、転校生は言葉を伝える。

「服部さんはさ、いつも誰かの為に頑張ってくれていて……その中には僕のことだって含まれているわけだからさ。こういう時くらいゆっくり休んだ方がいいんじゃないかな、ってさ」

「い、いや。先輩がなにを言ってるのか分からないんツスけど……。ほら、梓ちゃん的にはそういうところに忍者としての美学を感じてるっていうか……)」

なんだか見透かされているような気持ちで、ただそれに対し梓は嘘偽りのない言葉で答える。「忍者として」それは自分が何よりも誇り

に思っている事であり、決して疲れるなんて言葉など……。「だいたい、疲れてるっていうなら先輩の方じゃないツスカ？今日だって自分以外の人と予定があつたはずじゃ……あつ」
しまった……思わず口を滑らせてしまった。

自分にあるまじき失態に深く反省しつつ恐る恐る転校生の反応を伺うと、彼はよく分からないとばかりにきよんとした表情を浮かべていた。

「よく知ってるね……。んー……でも、今日は他に予定はないよ」

今度は彼の言葉に頭を捻る梓だったが、その意味を理解すると共に驚きの声を挙げる。

「えっ、じゃあ今日は自分とだけツスカ！いつも女の子と一緒にいる先輩が!」

「……なんか気になる言われ方なんだけど……一応そういうことなんじゃないかな」

そして、転校生は少しだけ優しい笑みを浮かべ、その“理由”を告げた。

「最近服部さんが疲れてるみたいだったからさ。僕相手に息抜きが出るんだったら、それが一番かな、って思ってたさ……悪いとは思ってたんだけど他の予定は全部キャンセルしちゃったんだ……それと、これ。服部さんに僕からのプレゼントってことで……」

次々と明かされる話に呆然としていた梓は、そのプレゼントを受け取ったことでさらに混乱する姿を見せる。

「……これは……うわぁ……なんでっ……！」

手渡されたのは綺麗に包装された小箱。そして、その中には小さな指輪が一つ。

「いや、さっき指輪を欲しがってたからさ。あの高いやつは無理だけど、僕でも買えるものの中で一番服部さんに似合うかなと思つて……うん。ちよつと恥ずかしいね」

そんな風に顔を赤くしながら話す転校生の言葉は、しかし嬉しさと恥ずかしさと、他にも色々な想いが込み上げてきてそれどころではない梓には届かない。

そうして、そんな不思議な沈黙を経た後、顔を俯むけた梓はようやく頭が動き出したかのように言葉を紡ぐ。

「あーあ。なんだかもうどうでも良くなっちゃったツスよ。まったく、全部先輩のせいですからねっ！」

下を向いたまま面を上げない彼女の言葉に、しかし転校生はなにも言葉を返さない。

「つてことはアレツスね。今日の自分の気苦労は全部無意味だったつてことになるわけで……あー、せつかくの先輩とのデートだったのにー！……つてことで先輩っ！」

なぜならば、言葉などなくとも彼女が次に何を言わんとしているのかはよく分かっているからだ。

「今からもう一度遊びに行くツスよ！大丈夫！まだまだ時間はいっぱいありますからっ！」

「そっか。それじゃあ、もう一度行こうか！」

どちらともなく笑い合い、そして顔を上げ時間が惜しいとばかりに風飛の街へと戻る梓と転校生。

「あつ、ちよつと待って下さい……へへっ。どうツスか？自分に似合うツスかね？」

と、その足を止め、梓は転校生から貰った指輪を右手の薬指にはめる。

「うん。服部さんによく似合ってるよ。……僕にも見る目があったつてことかな？」

どうツスかね？ええー……。そんな楽しげな会話を繰り返す二人だったが、ふと何かを思いついたかのように梓が不敵な笑みを浮かべ話を切り出す。

「あー……そうそう。実は自分が疲れていた原因って先輩のせいなんツスよ」

「え、そうなの!？」

「そうなんツスよ？……だから、一つお願いを聞いてもらわないといけないツスねー」

その梓の意地悪な表情に、あはは……と頼りない笑みを浮かべる転校生は、その後彼女の「お願い」を聞き届けることとなる。

「服部さんだと他人行儀でいけないツスよね！だから……」

それは、後悔から始まる小さな一歩。

少しの間を置いた後顔を真っ赤に染める少女は、握りしめた手の中で大切な宝物の温かさを確かに感じていた……。

さあ行きましようっ！せーんぱいつ！

《了》

つなげる想い 届けたい言葉 　くアフターストー
リー　く
プロローグ

梅雨も明け、徐々に夏を感じさせる暑い日が続く中、授業のない休日の朝に僕は部屋で一人アルバムを広げていた。

今日はこれから予定があるのだが、それまでの時間で部屋を整理しようとし始めたのがつい先ほどの話。

「いやあ……こういうのってつい見入っちゃうよね」

つまりはアレである。掃除をしている時に懐かしいものを見つけると感傷に浸りたくなるあの現象。

誰に向けるわけでもなく一人言い訳の言葉を口にする僕は、ふとある一枚の写真に目が留まる。

これは、たしか……？

「お〜い、転校生。何してるんだよ？　ん、写真……？　ま、まさか女子たちのあられもない姿がそこに……！」

と、その時部屋に学園のマスコットを自称する兎ノ助が現れる。

見た目可愛いうさぎのぬいぐるみの姿をしながら、その中身は煩惱にまみれたセクハラ指導員というなんとも言い難い校内でもトップクラスの有名人。

「なあ、転校生。お前今なにかすごく失礼なことを考えてるだろ？」

「ははは。いきなり現れて何を言ってるのさ兎ノ助。それで、氷川さんに連絡すればいい？　それとも水瀬副会長？」

「なんでだよ！　俺はただ転校生が暇してるかなって遊びに来ただけだって」

そんな兎ノ助は、あれ以来学園から離れることは出来ずとも、学内を自由に移動することが出来るようになったようで……まあ、最初の頃は何度も懲罰房にお世話になっていたようで……理由は彼の名誉のためめに伏せておこう。

「なんだそっか。……ついに僕の部屋の窓が運動部の女子たちの姿を覗

くことが出来るベストスポットだとばれたのかと思ったよ」

「マジか！　ちよ、ちよつと確認させてくれ……つてこんな手に騙されないぞ俺は!!　…いいいや、一応確認しておくべきだろう。学園生たちの父として!!」

うん。全然懲りてないね。

「それにしても、兎ノ助。最近よく僕の部屋に来るよね」

「ん？　…おう。俺だって本当は女子たちのところに行きたいさ！でもさ、最近は近づくだけでセクハラだのエロい目で見られただのつて風紀委員が駆けつけてくるんだよ！　俺は何もしてないのに！」

「ふうん。それで？」

「…いやあ。お前の所になら誰かしら女の子がいそうじゃん？　だから合法的にお近付きになれるんじゃないかと思つて」

「……兎ノ助。自分で言つてて寂しくならない？」

「やめろ！　そんな目で俺を見るんじゃない！　…寂しくなるだろ」

「ええつと……うん、ごめん」

さきほどまでの明るい雰囲気はどこへやら、一転してどんよりとした空気が流れ始めたため話題を変えることにする。

どうしたものかと考えていた矢先、さきほどまで写真を見ていたことを思い出す。

「ほら兎ノ助、写真だよ写真。部屋を片付けてたら懐かしい写真がいっぱい出てきてさ」

「ん。…おう、本当に懐かしいな！　これとか転校生が来たばかりの頃のじゃないか？」

兎ノ助が見つけたのは夏海に初めて取材を受けたときに撮られた写真だ。

あのときはなんて強引な女の子だと驚いたものだが、結局のところ全くその通りだったことに今さらながらに苦笑いしてしまう。

「あとは……これとかさ、懐かしいよね」

「ああ、これはあのときのやつか」

あのとき。

それは、僕たちが…そして世界中が生涯忘れることの無いであろう時間。

僕たちが霧の魔物との長きに渡る戦いに終止符を打つことが出来た、あの頃のこと。

『霧が晴れた』

その言葉の通り、世界から“霧”の脅威は去った。

理解は進んだものの未だ残る魔法使いと一般人の溝や、僅かながら動きの見えるテロリストの残党など、まだ解決しなければならぬ問題は残っているものの、魔物を脅威に怯えずに済むという事実は世界各地で大騒ぎになってもなんら不思議なことではない。

また、それはここ、私立グリモワール魔法学園も例外ではなかった。絶望の中から希望を掴み取り、全員が一丸となって挑んだからこそ切り開いた未来。

そして、幾多もの奇跡の上に成り立った平和な世界。

そのことを大いに喜んだのはもしかしたら僕たちグリモアの学園生たちだったのではないかと、そう思えるほどにみんなで連日お祭りのように大はしゃぎしていたのは今でも記憶に真新しく残っている。そんな中で風紀委員長である水無月さんが、その騒ぎをどう扱っていいものかと頭を抱えていたことは記憶によく残っている。

素直に喜ばしいことではあり気持ちも分かるのだが、だからといって風紀を乱していい理由にはならないという意見こそが彼女の“正義”だ。…うん。あの時は大変だった。

と、その一方で、僕たち魔法使いにとってある転機が訪れることになる。

『どうやら世界から“魔力”が減っているみたいね』

それは、宍戸さんの発見から始まる、魔力の消失、という事件だった。

と言っても、すぐに魔法が使えなくなるということでもないらしい。

例えば意図して大量の魔力を消費しようとしなければ、十数年、何十年と魔法を行使することが出来るとの見立てだそう。

現に、いまのところ魔力が無くなったという事例は発生していないようであり、僕に至っては未だ底なしの魔力量を有したままである。しかし、一方で新たな魔法使いが誕生していないのもまた事実。ただ、僕はそれが【役目を終えた】ことへの帰結のように感じている。

それは悲観的な考え方にも通ずるのだが、強大な脅威であった魔物がいなくなつた今、『魔法使い』の存在理由はなきに等しい。

しかし、それでもそんな“不必要”となつた力を、むやみに取り上げるのではなく共存させてくれる点なんかは、神様の粋な計らいというやつなのかもしれない。

そんな風に現在の状況^{いま}を改めて思い返していた僕だったが、ふと我に返りデバイスを確認すると徐々に冷や汗をかき始める。

「…あれ？ もうこんな時間なの!？」

どうやら思いの外時間が過ぎていたらしい。というよりも、これはヤバい。待ち合わせに遅れてしまう!

「ごめん兔ノ助。僕これから用事があるからまた今度遊ぼうね!」

「用事? …ああ、いつものか。ちくしょう、羨ましいぞ! このっ! このっ!」

「痛い! 痛いよ兔ノ助!」

「……はあ……。俺も可愛い彼女が欲しいもんだぜ。いや、俺の魅力があれば一人や二人……って、あつ!」

まあ、彼女じゃないんだけどね。

そんな言葉と共に小さくため息を吐きつつ身支度を済ませ兔ノ助と共に部屋を出る。

後ろで何かを言ってる気がするのだが時間がない。また後で聞くよ兔ノ助!

届かない言葉を背中越しに声掛け、僕は急いで待ち合わせ場所へ向かう。さて、どんな言い訳なら彼女に通用するのだろうか。

「なんだよ。行っちゃったじゃん」

声を掛けたが余程急いでいたのか振り返ることなく走り出していった転校生。

つい手に持って部屋を出てしまったのだが、さてこの写真はどうするべきだろうか？

「ん〜、仕方ない。帰ってくるまで俺が預かってるか！」

そう言いながら、無人となった廊下を一人歩く兎ノ助は、次にどこに遊びに行こうか頭を悩ます。

「調理部…散歩部…天文部…うっひょー！ 選り取り見取りとはこのことか！ グリモア最高だぜ！」

そんなことばかり言っているからこそ、日々風紀委員に目を付けられることになるのだが、それこそがある意味兎ノ助らしいとも言える。

そして、その楽しそうな生き方は、かつて過酷な戦いに身を置いた少女たちの心の支えとなっていた。

そんな“始まり”の兎は、ふと立ち止まり先ほど手に取った写真をもう一度眺めながら、転校生と出会ったばかりの、昔のことを思い出す。

学園生活を楽しめ

そして信頼できる仲間を作れ

「…だから言っただろ？ やっぱ青春は楽しくなくっちゃな！」

それは、つい最近盛大に開いたパーティの、最後を飾った学園生たちの集合写真。

転校生たちは元より風紀委員である水無月や氷川、普段はあまり表情を表に出さない穴戸や水瀬など、珍しく全員が楽しそうに笑っている、ある意味でとても貴重ともいえる大切な一枚の写真。当然兎ノ助

自身も中に入っている。

見ているだけでこちらまで気分が高揚してくるような、そんな大事な写真を手につくと、兎ノ助は次なる遊び場へと歩き始める。

ふと廊下の窓から空を見上げるとそこには雲一つない青空が広がっていた。

そんなありふれた景色がただただ嬉しくて、ニカツとした笑顔で鼻歌交じりに進みながら、そしてそつと一言を呟いた。

ありがとなつ、転校生

つなげる想い 届けたい言葉 　くアフターストーリーく

冬樹 イヴ 《前編》

カリカリカリ…カリカリカリ…。

静まりきった教室の中、響くのは受講生たちの手元で鳴るペンの動く音。

いつもは一教室に響き渡る講師の声も、今日はなんら聞こえる事はない。

カツカツカツ…カツカツカツ…。

その中には当たり前のように僕が鳴らす音も含まれる。しかし一方で右隣にいる彼女の手元からは聞こえることはない。正直そんな些事を意識できる時点で目の前の問題に集中出来ない証拠だが、しかしどうにも一時になると頭から離れなくなってしまった。

「……………」

テストの最中にも関わらず、興味を惹かれてしまった僕がカンニングと認識されない程度に横目でちらりと覗いてみれば、そこにはすでに回答がすべて埋められたであろう答案用紙を確認する冬樹さんの姿があった。

表情には出さないまでも顔を引きつらせてしまいそうになりつつ腕時計に目を向けた僕は、まだ試験時間が残り半分以上もあることに愕然とする。

と、その時、僕からの視線に気が付いたのか冬樹さんがこちらに目だけを動かす。

内心で動揺していたことから、その向けられた瞳を逸らすことも出来ずに真正面から受け止めてしまった僕は、そんな彼女の視線に威圧感を感じた。

なんででしょうかカンニングですか。試験中にこちらを見ないで下さい。余計なことを考える余裕があるなんてさすが転校生さんですね。

そんな叱りの言葉を連想していた僕は、しかし数瞬の後、彼女の口元に笑みが浮かぶのを見た。

思わぬリアクションに驚きつつ、その唐突に見せたいつもとは少し

異なるような微笑みに思わず目を奪われた僕は――。

「……………ふっ」

まさかの嘲笑に理性を取り戻す。

ああ、これはあれだ。完全に馬鹿にされてる。

改めてよくよく見てみれば、こちらに向けられた瞳の中にも嘲りの色を覗かせているようにも感じる。

高鳴る胸の鼓動が徐々に静かなる怒りへと変わり、こうなったら意地でも負けられないと一人決意を固める頃には、彼女はすでに興味をなくしたように再び自分の回答へと意識を向けていた。

今に見てろよ……………!

そう心の中で言葉にする僕は、次なる問題の解答へと集中し…そして――。

冬樹 イヴ 《前編》

僕たちは、魔法学園の教師となるべく一般大学の受験に臨もうとしている。

世界から“霧”が消え、世界各地から歓声が沸き上がっていた頃、時を同じくして「魔法」という存在が少しずつ消え始めることとなった。

とはいえ、目に見えた変化とさえも新たな魔法使いが生まれなくなつたことのみであり、穴戸さん曰く「意図して魔法を行使しすぎなければ魔力がなくなることはない」との話だ。

そしてあれから数年の時が経つた今、魔力が尽きた等の報告事例が挙がっていないところを考えると、おそらく彼女の見立ては正しかったのだろう。

その一方で危ぶまれたのが「魔法学園」の存在だった。

不必要とまではいかずとも魔法の授業が意味を為さなくなったこと、なにより新たな魔法使いが誕生しなくなったことを理由に一時は

学園存続の危機に陥ることとなる。

しかし、その窮地に立ちあがった寧々ちゃん——犬川現理事長の『魔法学の創設』という提案に状況は一変する。

これまであまり認知されることの無かった魔法使いの歴史や、霧の魔物たちとの戦い、さらに偉人たちの紹介などを「魔法学」を“授業”という形で伝えていくことにより、魔法使いと一般人の認識の差を埋めていき、さらにはその舞台として「魔法学園」以上にうってつけの場所は無いという主張を彼女は切り出した。

当然のように反対意見もあったが、特に多かつた「魔法学の意義」に関して、元生徒会長や魔法学園のOBたち、空さんを筆頭に魔法研究者たちによる強い説得や、なにより大勢の一般人による要望が大きく無事に「魔法学」の創設が叶った。

やがて“新たな魔法学園”としての一步を踏み出した私立グリモワール魔法学園は豊富な魔法知識や設備の充実さから新入生たちを始めとする多くの人たちから高い評価を受けることが出来たのだが、そこで新たに浮上したのが教員不足という課題であった。

かつての教員たちの内、おおよその方が引き続き教壇に立つことを合意してくれたのだが、なにしろ入校希望者の数が多く、他の学校と比べると倍率が凄まじいことになっている。

さらに、元々魔法使いという希少数の生徒たちに授業をすることが前提の人数であったため、一般人を対象にするとどうしても人数不足に陥ってしまう。

一方で、元来の予定通りに話を進めれば解決することではあるが、せっかくそれだけの一般人が魔法学に興味を示していることもあり、そう無下にすることも出来ない。

そして、そんな問題に学園側が頭を悩ませていたところで、僕たち学園関係者は動き始めた。

例えば、霧塚さんや氷川さんから教育者向きな人たちが代わる代わる魔法学の講義をサポートする、いわゆる「お手伝い班」。

彼女たちには主だった仕事があるため頻繁に学園に通うことは出来ないのだが、それでも教師陣および生徒たちの評判は上々だと聞

く。

また、野薔薇さんや冷泉さん、浅梨たちによる支援も忘れてはならない。

それぞれが名だたる名家ということもあり、世間から過剰だと認識されるような協力を得ることは出来ないが、彼女たちの悔しそうな表情から伝わってくるように、その気持ちだけで本当に嬉しく思う。

その他にも多くの助けを受けたことで、魔法学園への援助は充実し始めることとなったのだが、そんな中で自らが魔法学園の教員になりたいと志願する者が現れた。

対する周囲の反応は、背中を押してくれる人、人生をそんな簡単に決めていいのかと口を辛くする人など賛否両論ではあったが、やがて真剣に取り組む姿を見せると皆が少しづつ認めてくれるようになっていく。

そしてその人物こそが、僕や冬樹さんだった、というわけ——。

「で、テストの最中に他人を気にする余裕のあった転校生さんは、さぞ素晴らしい出来だったのでしょうね」

ぐうの音も出ない一言を告げられ、情けない姿で机に突っ伏す僕。
：いや、本当にすいません。

朝から昼過ぎにかけて模擬試験を受講した後、近くの喫茶店で答え合わせを行っていた僕は、共に回答を照らし合わせていた冬樹さんの言葉に心を何度となく折られていた。

「(いや、正確には言葉だけじゃないんだけどね)」

例えば、僕の方が冬樹さんよりも年上である、なんてことも要因の一つであったりするわけだが、それ以上に、ここ二年ほどを共に過ごしてきた彼女にあまり近づくことが出来ていないところが大きい。

ただしその距離感とは、甘い恋人のような関係などではなく、愛や恋などとは程遠い……ただただひたすらに積み重ねてきた勉強の先にある“結果”のことを指している。

元々、それほど成績が優秀というわけではなかった僕だったが、冬

樹さんを始めとする周囲からの協力のおかげで大幅な学力の向上に成功し、今では風飛市で一番有名な大学受験予備校の最上位クラスで講義を受けることが出来ている。

正直なところ大変かと問われれば口を閉ざしてしまうような環境ではあるが、そういった場でしか得られない充実感のようなものには確かにある。

だからこそ、そんな現状だけに普通であれば自信が付きそうなものだが、なにしろ目の前にいる少女はさらにその上を行き、当たり前のようにトップに君臨しているのだからなんとも言えることが出来ない。

もちろん在学中から学業に力を入れていた冬樹さんと比べる事自体がおこがましいことだとは思うのだが、それでも共に過ごした時間が長いだけに彼女の隣に並びたいという欲は生まれても仕方がないのではないだろうか。

あるいは、男として彼女をリードしたいなんて気持ちがあるのかもしれないが：以前に冗談交じりで話をしたときの彼女の「この人はなにをいつているんだろう」という表情が今でも忘れられない。正直に言えば軽いトラウマですらある。

ただ、だからと言ってこのまま落ち込んでいても仕方がない。

よし、また復習から頑張ろう！ そんな風に自分を奮い立たせていた僕は、その時になってようやくやく目の前の冬樹さんがこちらをじっと見つめていたことに気が付く。

「…えつと…：…どうかしたの？」

最近、時折彼女はその表情を見せることがある。

思い詰めた：…まではいかずとも何か考え事に没頭しているような、そんな表情。

しかし様子を気にして声を掛けるも――。

「いえ…：…なんでもありません…：…」

と、大体同じ答えが返ってくるだけである。出会った当初と比べれば見違えるほどに友好的な関係を築いた僕だが、やはりどこか壁を感じてしまい一抹の寂しさを覚えてしまう。

しかしその一方で僕が原因かもしれないのだからなんとも言い難い。特に思い当たる節もないのだが、よく周りから“鈍感”だと言われていることを自覚している僕だからこそ、残念なことに自分に対しての信用は薄い。

「…それよりも、今日の夜のこと。まさか忘れてませんよね？」

ふと、そんな考え事をしていた僕は、冬樹さんから声を掛けられる。その手で携帯電話としての用途が主となったデバイスを、操作している冬樹さんは、おそらくノエルちゃんからのメッセージを確認しているのだろう。

「うん。大丈夫だよ。ノエルちゃん、何時に帰ってくるって？」

「少し遅くなると思うから先に始めていて欲しい、だそうです」

「分かった。冬樹さんもそれでいい？」

「ええ。それで大丈夫だとノエルには返事しておきました」

相変わらず仕事が速いなど苦笑いしつつ、今日の夜の予定を思い返す。

まだ6月なのだが、彼女たち姉妹には意味のある時期だとのこと、今年はその“お祝い”の席に僕も呼ばれていた。

そんな大切な席ならばと初めは遠慮しようとした僕だったが、冬樹さん曰く「これまでお祝いなんてしたことがない」とのことだったので、ノエルちゃんの思いつきなのだろうと二人で結論付けた。

とはいえ、しばらく彼女に会っていなかったこともあり、今夜を楽しみにしていること時点でノエルちゃんにしてやられた気がしないでもない。

「あつ、そういえば今夜のことなんだけどさ。……冬樹さん？」

まただ。またどこか心ここに在らずな様子を見せている。

視線はこちらに向いているのに僕を見ていないような、やっぱりなにか考え事をしている姿。

ただ、さつきとは少し違うような…。と、そんな違和感を感じていた時、彼女の近くのテーブルの女の子たちがこちらを伺いながら話をしている様子が目に映る。

あまり気持ちのいいものでもないし、今の冬樹さんの位置だと彼女

たちの話が聞こえていたのかもしれない。…もしかしてなにか言われてるのかな？

「冬樹さん。どうせノエルちゃんが遅くなるなら先に部屋に行かない？試験の復習…はともかく、静かなところで落ち着きたいかな。さすがに疲れたよ」

そう思い立った僕は、それとなく話を促し店を出ることに決めた。「ええ。そうですね。私も落ち着いたところでゆっくりしたいと思っていました」

そして、その言葉は耳に届いたようで、冬樹さんもまた躊躇うことなく後片付けを済ませた。

…やっぱりそういうことだったのかな、とその一件が頭から離れる事はなかった。

「すみませんが、少し片付ける時間が欲しいので転校生さんの部屋で待っていて下さい」

魔法学園を卒業後、冬樹さんとノエルちゃんは実家に戻ることなく二人暮らしを始めた。

クエストで稼いだお金を貯めていたこともあり、セキユリテイもしつかりとした立派なマンションだ。

そんな彼女たちの部屋に僕も時々お邪魔させてもらっており、初めこそ女の子の部屋に入ることには抵抗を感じていたのだが、良く考えてみれば学園生時代に幾度となく経験していたことを思い出したことで、なんら遠慮は無くなった。

同様に、ノエルちゃんなんかは僕も部屋の住人であるかのように振る舞っており、最初は嫌な顔をしていた冬樹さんも、気が付けば違和感なく接するようになり、ついには二人で過ごす時間が普通に感じるようになっていたほどだ。

その後、学園卒業と同時に寮を出ることになった僕も、彼女たちに誘われてこのマンションに住み始めることとなった。すると今度はノエルちゃんたちが遠慮なく僕の部屋に遊びに来るようになり、気が

付けばどちらかの部屋で三人一緒に過ごす時間が増えていった。

冬樹さんもまた遠慮がちな姿勢を見せていたが、次第に慣れたのか自然と僕の部屋にいる姿を見るとなんだか似たような気持だったのかもしれないと少しだけ嬉しくなる。

ただ、ノエルちゃんの遠慮の無さはさすがであり、徐々に彼女の私物が僕の部屋を占領し始めたことがあった。

その時は結局、気が付いた冬樹さんが顔を引き攣らせながらノエルちゃんを呼び出し怒りながら片付けをさせていたものだが、再び彼女の物が増え続けているところを見ると反省はしていないのだろうかと感じる。

そんな思い出を振り返っていると、ふと水無月さんのことが脳裏に浮かんだ。

きっと彼女が知れば「不純異性交遊」だと懲罰房に連行されそうな気がするけれど、誓ってそんなやましいことなどはしていない。

：まあ、考えたことがないと言えば嘘になるのだが、うん。

部屋で荷物を降ろし、簡単な調理を行っていた僕は、ちよūdいタイミングでチャイムの音を聞いた。

作り終えた手土産を準備し、鍵のかかかっていないドアを開ける。

「こんばんは。準備が出来ましたので呼びに来ました。：あら、もしかしてお土産でしょうか？」

「簡単な食事だけだね。ただお皿が多くなっちゃったから持つていくのを手伝って欲しいかも」

長い付き合いから分かるようになった、冬樹さんの少し嬉しそうな顔を見た僕は、冗談めかして彼女に手伝いを持ちかける。

はあ：と見かけだけのため息を吐きつつもちゃんと手を伸ばしてくるあたりがなんと冬樹さんらしい。

その後、冬樹さんの部屋に集まった僕たちは、一足早い二人だけの食事を始める。

そもそも一緒にいる事が多い僕たちにはそれと言って特別に話を

するような事はないのだが、それでも日常の会話が尽きる事はない。
さつき買物をしたスーパーで……そういえば昨日塾の講師が
……この前偶然誰々に会って……。

そんなとりとめもない会話を繰り広げていた僕たちだったが、その
中でふと先ほどの一件が脳裏をよぎった。楽しみの場に持ちだす話
ではないのかもしれないがやはりどうしても気になってしまい、この
際直接聞いてしまおうかとも思ってしまう。

と、気が付けば冬樹さんもまたいつものようになにか考え事をして
いる様子を見せていた。

もしかして同じことを考えているのかと思っただ僕が思い切って話
を切り出そうとしたとき、それより先に彼女が先に口を開く。

「あの、転校生さん。その、すみません」

予想だにしていなかった謝罪を受け戸惑う僕だったが、相も変わら
ず迷った表情を浮かべる彼女の次なる言葉を待ち……そして固まる
こととなる。

「…すみません。今日は、ノエルは来ません」

ノエルちゃんが出来ないということとは…えっ、でも冬樹さんから誘わ
れたわけで。…ということとは、つまりどういうこと？

まったく予期していなかった事態に戸惑いを隠せない僕と、なにや
ら決意を固めたような表情を見せる冬樹さん。

いつもはなんら距離感を感じることなく二人で過ごす時間も、今は
なんだか遠い日の出来事に感じた。

そして、二人だけの夜が始まる――。

《続く》

冬樹 イヴ 《後編》

『…すみません。今日は、ノエルは来ません』

その言葉の意味を僕はどう捉えればいいのだろうか、テーブル越しに座りながら下を向いたままの女の子を視界に入れつつ、この無言が続く時間の中でずっと考えていた。

だが、何度となく繰り返される思考の中で、僕は常に一つの結論を脳裏に浮かべる。…もしかして、彼女は僕のことを――。

「…転校生さん。私の話を聞いてもらえますか？」

不意を突かれた形で声を掛けられ、跳ね上がりそうになるのをなんとか抑える。

「あつ、うん。どうしたの？」

声だけでも平静を保とうと心掛けながら彼女に話を促すと、やがて顔を上げた冬樹さんは、真っ直ぐに僕の目を見つめながら言葉を紡ぎ始める。…なんだか心なしか睨まれている気はするのだが。

「…転校生さん。昨日、誰かに告白とかされてませんでしたか？」

「……えっ？ 聞いてほしいってそういう話？」

「質問してるのは私なのですが。なんですか…やましいことでもあるのでしょうか？」

なんだろう、こう…予想していた展開と違うことに驚きを隠せない僕がいるわけで。…いや、というかそれ以上に――。

「いや、うん。そうなんだけどさ。…ごめん、なんで知ってるの？」

「先ほどの喫茶店で、近くにいた女の子たちが楽しそうに話していましたよ？ はて、何人目…みたいな会話だったと記憶しているのですが」

あ、ああ…あれはそういう……。

今さらながらに「理由」を知った僕だが、そんなことはすぐに頭から消え去った。なぜなら、目の前にとてつもない威圧感を感じさせる女性がいるからだ。

「いえ、私には関係ないことなのですが。いえ、それよりも何故、よりもよって今日という日に、そんな話を聞かされなければならないの

でしょうか！ …今日がどれほど大切な日かあなたに分かりますか？」

いやまったく分からない。そもそもなんでこんなに怒っているかすら分からない…いいこともない？ …だけど、はたしてその考えを口に出してもいいものだろうか。

「…はあ。いえ、あなたに言っても仕方ないことでしたね」

そんな僕の表情を見て心境を悟ったのか、いつも以上に深いため息を吐きつつ若干の冷静さを取り戻した様子を見せる冬樹さんだったが、やがて再び口を開き始める。

「転校生さん。あなたは今、幸せですか？」

「え？ うん、幸せ…かな」

唐突ともいえる質問の変化に戸惑いつつも、素直な素直な気持ちで答える僕に対し、冬樹さんは「そうですね」と小さく呟く。心なしか、その表情には微かな笑みが浮かんでいるように見える。

「…私です。私も、幸せです。学園にいた頃の私には、きつとこんな“世界”なんて想像も出来なかつたでしょう。…ええ。まさか、あなたと過ごす日々が、こんなにも幸せだなんて事には」

初めて聞いた冬樹さんの「言葉」。

僕との時間を幸せだと、そう話す彼女の笑顔はとても綺麗で、ただ――。

「ですが、それと同時に怖くて…辛くもあります」

「…怖くて、辛い？」

そこで一度言葉を切り俯いた彼女が再び顔を上げたとき、そこにはたしかな迷いと戸惑いの色を浮かべた瞳が見えた。だが、それはきつと僕もまた同じであったと思う。

分かっている。分かっているのだ。この会話の意味も。そして彼女が何を迷っているのかも。気付いてしまった“それ”を、しかし口にしてしまったら僕たちの関係は大きく変わってしまう。だからおそらく、彼女は僕に選択を委ねたのだろう。

——いや、違うか。

「…そうじゃない、よね」

そう。冬樹さんは前に進もうと一步を踏み出したのだ。今の日常に満足している僕とは違い、変化を求める確かな一步を――。

ここに至って、私はまだ迷っていた。

決めたはずだ、この関係を変えようと。幸せだった日常を捨てても、私は前に進むべきだと。

『ねえ、あれが何度も告白を断ってるって噂の彼でしょ?』

『話してみるといい感じなんだよね。わたしも狙っちゃおうかな』

怖かったのだ、このままではいつか終わってしまうのではないかと。

『あつ、でもあそこにいるのって彼女じゃないの?』

『んく違うんじゃない?仲は良さそうだけど恋人って感じじゃないよね』

辛かったのだ、幸せの中でさえ、なにも変化が訪れることの無い関係が。

この気持ちに気が付かなければ良かったと思つたこともある。そうでなければ、気の置けない友人としての関係を築いてゆく、そんな未来もあっただろう。

だけど…だけど、もうその感情から目を逸らす事など出来ないのだ。…そうでなければ、私はあの子に――。

「僕ってさ、学園にいた頃って結構モテモテだったんだよね」

「……………は?」

なんだか耳を疑うような話が聞こえてきたのだが、この人は今、な

んて言ったのでしょうか。

すみませんがもう一度お願いします。そう告げようとした口は、しかし彼の真剣な眼差しに遮られる。そこには先ほどまでの私と同じような表情はどこにも見えない。

戸惑いを表情を見せているであろう私の顔を一目見ると、彼は静かに目を閉じ、思い出すような声色で語り始める。

「気付いてなかったわけじゃないんだけどさ、信じられなかったんだ。弱くて頼りない僕が誰かに想いを寄せてもらうなんてことがあるわけない。それはきつと勘違いだ、ってね。…だけど、そうじゃなかった。彼女たちを見ていなかったのは僕だけで、みんなは僕に真っ直ぐな気持ちを向けてくれていたんだよね」

それはなにか懐かしむようであり、

「でもさ、気が付くのが遅かったんだ。…告白されて、初めて知ったよ。ああ、この人は本当に僕のことが好きだったんだな、って。でも、そんな彼女たちに、僕には応えることが出来なかった」

そしてどこか寂しさと悔しさの入り交じった、そんな声。

「涙を見た。嗚咽を聞いた。僕は、彼女たちの“想い”を受け取った。」

そんな話を聞きたかったわけじゃない。

どうしてそんな大切な話を私にするのだろうと考え、どうしても嫌な考えが頭から離れない。

「ごめん、付き合えない」その一言が言外に突きつけられているようで、ただただ怖い。

だけど、これは私から踏み出した「一歩」だ。

それに彼が応えようとしている以上、どのような結末であろうと逃げ出す事など許されない。

だから、私も受け入れるのだ。これから紡がれることとなる、彼の言葉のすべてを。

「…なぜ、告白を受け入れなかったのですか？ 多くの…きっと本当に多くの女性があなたに想いを寄せていたはずですよ。それなのに…なぜ？」

もう一度踏み出す小さな一歩。前に進むために、自分の足で歩きだす。

「うん。一つは、僕自身が為すべきことを終えていなかったから。魔物を倒すことじゃない。学園を卒業することでもない。その先にある“未来”を掴んで、初めて僕は僕のことを認められるような気がするんだ」

「……教師……ですか？」

彼は閉じた目を開き、次に私の瞳を真っ直ぐ見つめた後、話を続ける。

「大変な道のりだからさ、きつとそばに誰かがいたら甘えてしまう。辛いときに、頑張ったねって声をかけられたら、きつと僕は駄目になってしまう。…だって、僕はそんなに強くないんだよ」

そう。僕は決して強くない。

教師になって魔法学園を支えたいという目標を成し遂げる中で、誰かと寄り添い生きる事など、僕には出来ない。できるはずなどないのだ。だけど――。

「でもね。告白をされた時、いつも僕の中には一人の女の子がいたんだ」

真っ直ぐ見つめるその先には、顔を背けることなく向き合ってくれ一人の女の子がいる。

「ちよつと頑固でおつちよこちよいだけど、でも、いつも真っ直ぐに誰よりも強く生きている女の子が…いつも僕の傍には居たんだ」

忙しい。不愉快だ。そんなことを言いながらも、なんだかんだと用事に付き合ってくれる女の子。

「そんな女の子に追いつきたくて、隣に立ちたくて、僕は僕の“未来”を決めた」

誰よりも厳しくて、でも時折見せる優しさがとても眩しい、そんな女の子のことが――。

「今は僕の気持ちを伝えることが出来ないけれど…いつか、きつと必

ず伝えるから。だから——」

そんな彼女のことが、僕は——。

「嫌です」

「だから……えっ?」

言葉を遮られ、ふと気が付いた時、そこにいるのは涙を流している少女だった。

「嫌です。無理です。駄目に決まっています。そこまで言われて、あなたの想いを知って…それなのになぜ待っていないなければいけないのでしょうか。待っていてほしい? そんな独りよがりな考えが私に通用すると思っているのですか?」

「だから、さっきも言ったように」

「いいですかっ! 転校生さんっ!」

泣き笑いながら、あるいは怒りながら言葉を連ねる彼女の、叱るかのような一言に思わず背すじを伸ばしてしまう僕は、

「私は、あなたのことが、好きなんです」

その言葉一つで、改めて冬樹さんのことが好きなのだ実感させられる。

もう止められない。

「いいですか、転校生さんっ! 私があなたを甘やかしましたことがありましたかっ?」

止められるわけがない。

「逃げようとしたら引きずり戻しますっ!」

彼の想いを知ってしまった今、この伝えたい想いを遮るものなどない。

「立ち止まったら引つ張りますっ!」

だから。

「だから……ここから、いっしょに。私はあなたのことが、好き、なんです」

それ以上は言葉に出来なくて、だからきつと、彼が何を言っても言

い返せないから。

「…僕は…:…んっ」

なにも言葉は要らないと、彼の唇にキスをした。

短くも長く感じる時が終わり、その後告げる言葉はただ一つだけ。

「初めてなんですから、責任…:…とって下さいね？」

彼の表情は潤んだ瞳で見ることが出来ない。それでも、伝わってくるものはある。

静かに伸ばされた手に抱きしめられて、私も求めるように抱きしめ返す。

僕は、本当に、弱いんだ。

ええ、言われなくても知ってます

二度目のキスは、二人分の涙の味がした。

魔法学園に入学し、勉学に励んでいた私には、「恋愛」というものがまるで理解できなかった。

告白をされたことはある。クラスメイトから好きな人はいないのかと聞かれた事もある。

他人に興味を抱くだなんて余程暇なのだと思いつつそういった状況で抱く感想はいつも同じだった。そんなものは時間の無駄だ、と。

むしろそんなことをしている時間があるのならば、少しでも多くの知識を取り入れ魔物の殲滅に力を注ぐべきではないのか。そんな風に思う一方で、しかしそれらを口に出すことはない。

なぜならば、私の人生にはまったく関係の無い人たちだからだ。

他人は所詮他人でしかない。

クエストで協力することはあるかもしれないが、結局最後に信じられるのは己に力だけである。

なればこそ、魔法学園という他にない学び舎で為すべきことは、力をつけて一人でも戦っていけるようになる。つまるところ「エリー

ト」であること。

「恋」をしていればいい。遊びに行けばいい。その時間だけ、私は誰よりも前に進む。

かつての私は、そうやって世界を一人で生きていた。

変わり始めたのは、ある一人の“転校生”が現れてからだだった。

人類史上初の「膨大な魔力を他人に譲渡できる」体質の持ち主。

実際にその目で見るまでは信じることの出来ないような、存在自体が“奇跡”のような人物。

その常識を覆す魔法使いの登場に盛り上がる周囲とは裏腹に、私は案の定冷めた反応を見せていた。

たしかにすごい力ではあるが、同時にそれは“毒”となる。その“転校生”の力を頼りにし、やがて依存することを覚えてしまえば最後、その魔法使いは怠惰な道を歩むことだろう。

それに、本当に人類の希望と成り得るのであれば、いずれ自然と接点を持つはず。そう思った私は少しの興味を惹かれる程度に留まり、自ら関わろうとは考えてもいなかった。

しかし、運命とは皮肉にも私と彼を近づけることとなる。

『おはよう！冬樹さん！』

『どうかしたの、冬樹さん？』

『あのさ、冬樹さん！』

冬樹さん。冬樹さん。冬樹さん。

何度も私の名を呼び、どれだけ冷たく接しても決して遠ざかろうとしない不愉快な人。

無遠慮にも人のプライバシーをずけずけと踏み越えてゆき、へらへらとした笑顔で手を差し伸べてきて、困った時も、そうでない時も、いつも私の前に現れ、忌々しくも記憶に残っていく。そんな年代の男

の人。

それが私の彼に対する評価で、すべてだった。そう、それですべてだったはずなのだ――。

嫌いという感情とは、関心のある者に向ける感情である。そんな言葉を目にしたのはいつだっただろうか。

そして、やがてそんな言葉が正しく思えるほどに、彼の存在は私の中で膨れ上がっていった。

ノエルが慕っていたから？ 風紀委員の仕事と共にこなしたから？ 幾度となく二人でクエストに臨んだから？

いや、違う。そんな理由はきっかけに過ぎず、彼が彼だからこそ、私はどこかで意識せざるを得なかったのだと感ずる。

ただ、それは決して「恋」ではなかったと断言できる。嫌いな部分だつてたくさんある。

情けない笑顔、頼りない姿。優柔不断で鈍感で……その癖してやたらとモテる。

魔法学園でも呆れるほどにアプローチを受けており、さらには予備校に入った後も何度か告白をされているという話を聞く。

そしてなにより、こうまでも私の心を揺り動かす彼のが、私は本当に嫌いである。

――それなのに、なぜ私はこんなにも彼と過ごす時間を愛おしく思うのだろうか。

なんだか押し切られちゃったなあ。まったく、自分のことながら意志の弱さと言ったら

あら、昨日の夜はあんなにも激しく私を求めて来たのに、この期に及んで弱音とは。そうですか、私はそんな人に汚されてしまったんですね

慣れないことを言うから顔が真っ赤なんだけど。…はははっ。

…っ！ 相変わらず不愉快な人ですね。それよりも、時間は大丈夫なんですか？

うん、大丈夫。…あつ、ノエルちゃんから連絡が来てるよ。今日の夜に帰ってくるってさ。…ねえ、随分とタイミングが良いんだけど、もしかしてノエルちゃんって昨日のこと……

…さて、早く準備をしなければ。ほら、ゆつくりしていると遅刻しますよ？

…はあ、まあいいや。部屋で準備してくるから。また後でね、冬樹さん

イヴです

え？

私の名前は、「冬樹」ではなくて、「イヴ」です

…そうだね。また後で、イヴさん。

はい。また後で。…あつ、そうです。忘れてました。

彼と話をしている時間が好きだ。

彼と勉強をしている時間が好きだ。

彼と街を歩く時間が好きだ。

彼の、私に向ける優しい笑顔が大好きだ。

……分かってる。

『お姉ちゃんっ！ あたしを理由にして逃げないでっ！』

……分かっていたのだ。

『だってノエル！ あなたはっ！』

……それはもう、目を逸らす事の出来ない感情。

『お姉ちゃんだからいいのっ！ ……他の誰でもない、あたしの一番大好きなひと、だから……』

誰にも、大好きな妹にだって譲りたくない大切な気持ち。

『がんばれっ！ おねえちゃんっ！』

——この“幸せ”の正体はきつと。

大好きですよ。転校生さん

《冬樹 イヴ 了》

服部 梓 《服部という忍者》 予告

魔法学園で過ごす最後の夜。それはきつと、この学園で日々を過ごしてきた人にとってかけがえのない特別な時間となるだろう……なぜなら、僕が今そう感じているのだから………なんてね。

「……やっぱり、少し寂しいかな」

例えば、チトセさんやヤヨイさんのようにすでに学園を発った人たちもいる。

魔物が出現しなくなった以上この学園に留まり続ける必要はない………聞き方によってはドライな考え方だと言えるけど、でも「事情」を抱える人たちにとってはそれぞれに大切なことがあるわけ………。

ただ、それでもこの学園を、過ごしてきた時間も含めて大事に思ってくれていることはみんな分かっている。

そして、だからこそ今日の卒業式には、誰一人欠けることなく集まることが出来たのだろう。

つい先刻まで開かれていた、お疲れ様会と称した大々的なパーティーは大盛り上がりを見せていた。

卒業生と在校生、そして学園OBが入り交じって大騒ぎ。料理部の小蓮とやってきた里中さんの料理はとても美味しかったし、突如としてOBである音無さんが歌い始めればそこからカラオケ大会が始まる。現役アイドルの絢香さんとモデルの純さんが会場に現れたときなんて特に凄かった。姿を見た在校生たちが興奮しすぎて会場がさらにヒートアップしたのは言うまでもない。

「最後にまさかもう一度風紀委員の手伝いをする羽目になるとは思っ
てなかったけど………。まあ、いい思い出かな？」

と、そんな感傷に浸っていた僕だったが、とある気配を感じてふと部屋の中を見渡す。

先ほど荷造りを済ませたことにより、部屋にはおおよそ私物は見当たらない。あるのは学園から支給されていた今腰を掛けているこのベツトだけ。

本当は卒業式が終わった時点で次の住居がある風飛に向かつても構わなかったのだが、やはりというべきか思い出の深いこの寮での最後の一夜を大切に感じたいと思ったことからこそ、僕は今ここにいる。

そして、なによりも大切なことがもう一つ……。

「……だあーれだ……なんちゃってっ！」

突如として目の前が真っ暗になるも、しかし驚くことは何もなかった。

視界を遮る手の感触に、背中に感じる仄かな温もり……そして、彼女らしいと言える茶目っ気を感じさせる声。

「……あれ？あんまし驚かないツスね先輩」

「まあ、もう慣れたし……それに声だけでも十分分かるからさ」

長い学園生活やクエストを共にし、遊びもいたずら事も一緒に楽しんできた悪友とも呼べる間柄の少女。そんな彼女を待っていたことこそが、僕に在るもう一つの「理由」。

「待ってたよ。梓」

「はい、お待たせしたツスね。先輩」

いつだったか、二人だけの「天文部」で交わした約束。

それから特に言葉にはしなかったけど、もしかしたら忘れてしまいかもしれない程度に、本当に小さな約束だったけど、それでも僕たちはちゃんと覚えていた。

『卒業式の夜、二人で星を見ましょう。……ね、先輩っ？』

服部 梓 《服部という忍者》

ぐりもあ しよくとすと〜り〜
ぐりもあ しよくとすと〜り〜 ①

今回の登場人物

転：転校生・・・みんな大好き転校生。トラブルに見舞われ過ぎて最近魔物よりも女の子たちの方が危険なのではないかと疑い始めている

智：南 智花・・・転校生大好き勢筆頭メインヒロイン。だけど今回はメインモブ

夏：岸田 夏海・・・日々ネタを求めるトラブルメーカー。その身どころか転校生すらも生贄に捧げ記事を召喚

鳴：遊佐 鳴子・・・神出鬼没の謎に満ちた新聞部部长。この人も結構転校生を振り回す

風：水無月 風子・・・鬼の風紀委員長。今回はメインヒロインよりもヒロイン力が高い

氷：冰川 紗妃・・・仕事熱心な風紀委員。怒られたいと名乗り挙げるものが者が後を絶たないらしい

春：瑠璃川 春乃・・・妹大好き最強お姉ちゃん。原作でもアレだが今作でもアレ

結：穴戸 結希・・・いつもクールな天才博士。今作ではちよつぴりお茶目な一面も

卯：立華 卯衣・・・魔力がある限り無敵な人造人間。原作よりも天然になった結果・・・

イ：冬樹 イヴ・・・孤高のクールビューティお姉ちゃん。今作ではちよつと壊れかかっている

梓：服部 梓・・・元気で明るい後輩系忍者。可哀想なくらいパシラれてる姿が目撃される

ぐりもあ しよくとすと〜り〜 ①

その1：もしも転校生と瑠璃川春乃の相性がズバ抜けて良かったら

風「おやおや、こんなところで奇遇ですね。アンタさん、いま暇ならちよっと手伝ってほしいんですが」

転「げっ、風紀委員長……じゃなかった水無月さん。ごめん、今取り込み中で……」

風「……おやおや、なにか隠し事があるみてーじゃねーですか。いえね、実はこの辺りの教室に不審な人物がいるって連絡が入りましてね」

転「いや、えっと……。春乃さんっ逃げて!!」

春「ん?どうした……。ちっ、なんで風紀委員長がここにいろのよ!!」

風「：瑠璃川春乃。その手に持つカメラで何をしていたのか、じつくりと懲罰房で聞かせてもらいましょうかね。もちろんアンタさんもですよ」

転「くっ、こうなったら……。春乃さん、ここは僕に任せて早く逃げてください……」

春「……いや、でもそんなことしたらアンタが捕まっちゃうわよ!」

転「……分かってます。それでも、そのカメラに収めたエンジニア秋穂ちゃんの写真さえ無事だったら、僕はきつとどんな取り調べにも耐えられるはずですよ……!!」

春「……転校生……。くっ……」

風「はーい。勝手に自白が済んだところで二人ともお縄につきましようねー」

転「さあ、春乃さん!早く逃げて!」

春「……礼は言わないわよ……。あとで、ちゃんと二人で私たちの天使を愛でるんだからね」

転「もちろんですよ……。最後に、義姉さんって、呼んでもいい

ですか？」

春「〇すぞ」

風「いや、もう二人とも顔が割れてるんで逃がしませんけどね。
さー観念しなせー!」

転春「うおおおお!あきほーっ!!!」

.....

バツ

風「.....夢、でいいですよね.....?」

その2：僕が何をしたというのか

夏「いたいたっ!ちよつと転校生、あたしに付き合っつて欲しいんだ
けど!」

転「ええ.....なんか嫌な予感がするんだけど.....」

夏「ちよつと!せっかく夏海ちゃんをお願いしてるんだから!ね、
この通り.....お願い!」

転「はあ.....それでなにさ?」

夏「さんきゅーっ!それでね、あたしいまちよーつと手が離せな
くつて。この資料を部長に渡して欲しいのよ」

転「遊佐先輩に?分かった。それだけでいいの?」

夏「うん!悪いわね、よろしくっ!」

.....

『衝撃！美人記者は見た！報道部部长と謎の男の影！』

『大スキャンダル！ついに噂のゴシップライター、陰で男と密会か!?』

夏「くっ、さすがは部長！あたしの渾身の記事にこうも見事に切り返してくるなんてっ！」

鳴「いやー、なかなかいい作戦だったけどネタの捏造はいけないな。まあ僕に一矢報いようとしたという気概は認めなくもないけどね」

夏「・・・次はちゃんといい記事を書いて部長をあつと言わせてみせませうからね！」

鳴「ふふふっ・・・楽しみにしてるよ。夏海」

転「ちよつと！この状況の中でよくそんなのんきなことを言ってるれませうねっ！・・・うわっ、あぶなっ！」

氷「こらっ！三人共逃げずに大人しく捕まりなさいっ！」

鳴「おー！いまのはよく避けたねっ！さすがは転校生君！」

夏「やるじゃない転校生っ！あつ、ところで次の記事なんだけど・・・」

転「ぜーったいいやだああああ!!」

その3：その時、世界が揺れた

結「子供？」

卯「はい。私はマスターたちのように人間ではありません。ですが、人としての機能を備えている以上、私でも生命を生み出すことが出来るのかと、そう疑問に思いました」

結「・・・そう。あなたもずいぶん変わったわね」

卯「そうでしょうか。・・・いえ、そうなのかもしれないですね」

結「ええ。そして、それはとてもいいことだと思わ。これも天文部や転校生君のおかげかしら」

卯「はい。みんなとても色々なことを教えてくれます」

結「良かったわね、卯衣。それでさっきの話だけど、ごめんなさい。

いまの私にはまだ分からないわ」

卯「・・・そうですか」

結「ごめんなさいね。まだ分かっていないことの方が多いから。でも、可能性が低いとは思っていないわ。・・・根拠があるわけではないのだけれど、“私”が作ったのだからきつと・・・」

卯「ありがとうございますマスター。今はその言葉だけで十分です」

結「・・・念のために言っておくけれど、今はまだ子供を作ろうだなんて思っちゃだめよ。魔物のことも、身体に関しても、もつと色々なことが解決してからの話になるわ」

卯「はい、了解しましたマスター。それでは、私は失礼します」

結「ええ、また。・・・さて、一応彼に連絡を入れておかないと。・・・あら、電源が入っていないのかしら。まあ、今から来るのだしそのときに伝えましょう」

卯「私にも子供が作れるかもしれない。・・・なんだか不思議な感じだわ」

卯「つながらない・・・この気持ちを伝えなかったのだけれど連絡が取れないわ。どうしたらいいのかしら。・・・あら、あそこは・・・」

転「こんにちは宍戸さん。定期検診に来ました」

結「来たわね。実は検診の前にあなたに話しておきたいことがあって・・・」

ピー「・・・ガー・・・ガー・・・」

・・・これは、もう電源が入っているのかしら。よく分からないわ。転校生君。聞こえているかしら？ デバイスに繋がらなかったからこの機械を使って伝えるわ。

転校生君、私はいつか子供が欲しい。

ざわ・・・ざわ・・・!!

イ「・・・・・・・・・・・・・・・・」
梓「・・・・・・・・・・・・・・・・」

カチツ・・・・・・・・カチツ・・・・・・・・カチツ・・・・・・・・カチツ・・・・・・・・。

イ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

梓「・・・・・・・・・・・・・・・・」

イ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

梓「・・・・・・・・・・・・・・・・え、えつと・・・・・・・・あつ、冬樹先輩。そこに置いてあるペン、なんかオシヤレツスね！自分もそういうの欲しいかなーっなんて」

イ「・・・・・・・・このペンのことかしら？・・・・・・・・そう。貰いものだから私を選んでものではないのですが・・・・・・・・まあセンスが良かった、ということなのかもしれないわね」

梓「へえー。こう言っちゃなんですが、冬樹先輩が他人から貰ったものを使ってるなんて、なんか珍しい感じでツスね。・・・・・・・・ああ、別に悪い意味とかじゃなくてですネ」

イ「そうかしら？・・・・・・・・まあ、せつかく彼がくれたものでもあるし・・・・・・・・」

梓「・・・・・・・・彼・・・・・・・・？」

イ「・・・・・・・・いえ、なんでもありません。・・・・・・・・それよりも、服部さんのその髪飾り、最近よく見かけますがとても似合ってると思うわ」

梓「本当ツスか！いやー、冬樹先輩に褒めてもらうなんて嬉しいツスね！いえ、この髪飾り自分のお気に入りです！・・・・・・・・この前買ってもらったんツスよね、彼に・・・・・・・・」

イ「・・・・・・・・そう、彼に・・・・・・・・」

梓「・・・・・・・・ええ、彼に・・・・・・・・」

イ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

梓「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「転「すみません遅れました！……えっ、なに
どうしたの？」

その5：もしも転校生と水無月風子の相性がズバ抜けて良かったら

氷「それでは委員長、失礼します」

風「ええ、今日も一日ごころーさまでしたね。また明日もよろしく
おねげーします。……さて、どうですアンタさんは風紀委員の仕事
には慣ましたかね？」

転「なかなか仕事が多くて大変だよ。……うん、でも氷川さん
や怜が丁寧に教えてくれるからなんとかやっていけそうだよ」

風「それはなによりですね。……ところで、氷川や神風だけって
こたーないですよ？」

転「もちろん、冬樹さんや梓も……くくつ、冗談だよ。誰
よりも委員長に感謝してるってば」

風「……名前……」

転「えっ？」

風「二人だけの時は名前で呼ぶって、この前言ってくれたじゃねー
ですか」

転「いや、なんかちよつと恥ずかしくて……」

プルル……プルル……

風「ん、見回りをしている人たちが何か見つけたみてーですね」

転「ははっ、休まる時間がないね」

風「まあまあそう言わずに。……さ、行きますよ転校生さん。しっ
かりとついてきてくださいな」

転「うん行こうか。どこまでもお供しますよ、風子」

……
……
……

バツ

風「……………夢、？」

風「……………」

風「……………もう一度、寝ましようかね……………」

《ぐりもあ しよとすととり》 ① 完 《》

グリモア アナザーエピソード
願いをあなたに

ああ、これは夢だ。

かつてよく利用していた馴染みのカフェの中、目の前にはどうにもすでに注文を終えているらしい可愛らしいカップが一つ。

店内を見渡せば、モールが幾重にも巻かれた大きなツリーがその存在感を放ち、さらにそれを際立たせるように、赤に白にとLEDライトの光が色彩を放つ。

スピーカーから流れる音楽が耳に心地よく、まさに楽しいクリスマスを迎えようと言わんばかりの雰囲気、自然と心躍らずにはいられない。

ジングルベル♪ ジングルベル♪ 鈴がなる♪

つい耳にする音楽に鼻歌でリズムを取ってしまう。

今も昔も人前でそんなことはしないのだが、誰に見られるでもないこの状況ではどうにも気が緩んでしまうらしい。

……はて、自分はこんなに子供っぽい性格だっただろうか。もつとこう大人びた雰囲気が魅力的なレディだったはず……。

などと冗談めいたことを考えていれば、ふとすぐ近くにある窓ガラスが目映る。

小柄な体型に二つ結びにした長い髪。我ながら意地の悪そうな目つきで、今の状況を楽しんでいるのかそれとも懐かしんでいるのか、珍しくだらしない口元をしているではないか。

——ふふっ、どうやら緩んでいるのは気だけではないですね。そんなことを思いつつ、わたしはゆっくりと目を閉じる……。

少しした後、気を落ち着かせようと、手元のカップに目を配る。いつそ本物なのかとさえ思わせる香ばしい香りに鼻孔をくすぐら

れ、そつと口に運んでみれば懐かしさすら感じる微かな苦み。

今は慣れたブレンドコーヒーとは少し違う味に、これはもしかしたらあの時のコーヒーが再現されているのではないかと感想を抱いたが、それもすぐにどうでも良くなってしまう。

大切なのは、このコーヒーが美味しいという、その一点のみである。

ゆつたりと飲み終わる頃、自分の口から洩れる吐息の音を聞いた。久々にのんびりとした時間を過ごしている気がする。せつかくの良い夢なのだからこのまま微睡んでゆくのも悪くないと思いつつ、しかし自分の“やるべきこと”を為すため、席を立ちあがる。

おや、少し目を離れただけで、空になったカップは姿を消しているではないか。

片付ける手間が省けたというお得感を感じつつ、なんとも自分に都合のいい夢だと小さく笑ってしまう。

であるならば、もしかすればこの先もわたしの望む未来へと続いてくれるのかもしれない。

そんな淡い期待を胸に抱きつつ、わたしは店を後にする。

さあ、彼が待つ場所へと歩き出そう。

そして、きつとわたしはもう一度――。

願いをあなたに

わたしには、好きな人がいた。

容姿はまあまあ、成績もまあまあ。お調子者で、おつちよこちよいで、女の子が好きで、どちらかというところとちよつとスケベ。

思っていることが顔に出やすく、その上騙されやすい。あれでは会話の駆け引きなど出来やしないだろう。

良く言えば誠実で、悪く言えば朴念仁。妙なところで鋭いくせに、それでいて肝心なところでは点と気付かない。

だけど、誰よりもみんなから慕われていた。そんな一つ年上の男の子。

今日、久々に彼の顔を見た。

じゃあまたね。その言葉を耳にしたあの時から、いったいどれだけの時が過ぎ去ったのだろうか。

それは、他人からすれば大したことのない、指を折って事足りるほどに僅かな時間なのかもしれない。

では、わたしとしてははどうか？ ……さあ、よく分からない。でも、考えるのもめんどくさいと、そう感じるほどには長い時間を過ごしてきたらしい。

さてそんな彼だが、結婚式という人生で一二を争う大舞台に姿を現した時、式場にいた女性たちから一斉に注目を浴びることとなる。

親しみ、憧れ、そして恋。様々な色が宿る視線の中、彼は一体何を想い、感じ取ったのだろうか。そして、わたしは……一体どんな表情を浮かべていたのだろうか。

学園で共に過ごしていた頃と変わらないような、あの優しい瞳。

見た目は変わらずともどこことなく力強さを感じさせている一方、憎らしいのは意外にもタキシード着こなしていることだ。かつて神宮寺家主催のパーティに参加した時はあんななおどおどとしていたのに、いまではもう見る影もない。

そんな風にわたしが眺めている頃、彼の元へ懐かしいかつての友人たちが集まり始める。

お久しぶりですね。いまは何をされているんですか？ そのタキシードとても似合ってます。

口々にそんな言葉を繰り返り広げる彼女たちに、彼は苦笑いで言葉を返す。

ああ、あのため息交じりの苦笑いは昔から変わらないんだな。

そんな感想を胸に抱きながら、少し冷静になった頭でこの状況をどのようにして収束させるかと解決策を思案する。

……よし、決めました。まったく仕方のない人ですねー。ええ、本当に、仕方のない人だ。

◇◇◇

いつの間にやら手に持っていた傘を差し、わたしは真っ白な世界を歩き続ける。

ほんの少しばかり積もった雪の上を歩き踏むとギョツ、ギョツと音が鳴り、そんな音すらもまた、あの時を思い出させる。

目の前に広がる銀幕の世界もまた同じだ。いつも見る街の景色とは異なり、しんしんと降りゆく雪に彩られたその光景は、あの頃のわたしでさえ不覚にもロマンチックに感じていた。……いや、その表現はわたしに失礼かもしれないですね。

そんな風に心の中で軽口を叩くわたしだったが、一步、また一步と近づいたたび、自分の鼓動の高鳴りを感じ始める。

どうだろう、それはもしかしたらかつてより動揺しているのかもしれない。

久々に彼に会うということの意味。はたして、わたしは平然としていられるだろうか。何食わぬ顔で彼と普通に話が出来るだろうか。さて最初になんと声を掛けようか。

………。

公園のベンチに彼は座っていた。

青いミリタリー風のコートを着ながら、しかし雪が積もっている様

子からするに、どれほどかわたしを待つてくれていたらしい。

待ちましたか？ 5分くらいかな？ はあ……そこはいま来たところって言うんですよ。

散々に迷った挙句にそんな他愛もない会話を想定していたわたしだったが、それらの言葉が口から出る事はなく、そつと傘の影に彼を隠してしまう。

心の中で嘆息しつつ、頭に、肩にと積もった雪を払いのけ、なぜか恥ずかしそうにしている彼の姿を見ていると腹が立つてくるのはわたしがいけないのだろうか。

そうした後、彼からお礼の言葉を告げられた。

いや、本当に大したことはしてないし、むしろもつときちんとして欲しい。そんな心情を隠せたか否か、気持ちをもそのままに何をしていったのかと問いかける。大丈夫、大した答えは期待していません。

すると、数瞬思索した素振りを見せながら、彼は苦笑いした顔で、来るときは晴れていたんだよ？との返事を返してきた。

……………。

きつと、わたしはいま大層呆れた視線を向けているに違いない。

あはは……。と力なく笑う彼のことを見ていると、自分はこの人のどこに惹かれたのかと本気で自問自答をしたくなる。

頼りなさげな表情に、意思の弱そうな瞳。女の子の言うことなら何でも聞いてしまうのではないかと思う程に流されやすそうな雰囲気なんかは、本当に当時のまんまだと、いつそ懐かしささえ覚えるほどである。

まったく、なぜ雪が降る中こんな場所に座っているのか、どうして連絡を超越さないのか、というか雪を払いなさい。そんな風に聞きたいこと言いたいことは山ほどあったのだが、とりあえず確認できたことまず一つ。

それじゃあ、行こうか。

ふと、いつの間にやら立ち上がっていた彼が、わたしの傘を片手に

いつもの笑みを浮かべながら声を掛けてくる。

不意を突かれたようなタイミングに思わず戸惑ってしまおうわたしだったが、そういうえば彼とは待ち合わせをしていたのだと思い出す。どうにも彼との情けない再会の印象が酷すぎて本来の目的を忘れてしまっていたようだ。

……いや、いけない。こうなってくるとだいたい彼のペースに巻き込まれてしまうのがオチになる。

現実でならまだしも、自分の夢の中でまでこんな優柔不断な男性にリードされるわけにはいかない。というよりも、そんなことは断じてあつてはならない。

少し考えた末、わたしは右手を伸ばす。

一向に動きの無いわたしを不思議に思っつか首を傾げていた彼は、やはりどうしたものかと思案し……やがて困惑した表情を浮かべる。よし、予想通りの反応だ。

期待していた通りの展開に小さく笑みを浮かべながら、少しの間をおき、彼に見せつけるように仰々しくため息を吐く。

そして告げる言葉はこうだ。あー、こういうとき優しい男性ならきっと女性をリードしてくれるんでしょーねー。

すると、これまた思った通りに、彼はますます困惑した表情を色濃くさせる。

時折大胆な行動をとる彼だが、こういうった異性とのやり取りにはどうも鈍い部分がある。ならばそこを攻めてこちらのペースへと持ち込んでしまおうというのがわたしの描いたシナリオであり、実際その策はあと一歩で成功することだろう。

我ながらナイスなアイデアだと称賛しつつ、そろそろトドメだと言わんばかりにエスコートしてみせると催促してみせる。

と、次の瞬間、伸ばした腕が優しく引っ張られるのを感じた。

………えっ？

突然の出来事に困惑するわたしだったが、思わぬ衝撃にたたらを踏みながらも彼の胸元へと身体が納まったことで、ついには言葉を発することも出来なくなってしまう。

…落ち着け…落ち着きましよう…。

ここでペースを乱したらわたしの負け。まずは冷静になって：ああ…：駄目だ…。もうどうしてこんな状況になってしまったんでしようか…。

考えれば考えるほど、予想だにしなかったこの状況はわたしをひどく動揺させる。

思わず顔を押し付ける形となった彼の胸板は意外にも厚く、その身体に響く鼓動がわたしにも伝わってくるし、近すぎる彼との距離もそうだが、つないだままの手のひらからも彼の熱が伝わってくるのを感じる。

さつきまで雪に埋まってたくせに、身体だって冷え切っているはずなのに、なぜこんなにも彼は温かいのか。

その温度が、熱が、温もりが、彼という存在そのものがわたしという人間を大きく揺り動かし続ける。

ええ…：なんてことはないでしょう。

わたしはやっぱり、この人のことが好きなのだ――。



一緒に幸せになりましょう。結婚してください。

はい。よろしく願います。

誓いの言葉を交わす彼女はとても綺麗だった。

専門のプランナーが丁寧に準備し、彼女に合った最高のメイクを施してくれたのであろう。ウエディングドレスだつても魅力的である。これほどに美しいという言葉形容する衣装を、わたしは他に

見たことなどない。

だけど、違う。そうではないのだ……。

心の底から感じているであろう温かい気持ち。そして想い人へ向けられる優しい眼。

偽ることの無い素の表情で、ありのままの彼女がそこにいて……。

……いえ、理屈っぽいことはやめましょう。これはきつと、もつと簡単なことなのだ。

愛する人と結ばれるから。

理由など、これだけで十分足り得るでしょう――。

わたしは、先刻の彼とのやり取りを思い返す。

忙しい身であるはずの彼は、少ない時間を使ってわたしを探してくれていたらしい。

内心で沸き上がる喜びを抑え、決して表情には出さないように、いつものようにからかいの視線を彼へと向ける。そしてそんな二人の距離にさえ、きつとわたしたちは懐かしさを見出していた。

話したいことは山ほどある。聞きたいことも、そして伝えたいことも。

だけど、僅かばかりの時間で選んだのは、かつてを思い出させる彼との他愛もない雑談であった。

随分と格好いいタキシードを着こなしているじゃないですか。ええつと、これは選んでくれた人のセンスが良かったに違いない……なんてね……あははっ。それはそれは……そのお相手さんに感謝しなくてはいけませんねー。……そうだね……うん、僕もそう思うよ。

他者から見れば何の話をしているんだと思われるような会話かもしれないが、わたしと彼にとって、いまこの瞬間はたしかに大切な時間には他ならない。

だが、もうすぐわたしと彼の時間は終わりを告げる。

そんな、これから来る未来に心をかき乱されぬよう、泣きそうになる気持ちを決して彼に伝えないようにと、少しばかり目を閉じようとした瞬間、ふとそれが目に映る。

……指輪……してるんですね。

突然口を閉ざしたわたしに違和感を感じたのか、その視線を追って彼は慌てたように指輪をはめた左手を背に隠す。

流れるのは沈黙の空気。

まさかこんなタイミングで“終わり”が来てしまった事に若干の気まずさを滲ませつつ、先に口を開いたのは彼の方であった。

これは……僕の好きな人がくれた大切な指輪なんだ。

言葉が出ない。胸が苦しい。身体の震えが止まらない。

聞きたかったはずの言葉が、聞くことでようやく前に進めるはずの言葉が、いまはただただわたしの心へと突き刺さる。

どうすればいいの……なにか言わなきゃ……駄目……!!
泣いてはいけないのに……!!

耐えろ。耐えろ。耐えろ。

胸を押さえ、呼吸を落ち着かせ、高鳴る鼓動をその身で感じながらようやく彼と向き合う。

涙を流していることに自覚はある。声が震えるであろうことを予測も出来る。彼の言葉を上手く聞き取れるかの自身は無い。

でも、そんなわたしを真っ直ぐな瞳で見つめてくれる彼を、とても大切に想い続けてきた彼との新たな関係を築くためにも、わたしは自分の足で前に踏み出さなければならぬ。

君に、伝えたい言葉があるんだ。

大丈夫、もう怖くない。

あの時持てなかった勇気を振り絞り、わたしは前へと歩き出そう。止まることのない時の中、まるで二人だけが取り残されたかのよう

にさえ感じる切り取られた世界で、わたしは彼の想いを静かに受け止める。

——そうして、わたしの恋は終わりを告げる。——

◇◇◇

揺れ走るバスの中で、わたしは少しずつ微睡み始めていた。

乗客はわたしと彼の二人だけで、聞こえてくるのは鈍いバスのエンジン音だけ。

外は月明かりのみが灯る静かな暗闇へと世界を変え、それがまるで夢の終わりを表しているような気さえするのだが、いまこうして彼の隣で“夢”に落ちるのも悪くないと思う。

それもまた、わたしにとっての幸せの形なのだろう。

彼と過ごす時間は、多くの“幸せ”で包まれていた。

わたしがイチゴで彼がチョコ、それぞれに買ったクレープを二人で半分こ。あーん、なんて食べさせようとすれば顔を真っ赤にしながらか慌て始める姿が、なんだか妙に嬉しく感じた。

恋愛ものとミステリー、どちらの映画を観るかで揉めたときはつい熱が入ってしまった。別に恋愛映画が見たくないわけではないけれど、そんなものは彼の日常だけでお腹いっぱいなのだから仕方がない。

ぬいぐるみを見て思わず可愛いとつぶやいたわたしを、あんなにも笑うなんてなんともひどい話である。まあ、あとでプレゼントしてくれたことですししょうがないので許してあげましょう。

いまだ降り続ける雪の中に、二人でかざす傘が一本。元々が一人用のものだから当然身体が入りきるわけもなく、共に歩んだ分だけそれぞれの肩に雪が積もる。

ふと左側を見てみればちよこんと乗つかつた雪が目に入る。

少し思案した後、悪戯心半分に思い切つて身体を彼の側に寄せると、彼がどうしたのと問いかけてきた。

驚いたような、それでいてちよつと嬉しそうな彼の顔に満足しつつ、この方が雪に降られないでしょ？なんて言つてみる。もちろん、心の内を伝えることなんてしない。

肩に雪が乗らないくらいに距離を縮めたいなんて、きつと彼は声に出して笑うに違いないのだから。

本当に……本当に、幸せだ。

ずつとこんな時間が続いてゆけば良いのにと、そう願わずにはいられない。

今の生活が嫌なわけではない。仕事に忙殺される日々が嫌いなのでもない。人付き合いは良好で、将来に向けた貯蓄だつて十分だ。ただ……そこに彼の姿は無い。

手を伸ばせば触れられる場所にいる。話しかければ応えてくれる。そんな当たり前の日々が、今はもう思い出の中にしか見ることが出来ない。

咲き誇る桜の花びらを見るたびに彼をみる。夕焼け空の下でひぐらしの鳴き声を聞いたたびに彼を感じる。紅葉に彩られた紅い世界に、天から降りゆく雪の雫にさえ彼を想う。

ねえ、転校生さん。わたしはこんなにもあなたのことを――。

ふと、隣に目を配れば、そこには同じように夢の世界へと落ちていく彼の姿があつた。

無防備でなんともあどけない顔をしている彼の姿と、かつて共に過ごしてきた少年のイメージが自然と重なつたことで、わたしはなぜだか無性にうれしくて仕方がなかつた。

そして、だからこそ“彼”との世界に終わりを告げようと、わたしは静かに心に決める。

幸せな夢は心地良いけれど、わたしは先に進まなければいけないから。

だから……だから……。

その言葉は、きつと誰に届くこともなく静寂の中に溶けていく。

転校生さん。あなたに、伝えたかった言葉があるんです……。

それは、あの時言えなかった、わたしの本当に気持ち。

わたしは……わたしを……!!

◇◇◇

「ああ……うん。だってそれ二週間くらい前の話だよ?」

披露宴が終わりその後の二次会も解散となった後、自宅に戻ったわたしはテーブルを挟んで座る彼に昨日見た夢の話をした……のだが、分かってない。この人は本当に分かってない。

「もう……飲みすぎなんだってば。ほら、とりあえず水でも飲んで落ち着いた方がいいって」

「大丈夫です。お酒なんてちよつとしか飲んでないんですから……ひっく……それよりも!! ちゃんとうちの話聞いてますか!! 転校生さん!!」

まったく……わたしがどれだけ寂しい想いを過ごしてきたと思っ
ているのか、それを懇切丁寧に説明しようとしているのに、肝心の転校生さんはなぜだか呆れ顔でこちらを見てくる。……ああ、これはやっぱりちゃんと言わくちやならないようですねー。

「だいたいれすねー!! 二週間も連絡がないなんてどういうことらんれしようか!! うちなんて一秒たりとも転校生さんを忘れたことなんてなかったのに!! それなのに……それなのに!!」

「ええ……。いや、だって一緒に結婚式の贈り物選びに街に出掛けたときにさ」

なんだかショックを受けたような顔をしています。そんなことでは騙されません。だいたい、こんな指輪一つで……ゆび、わ……？

「……えへへー。指輪、ねえ転校生さんみてくらさい!! ほら、うち指輪してますよー!!」

ばたんと後ろに倒れながら左手を空にかざし、薬指にはめた指輪を眺める。なんででしょう……ものすごく幸せじゃないですか。

「はあ、そもそもあの時だって……ねえ聞いてる? もしもーし?」
なにか言ってる気がするがそんなことは無視である。なによりも、いまはこの幸せを感じていたい。

「……そうだ、そういえばひとつ忘れてました」
「え?」

勢いよく身体を起こし、彼を見据える。びくつと驚いた表情の彼が……あれ? なんて何人もいるんでしょうか?

ん? まあいいか、多分この人が本物の転校生さんでしょう。そう確信して目の前の彼に指を突きつける。

「転校生さん!!」

「はいっ!!」

あの時言えなかった言葉を、本当は伝えたかった言葉を、いまこうして届けましょう。

あなたと過ごす日々が、これからもずっと続くようにと願いを込めて。

一生うちを離さないで下さいね? てんこーせーさん♪

その願いはきつと、彼が叶えてくれるから――。

《願いをあなたに 了》

野薔薇たるあなたへ

もしも彼と出会うことがなければ、自分はどのような人生を歩んでいたのだろうか。

他者を警戒し、級友たちとは距離を置いていたあの頃。

不要な隙を与えぬよう、同じく立場ある名家の人間とは決して交わらぬようにと心掛けて過ごしてきた私たちに、今の姿を見せたら彼女たちは一体何を思うのだろうか。

何をしているのか、名家の生まれたる自覚を持ちなさい。きっとそんな言葉を投げかけてくるに違いない。

実際のところ、国を支える者として、人の上に立つ人間としてその心持は決して間違つたものではないと思う。

霧の魔物という人類の脅威を前に無用な争いを招く必要などない。そんな私事としたどうでもよいことで、大勢の人々を不安にさせることなどあつてはならない。

だからこそ私は：私たちは三人だけで生きてきた。

生真面目な性格が特徴で腕の立つ護衛役。

主に対し臆面もなく物申す世話係。

そして矜持を胸に完璧を求める名家の少女。

つまらないことで言い争いをしたこともある。

世話係が余計なひと言を発し、主人たる少女がそれに反論し、護衛役はそれを窘めるかのように口をはさむ。

そんなありふれた光景を幾度となく繰り返し、そこから取っ組み合いの喧嘩に発展したことなど数えるだけでもキリがない。しばらく口もきかなかつたことさえある。

だけど、そんなことすらも日常の一部であると納得してしまうほどに、私たち三人は家族であつた。

友人を作ることは大切だが決して弱みを見せてはならない。どれだけ仲を深める友がいようと決して一線を越えることなかれ。私たちはいずれ人々の上に立つ立場の人間なのだから……それが名家たる者の責務である。

寂しさなど感じない。例え孤独になろうとも、私たちはいつまでも三人一緒なのだから。そんな誓いにも似た何かを内に秘め、あの頃の私たちは何事も疑うことなくその日々が続いてゆくものだと思っておる。

そして、私たちの前に彼が現れた。

転校生が珍しい学園ではなかったのだが、その立ち位置が少し前から学園中に広まっていたため、彼は初日から学園生たちの注目の的となっていた。……まあ、正直に言って私もその中の一人である。

それから先は語るまでもない。彼を巡ったあちらこちらからの勧誘の嵐。

生徒会が、風紀委員が、あらゆる立場の人間が彼と接触し、しかし彼はどの勢力に属することもなくマイペースに学園生活になじみ始めていく。

もちろん私たちも黙ってはいない。

とある目的のため、彼の器を見定めようと主人が張り切って彼に会いに行く様を、護衛役と世話係は興味深そうに見つめていた。主人は果たしてどのような『答え』を得て帰ってくるのか。

「……よく分かりませんでしたわ」

主人が頭を捻る姿を見て、護衛役は驚いたように目を見開き、世話係はこと面白そうに目を細める。

人並み以上の洞察力を以てしてもいま一つ掴みかねる少年。実に面白い。

それならばと、翌日あらためて彼を見定めようと主人は決心する。もしも可能性を感じるのであれば、彼こそを生涯の伴侶へと仕立て上げて見せよう。

「……結婚？ ……えっと、ごめんなさい」

主人は口をポカンと開き、世話係は腹を抱えて笑い転げた。

こほんと咳をしながら息を整え、主人はもう一度彼に説明を始める。

自分は名家の生まれであること。その責務を果たすべく教養を身に付けるために学園に通い、また在学中に生涯の伴侶を見つけなければ

ばならないこと。

そして、その候補として転校生が選ばれた事。

「…えっと、ぶこめんなさい?」

主人はポカンと口を開き、笑い転げていた世話係の頭を目掛け、護衛役が力の限りこぶしを振るった。

それから先、私たちは変わり始めた。

彼を振り向かせようと行動し、その結果として私たちはこれまで関わることの無かった大勢の学園生たちと交流を深めていく事となった。

弱みなど見せるな。仲を深めるような友人など必要ない。そう言っていた頃を思い出せなくなるまでに、気が付けば私たちは学園生活満喫していた。

街まで友人と出掛け、日が暮れるまでショッピングを楽しみ、門限ギリギリまでカラオケで遊び倒す。

名家の生まれとしての使命を忘れたことなど一度もない。だが、自分の中で何かが変わり始めているのを感じる。

人の上に立つとはどういう事なのか。私たちが本当に求めるものとは一体何なのか。

その答えはきつと、友人たちと、彼と過ごす中で見つけることが出来る、そう私は確信していた。

だけど、人生はそう上手くは出来ていなかったらしい。

私たちは、同時に彼に恋をしてしまったようだ。

別に不思議なことではない。同じ男性を好きになった、ただそれだけのことだ。

だが、由々しき問題でもある。

将来の伴侶に相応しいと考える主人だが、その結果を引き換えに二人が悲しむ姿など見たくはない。

特に、世話係は目に見えて彼に好意を寄せていた。それを見て見ぬふりが出来るほどに、主人は非情になることなどできはしなかった。どうすればいいのか、どうしたら私たち三人は傷つくことなく前へ

と進むことが出来るのか。

悩んでも、悩んでも、悩んでも、すべてが上手く収まる答えなど思いつくことはなく、楽しい学園生活は刻一刻と終わりの時へ近づいてゆく。

皮肉にも、彼と過ごす時間はとても楽しいものであった。放課後に街へと繰り出すことなどは日常で、長期休みには旅行にだって行ったことがある。本家で当代に挨拶をする時の彼の表情と言ったら、今でも目に浮かび笑ってしまいそうになる。

だが、いざとなつた時の彼の立ち振る舞いは何度見ても私の心をつかんで離さない。本当に、ずるい人だ。

切り出したのは護衛役だった。

もう見て見ぬふりは出来ない、覚悟を決める時だと、護衛役は真剣な眼差しで訴えかける。

それは痛いほどに気持ちのこもつた、優しくて強い言葉。

私は目を閉じ、彼女たちの言葉の心の内を胸に刻みながら思う。

もしも彼と出会うことがなければ、自分はどのような人生を歩んでいたのだろうか。

それはもう、今となつては分からない。だが一つ言えるのは、きつと今以上の幸せはないのだろうということ。

それでも誰かが傷つくことは避けられない。流れる涙を止めるすべなどない。

だから、私にできることはただ一つ。後悔などない、完璧な結末を迎えることだ。

なぜならば、私は――。

あれから十数年、私は久々に届いた旧友からの便りを手に、昔を思い懐かしんでいた。

疎遠になつたというわけではないが、それでもそれぞれの役目を果

たすにはお互いに暇などなかなか作ることなど出来ない。

携帯電話など連絡手段はいくらでもあるのだが、それほど頻繁にやり取りをするような話題があるわけでもない。

だがそれでも、今でも私たちは紛れもなく『家族』である。

距離が離れようとも、あの頃過ぎた時間は決してなくなるような薄っぺらいものではない。

今は会えなくてもいずれました。いつ命を落とすかも分からぬ時代だが、若い者たちが育ち年老いた頃に、きつとまた顔を合わせる事が出来るだろう。

だから、いまはこの懐かしい気持ちを便りに載せて、私の『家族』たちへと届けよう。私はいまも元気です…と。

「…あら、もう一通届いていたのね」

今度は大切な娘からの便りだ。

あの頃の私にそっくりの、少しお転婆だけど心の強い女の子。

幾分似なくてもいい部分も似てしまっただけで心配なところもあるのだけれど、それでもしつかりとした子だからきつとうまくやっているのだろう。

「さて…気になる文の内容ですが…あらあら」

あの子の頼りには、いつもとある男の子の名前が記載されている。

嬉しかったこと、楽しかったこと、不満に思ったこと、相談したいことなどなど、本当いつまでたっても話題に事欠かないらしい。

話によれば学園の中でも人気者の男の子だそうで、他にもアプローチをかけている少女たちが複数人いるらしい。

…まったく、母娘揃って難儀なものだと小さく苦笑いする。

であれば、私から送る言葉は二つしかない。

まずは、婚礼の儀という既成事実さえ作ってしまえばいいのだからさつさと実家へ挨拶に連れてきなさい…もうこれしかないだろう。

そしてもう一つ、何よりも大事な言葉をあの子に送ろう。

私はその言葉を胸に、彼と添い遂げることが出来たのだから。

いいですか姫。野薔薇たるあなたにこの言葉を今一度送りましょう。

『野薔薇は完璧でなくてはなりません』

終

続・冬樹物語

ひんやりとした風が肌を撫でる感触に、僕は寝惚け眼を擦りながら身体を起こす。

ここが夢の中なのか現実なのか、起きているのかまだ寝ているのか。そんな風にいまだはつきりしない意識の中で、ふと窓から外を見れば昇り始めの朝日が目に刺さる。

やけくそのような欠伸をしながら腕を伸ばし、まだ開き切らない瞳を部屋の壁に目を走らせれば、そこに見えるのは長年連れ添った愛用の掛け時計。そして、彼の長針と短針指し示す、『いつもの起床時間』の証。

今日は特別予定もなく本当に久々の休日。大学も休み。友人たちとの約束もなし。

つまるところ何も無し。ではどうするか？

少しだけ：本当に少しだけ悩んだ末、僕は心のままにこの身を焦がす夢の世界へと今一度飛び込もうとふかふかのベッドへと身体を倒し：ふと気が付いたことがある。暖かさの塊である掛け布団がない。そりゃ寒いよね。そんなツツコミを誰に伝えるでもなく呟きながら、それではどこにいったのかとベッドに目を向けると、一目でその『原因』を見つけることが出来た。簡単である。奪い取った犯人がいたからだ。

「もしも〜し、起きてますか〜？」

返事なし。だけど僕には分かる。彼女は間違いなく起きている。

寒さから身を守ろうとしているのだろう、文字通り僕の方まで掛け布団を手繰り寄せ、風の通り道を無くそうとばかりにその華奢な身体に巻き付けている様子。

だが一方で息苦しくもあるのだろう。もぞもぞと布団の中で体勢を変えているようで、それはつまり起きていることに他ならないわけだ。

「ねえ…寒いんだけど。そして僕も寝たい」

とりあえず意思を伝えてみる。そして反応なし。ただもぞもぞ動

いているだけ。

まあ、だけど僕はこんな事で怒ったりなどしない。やはり彼氏たるもの、いつでも余裕を見せなくてはならないからだ。

たとえどんな理不尽な仕打ちも受けても……どれだけ外面と内面のギャップに呆れさせられても……どんだけほほほ皆無だった生活力の中さらにだらしなくなっていく姿を見せつけられても、それはきつと変わる事はない。大人になるとはきつとそういうことなのだ。正直に言えばもう目も覚めている。こうなれば爽やかな朝を迎える他はない。そうと決まれば行動あるのみだ。

まずはこんな体験をプレゼントしてくれた彼女に微笑みかけ、そして空気を入れ替えるために窓を全開に開く。

「……………!?!」

突き刺さる寒さに思わず身体を抱えるが、それ以上に心がぼかぼかしているのでさしたる問題ではない。さつきよりも布団の動きが激しくなったように見えるが気のせいだろう。

もう一度腕を伸ばし、身体の空気を入れ替えるために大きく深呼吸。

学園生の頃からの習慣で身体の調子を整えてから、何故か聞こえてくるうめき声を流しつつ朝食を作るためにキッチンへと向かう。

電気ストーブで足元を温めつつメニューを考え始めた矢先、そういえば友人から頼まれごとをいたことを思い出す。そういえばライブで歌う新曲が出来たから聞いてほしいと言われていたんだっけ。

せっかくだし料理のBGMとして聞いてみよう、机の上に置いてあるデバイスに手に取り送られてきたデータを開く。

どうやらジャンルは例に違わずロックらしい。学園生の頃よく付き合わされたものだと思えば、ほんの少しだけ懐かしい気持ちになる。

あの頃から数年、今も変わらず楽しそうに音楽活動へ精を出す彼女の姿に想いを馳せながら、改めて曲を聞いてみようデバイスを操作する。

「…聞いてますか? 転校生さん。先ほどから寒いつて言っている

のが聞こえないのでしょうか？」

布団のそばまで歩くと声が聞こえる気がするが、きつと気のせいだろう。さて、この辺ならよく聞こえるかな？

ライブを想定しているなら少し距離を開けたところから聞いた方がいいよね。そこには決して他意などない。

とりあえず最大音量でいいかな？ ベッドの上にデバイスを置き、小さなイントロから流れ始める。

「ちよつと転校生さん聞こえないんですか！ 早く窓を閉め……え、なんですか……この音……？」

直後唐突に叫び始める、開幕から凄まじいまでの大声量。

何を言ってるのかよく分からないけど、こういうのがロックって言うのかな？ そんな感想を抱きつつ、二つのシャウトを背に今朝のメニユーへと手を付ける。

それは、僕と彼女の過ごす二度目の冬の物語。

続・冬樹物語

彼との半同棲生活が始まり、そろそろ1年くらいになるだろうか。

大変だった大学受験を乗り越えてから数ヶ月ほどしたある日、彼の口から伝えられた同棲生活の誘いは正直とても嬉しいものだった。元々マンションの隣同士の部屋という事もあるため、実はそれほど元の生活と比べて大きな変化があったというわけではない。ただそれでも、少しでも彼と二人で過ごす時間が長くなるというのであれば、それは願ってもない話だった……はずでした。

最初は良かった。さすがの私でも緊張をしつつも彼と過ごす新しい時間に夢を抱いたものです。

家事分担を曜日ごとに決め、あーだこーだと言い合いながらも彼と協力し合う時間はとても楽しかった。前から薄々感じていたことだったが、彼の生活力の高さを目の当たりにすることで嫉妬していた

こともあったが、それすらもあの頃の私には愛おしく思えていました。

だけど、しばらくすればそれが特に変わり映えの無い、なんてことの無い生活のただの一部でしかないと思えるようになってしまった。

昔ノエルの部屋に合った少女漫画のような、あそこまで物語の脚色された「幸せ」などではないにしたって、もう少し刺激のある毎日を通ぐす事になるのではないかと、かつての私は頭を悩ませていたのだが現実はそのほどまでに甘い世界などではなかったというだけの話。

簡単なことだ。彼の良いところも、そして悪く見えてしまうところも昔に比べ多く気が付くようになってしまった。ただそれだけのことでした。

「はあ、なぜ私のささやかな願いを汲み取ることも出来ないのでしょうか。今日はいつもよりゆつくりと眠りたいとあなたに伝えていたはずなのですが」

今朝のことだってそうです。久々にのんびりした朝を迎えられるという事もあり彼に要望を伝えたはずなのだが、どうにもそれを聞き入れてくれなかったらしい。しかも大音量の叫び声で眠りから覚めるといふなんとも最悪な起こし方だ。もはや悪意しか感じない。

「いや、何度も言うけど先に仕掛けてきたのはイヴさんだからね。まったく…僕の幸せな朝を返して欲しいよ」

テーブルの反対側から、彼が料理に手を付けながら生意気にも反論してくる。

責任を私に押し付けようというその考え方…なんとも気に入らないですね。それでも私の彼氏なのでしようか。

「そもそも、それなら布団を二人分用意していれば良かったんです。こうなることなど目に見えていたでしょう?」

「ふくん。それを提案したのは僕だったんだけど。なに、忘れちゃったの?」

「あら、まったく覚えていませんが。なにか?」

まったくもって嘆かわしい。いつからこんな話の分からない人になったというのか。

だいたい、布団の件はお互い合意した話だったはずです。たしかに2枚あった方が今朝みたいなきには便利かもしれないけれど部屋の大きさから考えて普段の仕舞う場所に困る可能性が高い。なによりに一緒に寝るのだから1枚あれば十分ではないか。そう結論を出したのに今さら蒸し返すとはなんとという器の小ささでしよう。

「あ、そう。そういうこと言うんだ。それなら僕にも考えつてもものがあるよ」

「奇遇ですね。私もです」

ハツと小馬鹿にしたように鼻で笑う彼と、余裕の心持の笑みを浮かべる私。この際どちらが正しいのかはつきりさせようではないですか。

ちやうど食事を終えた私は、先に食べ終わっていた彼と『ごちそうさまでした』と挨拶を交わした後、早速行動に移るためにデバイスを手取る。まずはこの考えをまとめるための相談相手が必要だ。となれば一番適しているのは彼女しかない。

すでに勝ちを確信した私は、デバイスの電話帳で彼女の名前を見つけ連絡をとる。今日は予定がないとのことでお昼でも一緒にどうかという事だ。もちろん私の側に断る理由などない。

「…そうです。私を蔑ろにするあなたが悪いんです…」

キッチンで食器洗いをしている彼を尻目に、私は小さくそう呟いた。彼の隣に立たないこの瞬間に感じる、ほんの僅かな寂しさはきつと私の気のせいでしょう。

「で？ 何しに来たのよあんだ。あたしは忙しいんだけど」

風飛の街より少し外れの、あまり目立たない場所に位置する小さな喫茶店。

場所が場所だけに知名度こそ高くはないが、一部からはレトロな雰囲気がおしゃれだと評判の良いお店に、現在僕は足を運んでいた。

ここには彼女と何度か食事に来たことがある。良心的な値段の上に料理がおいしいと彼女の評価も高く、月に数度訪れるリピーターと

なっていたわけだが、今日の目的は食事ではなく、ある人に会うためだった。

「忙しいって…僕以外誰もいないけど?」

「は? あんた馬鹿なの? いいか良く聞け。あたしに暇な時間なんてものはない。客がいれば仕事はするし、客がいなければマイウルトラスイートエンジェル秋穂を全力で愛でなければならぬ。もちろん客がいても秋穂との時間が最優先なわけだが」

「うん、相変わらずだね。瑠璃川さん」

瑠璃川春乃、学園卒業後も定期的に連絡を取っている友人の一人だ。

彼女がここでバイトをしていることを知った時は驚いたものだ。何かアルバイトをしているのは知っていたがまさか喫茶店だとは思わなかった。初めて訪れた時の「いらっしやいませ」と、作り笑顔を僕に向けた彼女との、何よりその後の惨状は未だに忘れることが出来ない。

「それで用件って何よ。…あんた、冬樹のこととか言ったら店から追い出すわよ」

「え? よく分かったね」

「あ? お会計は千円よ。さつきと払って出ていきな!!」

…いや、これでも友人…のはず。…まあ友好的かはさておき、こと相談事なんかは彼女にすることが多かったりする。理由は色々あるけど…一番はやっぱり話しやすさだろう。他の友人たちとは違う独特の距離感だからこそその、安心感みたいなものだ。

「ちっ、ほらさつきと用件を話しなさいよ。どうせ今日は暇だろうし、少しくらいなら付き合っただけでやるわよ」

さすが「秋穂が好きそうな店だから。ついでに暇そうだから」と喫茶店のマスターの前で堂々と言い張るほどに豪胆な人だ。

僕が言うのもアレだが図々しいことこの上ない。

「それじゃあコーヒー2つと、おすすめは?」

「ベーコンレタスサンド。マスターは買い出しでいないからあたしが作るけどいい?」

「お願いするよ。それじゃあそれ2つ。僕から奢らせて頂きます」
「そんなの当たり前じゃない。少し待ってなさい。いま作るから」
これでも料理は得意な方だと自負しているが、こういうお店の味にはなかなか勝てない。

料理の腕なのか、材料なのか、はたまた創作アイデアの違いなのか。学園時代の瑠璃川さんの料理はとても美味しかったけれど、このお店で働き始めてからますます腕を上げた気がする。

テーブルからでも見える料理場に入り、ウエイトレス姿で調理をしている瑠璃川さんを見ながら、悪態を吐きながらもやることはやつてるんだなあと小さく苦笑いしつつ、そして今朝の出来事を思い返す。

「はあ…なんでこうなるかなあ…」

たしかに1年前までは規則正しい生活を送っていたはずなのに、なぜか同棲生活を始めてから少しずつ彼女のだらしない姿が目につくようになっていた。

別にそれが悪いと言うことではない。

人間誰しも良い部分だけ持っている人などいないし、実際僕だってそうだ。きつと僕自身気が付かない悪い部分を彼女は見てきているだろう。だからそういったことを僕は気にしない…はずだった。

「…だけどそう上手くはいかないってことだよね」

別に今朝の一件が特別だというわけではない。

言ってしまうえば似たような喧嘩は何度もあったわけで、その度に同じようなことで頭を悩ませる。

どうして、こう上手くいかないのか。彼女と仲良くしていくためにはどうすればよいのか。人生で初めて得た一番大切な人とどう付き合っていけばいいのか。僕にはそれがよく分からなかった。

「…とということがありました。すみません、せつかくのお休みにこんな話を…」

「い、いえ、わたしも特に予定はなかったので気にしないで下さい」

取り留めのない私の話を、嫌な顔ひとつせず聞いてくれた彼女は本当に良き友人だと思います。

学園生だったころに比べれば共に過ごす時間こそ少なくはなりましたが、それでもこうして時折顔を合わせる程度に交友関係は続いている。

妹のノエルとは違いそれほど交友関係が広いわけではなかった私の、数少ない信頼できる友人。それは、私にとって掛け替えのないとても大切なものでした。

霧塚萌木さん。この人とはきつと長い付き合いになることだろう。いや、そうなって欲しいと心から願う。

「それで、イヴちゃんのお話ですけど、つまり転校生さんを怒らせてしまった事を後悔してしまったという事でしようか？」

話を一度聞き終えた彼女は薄く湯気の立ち昇るコーヒーを喉に通し、小さく息を吐いた後、落ち着いた表情で彼女は問いかける。ただの一度も後悔したなどと口にしていない私を、彼女はその物静かで深く澄んだ瞳で見据え、そうしてさらに言葉を紡ぐ。

「…わたしにはお二人がどんな時間を過ごしてきたのか分かりませんが…そんな簡単に相手を嫌いになるような関係性ではないと思っています」

嫌いになる…か。そういえばそんなこと考えたこともありませんでした。

彼女と喫茶店で待ち合わせと決めた後、あの後すぐに家を出たものの少しずつ、ほんの少しずつ心の中に罪悪感が生まれ始めた。

冷静になって考えれば他愛もない些細な出来事ではない。

どちらが悪いとかそんなのはどうでも良くて、ごめんなさいと、ただその一言があっただけで丸く収まったに違いない。

その一言だけで、きつと今日を共に過ごすことができたのでしよう。

「…おかしな話ですよ。普段は何とも思えなくなっていた彼との時間をこんな風に望んでしまうなんて…本当に、おかしな話ですね」

手元にあるティーカップを覗きこむと、まだ仄かに温かい紅茶が目

に映る。

そういえば一口も飲んでいなかったと、小さなミルクカップを手に取った時ふと彼のことを思い出した。

いつかの喫茶店で紅茶にミルクを入れる私を見て、彼が小さく笑ったのだ。その表情が気に入らなくて、むつとした表情でなぜ笑ったのかと質問すると、彼は「変わらないね、冬樹さんは」と答えた。

初めは意味が分からず眉をひそめた私だったが、それを見た彼が慌てた様子でこう告げた。

『ごめん、怒らせるつもりはなかったんだよ。ただ、なんとなく懐かしいな…って。ほら、出会ったころに買ったミルクティを覚えてないかな?』

何を言い出すのかと思えばなんてことの無い昔話でした。

盛り上がることも、起承転結があるわけでもない、ただお互いを懐かしむ話。

あの時を…いつかを思い返し、そんな話をいませるのかと呆れながら、それがどうしてか楽しく思えていたあの時間。それが今は、たまたまなく愛おしかった。

「…わたしは、イヴちゃんが羨ましいです」

「え? それはどういう意味でしょうか…?」

「い、いえ、大したことではないのですが…なんていうか、わたしにはないものをイヴさんは持っているんだなあ…って思ってる」

心なしか少し顔を赤くして、彼女は取り繕うようにぎこちない笑みを浮かべた。

それはまるであの頃の、誰かに遠慮しながら過ごしていた頃の彼女の影が見えて、わたしにはなんだかそれが少しおかしく思えた。

「萌木さんだって私にないものをたくさん持っているじゃないですか。与那嶺さんや七喜さん、他にも多くの友人たちに恵まれて、私からしてみればそちらの方が羨ましいです」

「それはもう、大切な人達ですから…。でもイヴちゃんその中にはイヴちゃんもちゃんといえるんですよ?」

「…ええ、分かっています。そうでなくては私が困ってしまいますか

ら

本当に、彼女が友人で良かった。ありがとうございます、萌木さん。「…それで、その…行かなくていいんですか？」

「ええ、構いません。だって今日は、あなたとお話しをしに来たんですから。聞かせてください、萌木先生の新作がどんな絵本になるのかを」

たまにはこういう日もいいでしょう。

さて、彼は今頃何をしているのでしょうか。

結局、瑠璃川さんとはあまり話が出来なかった。

あの後悩んでいることをそのまま伝えようと、彼女は言葉少なく問い返してきたのだ。

『あなた、なにか勘違いしてんじゃないの？ 聖人のつもり？』

ちよつとモテるからって調子に乗ってるんじゃないの？』

いつそ笑ってしまう程に罵倒される。こういうところも昔から変わらないよね。

『いいか、良く聞け。ずっと仲良しこよしでいられる人間なんてものはない。いるとすれば、それはあたしと秋穂みたいな超絶相性の良いベスト神カップルくらいなものだ』

だけど、彼女の言葉は正しくあることを、僕は知っている。秋穂ちゃんが絡まなければ…だが。

『だからあなたたちが喧嘩しようが、そんなのは大したことじゃない。いいか？ それで別れることになったとかいうならここに来い、それ以外は来んな。何度も言うがあたしは暇じゃないんだ』

そう言つて、仕事の邪魔だから帰れと僕は店を追い出された。

あまりの理不尽さに笑いがこみあげてくる。そうだね、瑠璃川さんの扱いに比べれば、彼女との喧嘩なんて些細なものではないのかもしれない。

「…そういえば、食事代支払ってないよね」

ふと思えば返すと、瑠璃川さんに追い出されたせいでお金を渡すこと

が出来なかった。

それならば今度、次の休みの日にでも遊びに行こう。きっとまた嫌な顔をされるだろうけど、それはまた別の話という事で。

つと、そんなことを考えていた矢先、ポケットの中のデバイスが震える。

なんとなく彼女の顔を浮かべながらそれを手に取り、浮かび上がっていたメッセージに思わず頬を緩める。

『今日の夜ご飯は、私も手伝います』

結局のところ、ただそれだけのことなのだ。笑ってしまう。こんな一言でどうでも良くなってしまおう自分に。

そしてそれはきつと、彼女も同じなのだろう。

「さて、それならば僕はなんて言葉を贈ろうか」

そうだ、さつき思い返したあの言葉にしよう。もしかしたら怒られるかもしれないけど、なんとなくこの言葉を選びたくなった。きつと今ならちゃんと伝わる、そんな気がしたから。

薄暗い夕暮れの、静けさ漂う道を歩きながら私は帰路へ着く。

「すつかり遅くなってしまいました。まさか萌木さんがあそこまで熱心に話を進めてくれるとは」

まあ、それはそれで楽しい時間を過ごせたので良しとしましょう。たまにはこういう一日も悪くはない。

先ほどの彼女の楽しそうな表情を思い出し、必然と私まで嬉しい気持ちにさせられる。そういうところがきつと彼女の魅力なのだと思う。

「さて、そろそろ着きますし連絡でも入れましょうか」

待ち合わせはいつか二人で訪れた商店街の入り口。彼も出掛けていたというのだから、それならば食材選びから一緒にしようという話になった。

それ自体決して特別なことではないが不思議と心が躍る。

ありふれた日常の中で、それでもそれが大切なものだと思付いたか

らだろうか。：断じて彼には言うことはありませんが。

と、そんなことを考えているうちに彼の姿が見えてきました。

まだこちらには気が付いていない様子。であれば、考えていたことを実行しようではありませんか。

先ほど返された言葉に、私はこう返事を送り返すことにしました。

『変わらないね、冬樹さんは』

『あなたもですよ。転校生さん』

それは私と彼が過ごす二度目の冬の物語。

《続・冬樹物語 了》

これは私の物語

ある日、少年と少女の物語は終わりを迎えた。

少女は思いの丈を伝え、少年はその願いを断ち切った。ただそれだけの出来事。時間にしてわずか5秒。

ただそれだけの出来事で幾年も続く物語は幕を閉じた。

少女は笑みを浮かべていた。私には分かっていたことだと。

少年は涙を浮かべていた。僕には分かっていたことだと。

少女は関係が変わることを望んでいた。だから告げた。

少年は何も変わることの無い今を願った。だから気が付かない振りをした。

物語を終えた少年と少女は、もう元には戻ることはない。

仮にそう見えたとしても、それは何か異なる別の物語。

少女は笑い、少年は泣き、それが新たな物語の始まりへとつながる。

少年は紡ごうとする。新しい物語の最初の一言を。

そして…彼女は、その言葉を前に目を閉じた。

これは私の物語

「ありがとうございます。またどうぞお越しくださいませ」

黒いベストに蝶ネクタイ、喫茶店の制服を着用している僕は、店内に残っていた最後の一組のカップルを店の外へと送り出す。

しんしんと音もなく降り続ける粒雪の中を仲睦まじく歩いてゆくその男女の背に何か温かいものを感じながら、少しした後、営業終了の看板を出すために店頭へと足を運ぶ。

時刻は21時過ぎ、普段であればもう少し営業を続けているところだがマスターから「せつかくのクリスマスなんだし最後のお客様を見送ったら今日はお店を閉じちゃっていいわ」との言伝をもらっている

ので、ここは素直に従っておくことにする。もとより夜の来客が珍しい喫茶店なのだ。誰の迷惑にもならないだろう。

「おお…寒い…。どうりで誰も来ないわけだよね」

ふらりふらりと空から零れる真っ白な雪が手のひらの上で音もなく溶けて消える。

ふと辺りを見渡せば、そこには一面に白銀の世界が広がっている。道路も歩道も、交差点に見える信号も綺麗に生え揃う街路樹も、季節を意識した街に見えるイルミネーションの数々でさえ、すべてが真っ白な雪で覆われていた。これがいわゆるホワイトクリスマスというやつか。

と、それはさておきたしか天気予報では夜には雪が止むと言っていたのだが、さてこれはどうしたものだろうか。

僕の家までは歩いて20分程度。別に帰れない距離ではないけれど、雪に濡れて帰るのはあまり好ましくない。

試しに雪の積もる歩道の一角に足を踏み入れてみれば、およそ靴底がよく沈む程度には深さを感じることが出来る。

「…これくらいならまだ大丈夫か」

看板を店頭に掲げた僕は、店内へと戻り片付けにかかる時間をざっと計算してみることにする。

「テーブルと食器の洗い物がだいたい30分くらいで…明日の仕込みは終わってるでしょ。売上金はいつもの場所にしまっておくとして…ええつと…あとは…?」

やり残しのないようにいつもの作業を声に出しながら、一つ一つ指を折って確認していく。

今日一日暇だったこともあり、出来る限りの仕事はすべて片付けたはず…なのだがたまに抜けてしまうことがあるものだからたちが悪い。どうにも詰めめのがさが僕の悪い癖だと友人からよく言われていたことを思い出す。

「そういうのって本人の自覚が薄いんだけどどうやって直すのかな…。つと、そういえば…」

誰に聞かせるともなく独り言を呟いていた時、つい先刻デバイスへ

連絡が来ていたことを思い出す。ちやうど調理をしていたところだったので後回しにしたままだった。仕事なのでマナーモードにしていたため音は聞こえなかったが、デバイスの振動からするにメールが何通か届いているような気がする。

仕事を綺麗に方付け終わったことを確認した僕は、厨房に置いてあったデバイスの元へと足を運ぶ。

『いまから一緒に歌おうぜ!』

『あんたも飲みに来なさいよ! どうせ暇でしょ!』

「ええつと…律たちは…いまからカラオケ? ははっ、楽しそうだね。…夏海は居酒屋? …うわあ…こっちはなんともめんどくさそうな…」

そこに届いていたのは友人たちからの、ある意味クリスマスらしい興奮したようにテンションの高いメールの数々だった。くだらない内容の中には含まれており、思わず声に出して笑ってしまう。

…そういえば、風飛の街で生活をしている元学園生は意外と多いと、以前誰かに聞いたことがある。

魔物との戦いが終わったことでこの街に留まる必要もなくなったわけだが、長い時間を過ごしたこの地に愛着を持った人たちは予想以上に多かったという事なのだろうか。あるいは別の理由かもしれないが、それを僕が知る由もない。

一方で、まさにいま同じ大学に通っている学友や、こうして連絡をくれる友人たちの状況はしっかりと把握しているつもりだ。…こういうつながりは大人になったとしても大切にしたいと心から思う。

…あとは…ん、このメール…どういう意味…?

——カラン、コロン。

と、突然に何の前触れもなくドアの鐘が鳴る。デバイスを眺めていた僕は反射的に入口へと顔を向け、そして来客者の姿を見て驚いた。そこにいたのは、僕と同じくここで働くもう一人の従業員。

クリスマスは大切な用事があるからと僕にシフトを押し付け、いまは彼女が大事にしている妹とのパーティを楽しんでいるはず…のだが…。

「まったく酷い雪よ。傘を差しても濡れるんだからたまったもんじやないわね。悪いんだけど転校生、タオルを取ってくれないかしら？」

「うん、それはいいけど…なんでここにいるの。瑠璃川さん」

彼女の名前は瑠璃川春乃。文字通り目に入れても痛くないとばかりに妹である秋穂ちゃんを大切にする自他ともに認めるシスコン少女。一に秋穂ちゃんでも秋穂ちゃん、世界が敵になろうともその想いが変わることはないと言言できるほどに妹愛に満ちた彼女だが、だからこそ今ここにいることが信じられない。

「あら、さつきあんたにメールを送っただけけどまだ見てなかったの？」

「ええつと…。僕も仕事が終わったのがついさつきまで閉店作業に入っていたからメールは見えてないよ。他の人からも連絡とか来てたし」

「けっ、いつでもモテモテで大層なことね。…あたしはね、追い出されたのよ。風紀委員長…冬樹の姉の方に。…もうそろそろ時間ですから出ていって下さい!! こんな理不尽であるのかよ!!」

「モテモテって…まあいいや。それよりも話を聞くから、ほら濡れた服はこっちで乾かしなよ」

会ってから時間も経たないうちにヒートアップする瑠璃川さんに若干引きつつ、ひとまず風邪を引かないようにと部屋を暖め直す。

もうすぐ帰ろうと電源を落とした暖房機器のスイッチを入れ、彼女のコートとブーツをストーブの熱が当たる場所へと移動する。

「少ししたら温かくなると思うけど…それにしたってなんでここに来たの？ 学園からなら家に帰るのと同じくらいの距離でしょ」

「そんなのあんたには関係ない…こともないか。秋穂と会えない以上あたしだって帰ろうと思ったのよ？ だけどあたしの可愛い秋穂があんたにお土産ってケーキを…：…うう…秋穂お…：…あたしの天使い…：マイエンジェル秋穂おお…：…」

だめだこりゃ。

相も変わらぬマイペースで落ち込み始める彼女を尻目に秋穂

ちやんからの差し入れであるらしいケーキの箱を手取る。中には、シヨコラ、シヨートケーキ、モンブランにタルトと4つのデザートが綺麗に並んでいる。

中に入っている保冷剤を見つけてから少し考えことをしつつ、外は寒いから大丈夫だとは思うけど、少し冷やしてから食べようと冷蔵庫の中へと一時的に保管しておくことにする。

「あら、今食べないの?」

ちやうど冷蔵庫の扉を閉める時、少し立ち直ったらしい瑠璃川さんから声を掛けられる。

「瑠璃川さん、お腹すいてるでしょ? せっかくだし材料が余ってるから料理でも作ろうかと思うんだけど」

「…そういうえば可愛い秋穂ちゃんの写真を撮るのに夢中で何も食べてなかったわね。けど、あんたはいいの? どこかに行こうとしてたんじゃないの?」

彼女の言葉を耳に入れながら、材料に目を配り何を作るかを考える。

マスターには余りそうな材料を好きに使って良いと言われてるので、遠慮く好きに使わせてもらおう。

「連絡が来てたからどうしようかと思ってたんだけど。まあ瑠璃川さん相手にクリスマススを過ごすのも悪くはないかなって」

「てめえ上等だ。表へ出ろこら」

僕はともかく瑠璃川さんは割と食が細い。クリスマス用にととつてあるチキンを用意することも出来るのだが、ケーキ2個分を考えればもう少し小さいお皿の方が良い気がする。

「あんた随分考えてるけど、そんなに材料があるわけ? 今日の売り上げいくらよ」

「3, 050円。ハニーストセット3つとコーヒー2杯」

「…マスターってクリスマス用にチキンとか仕入れてなかったかしら」

「…10本くらい在庫が見えるね。お客さんの数より多いんだから笑っちゃうよ」

このチキンたちはきつとマスターが食べることになるのだろう。残念なことだ。

今頃家族サービスという名のクリスマスパーティーを楽しんでいるだろう。クリスマスに家族と過ごせるなんて何年ぶりかしら、なんて喜んでいたのでから今日くらいはいい夢を見て欲しい。

結局、チキンは切って小分けにし皿に並べることにした。

他にもリースを模した海戦サラダ、クリームチーズをのせたクラッカーに、少量に抑えたフライドポテトと、見た目クリスマスらしいメニューをテーブルの上に並べていく。

少し多く作りすぎた気もするけど、興が乗ってしまったので仕方がないと自分に言い聞かせる。瑠璃川さんには多くなってしまうかもしれないけど余りそうな分は僕が食べれば問題ないだろう。

「相変わらずあんたって美味しそうな料理を作るわね。いつそ喫茶店に出してみたら？」

「ははっ、さすがにこれでお金はもらえないよ。ただの趣味みたいなものだし、身内だけのメニューってことでよろしく」

実は結構自信作だったから褒められることは素直に嬉しい。

以前花梨さんに教わった「誰かのことを想って作る料理は美味しくなる」という教訓は、今も僕の心の中に活きている。瑠璃川さんが喜んでくれたのなら、それはきつと上手くいったのだろう。

「飲み物はシャンパンでいいかしら？ これもマスターが発注してみたいだし遠慮せずにもらっちゃいませよ」

「…マスター、どれだけクリスマスにお客さんが来ると思ってたんだろう」

いつも人の良いマスターを脳裏に浮かべながら、すぐに気持ちを切り替えて料理の並んだテーブルに着く。

瑠璃川さんが用意してくれたシャンパングラスを持ち上げると、彼女も同じことを考えていたのか胸の高さまでグラスを持ち上げる。

「メリークリスマス」

そして、僕たちのささやかなパーティは幕を開けた。

やっぱり美味しいわねと料理に舌鼓を打つ瑠璃川さんに対し、それはどうもと隠すこともせず素直に喜ぶ僕。

今日のパーティはどうだったの？ と尋ねてみれば秋穂ちゃん成分9割の、パーティの様子がほとんど伝わってこない、とても瑠璃川さんらしい話を聞かされる。

サンタのコスプレをした秋穂ちゃんが可愛い。少し恥ずかしそうに照れて俯く秋穂ちゃんが可愛い。怒ったようにほっぺたを膨らませる秋穂ちゃんが可愛い。ケーキを美味しそうに食べる秋穂ちゃんが可愛い。

いつそ洗脳しに来てるのではないかというくらいの秋穂ちゃん情報だったのが聞き慣れている僕からすれば問題ない。むしろこれだけこの話は続くのだろうと感心するほどだ。

食も進み、ケーキをテーブルに並べた後も色々なことを話した。

毎年年末年始は瑠璃川さんと秋穂ちゃんともに実家に帰省するという話。

秋穂ちゃんがそろそろ受験勉強を始めようとしている話。

先日マスターの娘さんに会った後で「あれから君の話ばかりだよ」と凄まじい眼光と笑みを浮かべていた時の話。

普段顔を合わせているのによくもこれだけの話が出るものだと感心するほどに話題は尽きない。

例え呆れることはあっても、彼女と過ごす時間をつまらないと感じたことなど一度もない。

そして、だからこそ考える。僕はどうすべきなのか。それは正しいのか、と。

「…あんだ、今日はよく考えことをしてるわよね。どうしたのよ」
気が付けば瑠璃川さんの瞳は僕を捉えていた。

テーブルに着いた左手に顎をのせ、ほんの少しだけ不満そうな表情で彼女は言葉を告げる。

「まったく。せっかくあたしの秋穂ちゃんが用意してくれたケーキなんだからもっと美味しそうに食べなさいよ。…なんかあんださっ

きから心ここに在らずって感じよ」

実に的確な表現だと、他人事のように僕は思う。

確かに一つ、多分大事な決断を迫られているような気がして僕の意識は逸れている。

だけどそれがもし間違えだとしたら。僕の考え過ぎなだけだとしたら。

それが怖くて前に進むことが出来ないでいる。

もういいじゃないか、今日は楽しかった一日で終わりにしよう。まるで僕自身の声のように、それは心の中で甘く囁きかける。

そうなのかな…そうなのかもしれないと、そんな風に思ってしまうのは僕の弱さ故だろうか。

「…だけど、それじゃ駄目なんだよね」

思い返すのは先のデバイスに届いていた一通のメール。

最初は意味がよく分からなかったけど、今にしてみればとても重要なメッセージであることに気が付く。あれは彼女が僕に向けた言葉だったのだ。背中を押し、前へと進んで欲しいという僕への「告白」。

それならば答えないわけにはいかないだろう。

あの時出来なかった答えを、僕はいま持っているのだから。

「…瑠璃川さんは、どうして今日ここに来たの？」

沈黙を破り、伝えるのは最初の問いかけ。

僕は覚えている。そこに明確な答えをもらっていないことに。

「…なんであって、それは秋穂からの差し入れをあんたに届けるために」

「違うよね。だってあれは瑠璃川さんが買ってきたものでしょ？」

最初に気が付いたのは保冷剤を目にしたときだった。別に それ自体秋穂ちゃんが用意してくれていた可能性もあるが、僕にはどうも秋穂ちゃんが用意してくれたようには思えなかった。

そもそも差し入れというのも不思議な話だった。

瑠璃川さんの言う通りならば冬樹さんに追い出されなければ今もなお秋穂ちゃんの部屋でクリスマスパーティーを楽しんでいるはずである。それなのにお土産？ まるで僕に会うことを想定しているか

のように準備が良すぎる。

「自惚れかもしれない。考え過ぎなだけかもしれない。それでも、僕は瑠璃川さんに伝えたいことがある」

「…ちよつと待ちなさい。あんたの言い分は分かったし言いたいことも分かるような気がするんだけど」

届いたメールにはこう書いてあった、『頑張ってください』と。彼女に背中まで押されてしまったのは、僕は一步を踏み出すしかない。

それが秋穂ちゃんへの、かつて僕に気持ちを伝えてくれた女の子への誠意だと思うから。

「好きです。瑠璃川さん。僕と恋人になって下さい」

「えつ…ああ…ううつ…」

額に手を当て顔を逸らすように俯く瑠璃川さん。

言ってしまったものは仕方ないと開き直る僕とは対照的に、珍しく顔を赤らめてその口から上手く言葉を話すことが出来ない様子だ。
…いや、やっぱり僕も恥ずかしいかも。

そんな僕たち二人が、時間と共に落ち着きを取り戻す頃に瑠璃川さんからの返事が届く。

「転校生。あんた秋穂にまんまと乗せられたわね」

「…えつ？」

だけどそれは、予想してなかった一言だった。乗せられた？ 秋穂ちゃんに？

「えつと、どういうこと？」

「…まず最初に言つとくけど、これは正真正銘秋穂からのあんたへの差し入れだから」

…秋穂ちゃんからの差し入れ…本当に？

「だから待ちなさいって言ったじゃない！ 的外れな推理を聞かされるあたしの身にもなりなさいよ！ いい？ もう一度言うけど、あんたとあたしは秋穂に嵌められたのよ！」

「嵌められた…？ というか瑠璃川さんも？」

はあ、と深くため息を吐く瑠璃川さんは、ようやく合点がいったと

の表情で僕に真実を告げる。

「良く聞きなさい。あたしだって最初は変だと思っただけで、まるであんたに会うことが前提みたいな差し入れを渡されたんだもの。そりゃあ疑うわよ」

「…その時に何か聞かなかったの?」

「聞こうとしたら秋穂ちゃんが『届けてくれなきゃお姉ちゃんとは口をきかないから』なんていうからああああ!!」

思わず乾いた笑みを浮かべてしまう。

「…ということはなに? 結局僕の考え過ぎだったってこと?」

「うわあ…すつごく恥ずかしいんだけど、もう帰って良いかな?」

あまりの恥ずかしさに現実逃避を始める僕は窓から外を見る。吹雪いている。駄目だった。

「…って、外がすごいことになってるんだけど! これ帰れないんじゃない?」

「はっ? あんた何言って…:ちよつと嘘でしょ…。:あんたどうするのよこれ」

ドン引きである。

外に出ることは出来ず、しかもこの微妙な空気。駄目だ、一刻も早くこの場を離れたい…!!

「ちつ、仕方ない。おい転校生。あたしは決めたぞ」

魂が抜けたように呆然としていた僕を余所に、瑠璃川さんは何か決意を固めたように真剣な表情で話を持ちかける。

「食事も電気もあるんだからいつそ泊まっていけばいいのよ」

「…はい?」

「ほら、あんたはさっさと寝床を作りなさい! その間に今度はあたしが料理を作るわ。こうなったら今夜はとことんパーティよ!!」

「やばい、瑠璃川さんが変なテンションになってる。」

「…けどまあ、ここは素直に彼女の話に乗っかっておこう。」

彼女の耳が赤い理由も、今はまだ聞かない方がいいのかもしれない。

「大丈夫。これでも前に進んだってことだよな?」

どこまでが嘘で何が本当なのか。

それは僕には分からないし、きつと知らないほうが良いのだろう。彼女の「答え」は分かりにくくて、だけどいつかは言葉にして返してくれるものだと思う。

「…なにあんた人の顔を見てにやにやしてるのよ。気持ち悪い」

「酷い言い草だね。それより毛布の準備は出来たから、仕切り直そうよ」

「……………あんたがそれをいうのね」

「…え？ なにか言った？」

「何も言っていないわよ！ おら、暇なら手伝え！」

「瑠璃川さん。大好きです」

「うるさいつつつてんのよ！ さつさと皿を持ってきなさい！」

僕と彼女の新しい物語は、きつともうすぐそこに……………。

彼女が目を閉じたその先で、しかし少年と少女は新たな物語を作らなかつた。

少女は言った。なかつたことになどしないで欲しいと。

少年は言った。きみはそれでいいのかと。

少女は告げた。自分はもう大丈夫だと。だから彼女と向き合って欲しいと。

少年は告げた。これからも君を傷つけてしまうことになる。それで本当にいいのかと。

少女はもう一度笑った。もう手遅れなのだ。それならばせめて私の大切な人には笑っていてほしいと。

少年は今度は笑った。終わりかどうかなど決めるのは自分たちなのだ。僕はきみと出逢えてよかったと。

少年と少女は新しい物語を作らなかつた。

ボロボロに破れたページを挟んでなお、目を閉じた彼女に気付かれなくとも新たなページを書き記す。

書き記し続けていく。

真つ直ぐすぎる少年と、へそ曲がりて不器用な彼女のために何が出来るのか。

それが分かった時、今度は私が物語の読み手になろう。

それは少女のみが知る、誰にも読まれることの無いもう一つの物語。

《これは私の物語 了》

リーズン・フォー・ビーイング

その少女は戦場の中で立ち尽くしていた。

瞼を閉じ両の手をだらんと下げ、その身が戦場の中に在ることを知らぬとでも言うように少女はその場に在った。

空で生じる眩い閃光が瞳を焼こうとも、周囲で爆ぜる轟音が鼓膜を揺らそうとも少女は動かない。それは少女が待ち望むものではない。

待つ。待つ。待つ。

勝利のために役割を果たす為、仲間たちは己が敵と対峙しその身を戦へと投じる。

光が熱を伝えるたび、風に揺らめく木々の震えを聞きたび、焦る気持ちは次第に広がっていく。

だが、少女は一歩たりとも動かない。

知っているから動けない。分かっているからここを離れるわけにはいかない。

彼の少年の告げた名の、最も強き者を倒すことこそが少女の役割。

「……さあ……来なさい……」

敵が森の木々の中にその身を溶かした以上、その姿を見つけることは難しいだろう。

仮に魔力で視力を強化しても対象の穩形を破れるとは思えないし、もし上手くいったとしても結局のところその異常なまでの速度を捉えきることが出来るとは考えにくい。

——こちらとしては魔法による勝負に持ち込みたいところだけど、それが自分にとって不利な状況であると相手は理解しているはずだ。となれば、敵の狙いは体術による接近戦。

出来ればそれは避けたい。その類稀なる体術と人の域を超えた速度、そして予測不可能な忍術はつきりとした脅威であり正直勝てるかどうかはやってみなければ分からない。

…まったく、とんでもない化け物を押し付けられたものね。

心の中での少年に愚痴を零しながら、しかし言葉に反して何故か気持ちは高揚する。

共に魔物と戦う仲間これほど強い味方がいるのだと改めて感じた心強さ。その強敵を相手に自分の力を思う存分に振るい試す事のできる嬉しさ。もしくはもつと別の、なにか言葉に表す事など出来ない特別な感情。

あるいは、そのすべてを以てして、少女はいまこの戦いに臨んでいた。

「……っー」

瞬間、張り巡らせていた魔力が少女の身に危険を察知させる。

弾ける様に地面を蹴りあげその場を離れる。立ち昇る土埃の影の中、小さな投擲物が重々しい音と共に地面に刺さるのを視界の隅に映しながら、その瞳は射線のその先を睨むように見つめる少女は、しかし敵の姿を見つけないことが出来ない。

——それなら……!!

身体に少しずつ纏わせていた魔力を両の手に集中させ、前方あたり一面に雷の雨を降らせる。

激しい閃光とともに雷鳴が刹那に轟く。鋭い雷の槍は木々を切り倒し少女の視界に見渡すことが出来るだけの焼け野原を作り出す。

だが、そこに人の影などありはしない。

「残念。こっちツスよ」

背後に気配を感じる間もなく声が耳に届く。

その言葉に振り返ることも出来ず、少女はその身に衝撃を受ける。背中に魔力の乗った掌底を受け、少女は苦痛に顔をゆがめる。口からは唾液と共に酸素が零れ、押しつぶされた肺が呼吸を求める数瞬間、意識が思わず敵から逸れてしまいそうになる。

だが、少女は慌てることなく状況を分析する。こういった状況が初めてなんてことはない。長い時を生死の狭間で歩んできた少女にとって、対峙する敵のペースに嵌まってしまうことがどれだけ危険だという事なのか、それは身を以て学んできた。生き残ってきた。

ギリツと唇を噛み切りその鋭い痛みでなんとか意識を繋ぎとめる。

かろうじて首を動かすと敵を視界に捉えることに成功する。未だ宙を舞う少女に追い打ちをかけるべく手に武器を用意し、マフラーに

包まれた口元は見えないが彼女の眼光は確実に仕留めるといふ敵意に満ち溢れているではないか。

少女は薄く笑う。なんて目をする少女なのだろうか。微塵も揺らぐことの無い意志で己が使命を全うするその在り方。間違いない。彼女こそ、見紛うことの無い真正正銘の私の敵なのだ。

吹き飛ばされた身体が地面に着くより先に、忍者は少女に追いつく。

戦場を誰よりも迅く駆けることを武器としている忍者にとってそれは造作もないことだった。

一思いに倒す。慈悲の心と共に手に持つ武器——小型のくなく握りしめる忍者は、しかし違和感に思わず眉をひそめる。

少女に意識があることは分かっていた。無防備な状態で重い一撃を受けてなお自身の好機とばかりにこちらから目を離さないその精神力には感嘆する。だからこそこの敵は危険なのだ、忍者は遊び心を捨て一撃を以て勝負を決めようとした。

しかし訪れた最大の好機だということになぜか忍者の頭の中では警鐘が鳴り響く。

臆している？ まさか自分が？

瞳と瞳がぶつかり合う。分かっている。敵が何かを狙っていることくらい。それを加味してなお今が最大のチャンス。…であれば、最早迷うことなどない。

「お命頂戴！」

反撃する隙など与えない。相手が反応すら出来ない速度で切り倒せばこちらの勝ちだ。そう自分に言い聞かせ忍者は少女の身体に刃を突き立てる。

——ガシャンツ。

しかし、くなくはないはなにか金属のようなものによって少女の身体に傷をつけることは出来なかった。それどころかその接触部位から奇妙な衝撃がその手に伝わってくるではないか。

「……っ！ しまった……！」

とつきにくなくを離すが間に合わない。少女に帯びる雷が、くなく

と通じて忍者の身体に流れ込む。

ダメージを受けたという程ではないが身体中に痺れが生じる。歯を噛みしめながら縮こまる身体のあらゆる部位を動かし自分の状態を確認する。

——：不覚。これはやられましたね。

数秒あれば動けるようにはなるが身体能力に制限が掛かってしまうことは避けられないだろう。完治するのに数分：どれだけ早くても数十秒。

それだけの時間を、今日の前に立ち上がる強敵の相手を務めろと言うのか。

「…いや、これは参ったツスね」

だけど敵だつてダメージを負っているはず。万全の状態でないのはお互い様だ。

大丈夫。これは決して悪い状況ではない。落ち着いてこなせば達成できない任務ではない。

「頼みますよ部長。自分、ここまでやってるんツスから……」

おそらくこの勝負はどちらが勝っても仲間の助けとなることは難しいだろう。

チームのことを考えるのであればここは一度身を引き、体制を立て直して別の策を講じるべきであろう。だが、それでは目の前の少女を倒す機会を失ってしまう。それはつまり、危険分子を戦場へ解き放つことに等しい。

勝機を掴むには今しかないのだ。自分以外には彼女の相手をするには荷が重く、さらに言えばもう一人の危険分子と合流された日には最早手の付けようがなくなってしまう。

本来であれば敵を倒すこと以上に生き残ることを信条としている忍者だが、今日ばかりはそうも言っていられないらしい。

「……すう……ふう……」

息を整え瞳は眼前の少女を捉える。

攻略法は変わらない。体術と忍術を駆使して敵をねじ伏せる。万全の状態でないとはいえ、それでも自分に有利な展開を持ち込めるは

ずだ。

忍者はくなくいを痺れる手に握りしめじりじりと距離を詰める。

少女もまた、瞳を離さぬままに身体に雷を帯びながら自身の攻撃圏内へ誘い込むべく間合いを取る。

乾いた唇に流れる汗を舌で舐め取りつつタイミングを見計らう。

空には未だ続く爆撃音の嵐。音が：衝撃が身体を揺らし、そして閃光が空を切り裂いた瞬間二人は同時に戦場を駆けだした――。

リーズン・フォー・ビーイング

衝撃音と共に地面が爆ぜる。

途端に立ち込める土煙に交じり、銀髪の少女は森の中に姿を隠す。肩で息をしながら少女は相手からの追撃がないことを確認し、咄嗟の策が上手くいったことに胸を撫で下ろす。

普段から余程訓練しているのだろう、隙という隙がほとんど見つからない。実力はこちらが上とはいえ相手は二人。個別撃破さえ出来れば勝利は目前だが、そう上手くいけば苦勞などしないというものだ。

「早く見つけて頂戴……。この勝負、思ったより難しいわよ」

その気になれば強力な魔法で吹き飛ばすことも出来るとは思うが現段階でそれをやってしまうとチーム全体の作戦を潰してしまうこともあり得る。

少しずつつ呼吸を整え、少女は煙が晴れる前に自身の置かれた状況の整理を始めることにする。

相手の戦力を分析するに、一部を除く個の戦闘力に関してはこちらのチームに軍配が挙がる。だが一方で、人数という観点から見れば相手の方が一人多いというのがこちらを苦しめる要因となっている。そして、それが何よりも懸念すべき問題なのだ。少女は考えていた。

こちらの世界の学園生たちは仲間同士で互いの力を高め合う術を

武器としている。現に力及ばない二人が手を合わせる事で実力が上の私と互角以上に渡り合っているのだ。

：もしもこれであと一人合流するなどということになれば、本格的に戦況が厳しくなることなど目に見えている。

——だからこそ少しでも早く戦況を知りたいんだけど…。彼は無事なのかしら。

徐々に晴れ始める景色に焦りを感じながら、少女は未だぶつかり合う二つの影を空に見る。

それぞれのチームで唯一空を飛べる者たちの戦いは、戦闘開始後しばらくしてから今に至るまで続いていた。

黒い翼で空を駆る者がその手に闇の球体を生み出せば、白い翼で空を舞う者はその翼から零れ落ちる羽を光に変え応戦する。

闇の悪魔と光の天使。最も強き者たちの制空権を賭けた戦いは、間違いなくこの戦いの戦局を左右することになるだろう。

そうなる問題は残りのメンバーだ。

こちらのメンバーは全部で五名いるが、しかしその中で戦闘要員として考えられるのは三名のみ。しかもそのうち一人は現在空で激しい戦いを繰り返している最中だ。

対して相手チームは六名全員が戦闘に参加することが出来る。誰がどう見てもこの差はでかいだろう。

それならば個の戦闘力でその差を補えるかといえば、実はそうでもない。

服部梓と立華卯衣。この二人は学園でも指折りの実力者らしく、私たちと渡り合うには十分すぎる強さを身に付けていると聞く。

それぞれの大将の撃破を勝利条件としている以上、彼女たちと真正面からやり合う必要はないわけだが、逆に言えば向こうからすればそれこそが最も勝利に近い手段と言える。

つまり、この勝負は既にして私たちに不利な状況で始まっているというわけだ。

「…さて、どうすればいいのかしら？」 転校生くん

ここにはいない少年の名を呟きながら、少女は手にする獲物の柄を

強く握る。

時間稼ぎか、それとも彼が間に合うことに賭けて全力で敵を撃破するか。

すつかり開けた視界の中にこちらの姿を探している少女たちを映しながら、少女が今まさに飛び出そうとしたその瞬間、背後に予期せぬ気配を感じる。

「…っ！ 誰?！」

まさか敵に背後を取られた？ そう焦りながらも少女はここで敗れるわけにはいかないと咄嗟に武器である長槍に魔力を込める。

自身を中心に風を纏い武器の威力と身体能力を向上させる最も得意とする魔法。それを以て敵を迎え撃とうと構える少女は、しかしそこに現れたものを見てため息を吐きつつ小さな笑みを浮かべることとなった。

「ふう、待ってたわ…」

そこにいたのはメンバーの一人、白藤香ノ葉の使役するお化けの形を模した式神の一体。その小さな手に持つ紙を受け取りながら、少女はそこにかかれた番号を入力し彼女のデバイ스에連絡を取る。

「もしもし香ノ葉？　すぐに戦況を教えて頂戴。私の方はあまり余裕がないの」

『遅くなってごめんなさい。まさかここまで戦場が広がるとは思ってたなかったの。ミナの様子は私も分かっている。今から掴んでいる情報をすべて伝えるよ』

電話越しに聞こえる白藤香ノ葉の声からは疲労の色が見えた。

彼女もまた勝利のために力を尽くしてくれていたのだと思うと、少女——風槍ミナは自身の心に温かな灯が灯るのを感じる。

『チトセは空で交戦中。当初の予想通り戦闘が激しすぎて近づけないから通信番号は渡していない。さらには服部梓と交戦中。：状況は芳しくないよ。服部梓が強すぎる。さらにも善戦してるけど正直どっちが勝つかは分からない。：同じくデバイスの番号を渡せていない』

「…まずいわね。さらには服部さんの相手をする以上、私はここで彼女たちを自力で切り抜けなくてはいけない…。それで、転校生くんは

？」

『…まあ、そうよね。彼とは一番最初に見つけてからずっと連絡を取り続けている。大したものよ。多分私たちの中で一番冷静に戦局を見据えている。…その、彼からの作戦に関する提案んだけど…伝えるね』

彼が脱落してしまうことは敗北に等しい。まずは第一の関門をクリアしたというわけだ。

所々歯切れの悪い香ノ葉の様子に違和感を覚えつつ、まずは転校生の安全を確認できたことに安堵するミナだったが、続く彼からの伝言を耳にすることで、その表情は一変する。

「…それ、本当に彼が言ったの？ 言っちゃあ悪いけどどうかしてるとしか思えない」

『私だつて聞き返したよ。そうしたらなんて言ったと思う？ 「大丈夫。なんとかあります」ってさ。笑いながら楽しそうに言ってたわよあの子。思わずこっちまで笑っちゃったよ』

すごい。ここまで理不尽な要求をされた事なんて今までの私の記憶にはない。

こちらの世界のやり方か、はたまた彼の要求の仕方が滅茶苦茶なのか。それは後で追及することとしよう。

「香ノ葉。いけると思う？」

『成功したらすごいね。失敗したら…まあ責任は彼に取ってもらいましよう』

「…あなたにそんな楽観的な考え方なんて出来たのね。聖域にいた頃からは考えられないわ」

『…そうだね。これが命を賭けた戦いでないというのも大きい気がするけど、一番はあの子かな？』

「転校生くん？」

『そう、彼のこと。こっちの世界の香ノ葉が好きになった男の子なんだでしょ。なら、これくらいやって見せて欲しいって…そう思ったの』

この人もまた、変わり始めているのだ。

世界を諦め、絶望し、聖域と呼ばれる安全地帯に身を隠していたあの頃からは考えることも出来ないくらいに、香ノ葉は前を進み始めている。

今回の勝負、最初に彼から持ちかけられた時にはどうしようか悩んだものだが、きつとそれは正解だったに違いない。

「…それに、さらにも何か考えている様子だったし」

『何か言ったかしら?』

「いえ、ただの独り言よ」

『そう。それよりもそろそろ通信を切るわね。あの子が動き始めたわ。何かあつたら連絡を頂戴。……ミナ、勝ちたいね』

『ええ…当たり前じゃない。勝つのは私たちは』

そう告げた私はデバイスを切り、再び長槍を手に握る。

タイミングが良いか悪いか、向こうもこちらを見つけたようで魔力を高める姿が眼に映る。

「役割は果たすわよ転校生くん。…だから、あなたはあなたの仕事をしなさい」

課せられた使命は重い。まるで綱渡りをするかのような細かい道のりを走ることになるのだろう。

だが、彼が…転校生の作戦だというのであれば、それはそれで一興だ。

学園生を魅了する彼の力の一端を見せてもらおうではないか。

「楽しませて頂戴。私を…私たちを……」

再び身体に風を纏い、ミナは森から勢いよく飛び出す。

地を蹴り、扇を構える少女へと一気に近づく。長槍で薙ぎ払うべく腕を振りかざした瞬間、近くにいたもう一人の、スケッチブックを手に持つ少女の魔法によりその動きを止められる。

描き出された蛇を操り腕を抑えられるミナだったが、魔力を集中することでその呪縛から解き放たれる。

しかし、次の瞬間凄まじい風の魔法がミナを襲う。扇から生み出された暴風がミナを押し返そうと徐々に勢いを増していく。

二人の間に立つのはマズイ。そう判断したミナは、その風に逆らう

ことなく背後に飛ぶ。一度距離を置き、息を整え再度長槍を構える。

ふう…と息を吐き、次の瞬間再び二人との距離を詰める。

——この戦いでなら、私が求める答えを見つけることが出来るかもしれない。

少女は舞う。勝利のために。自分の為に。そして仲間のために。

知らずのうちに口元を緩ませ、少女は静かにほほ笑んだ——。

T o b e c o n t i n u e ……。